
SHINOBI怒涛伝

きたきつね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHINOBI怒涛伝

【Nコード】

N1953R

【作者名】

きたきつね

【あらすじ】

忍びの世界は原作の世界だけじゃない。原作では通行人として扱われた忍達にスポットを当てた物語。どこにでもいる普通の忍び力ゲツが繰り出すはちゃめちゃ小説は一体どこへ向かうのか！？主人公は最強ではありません。また、オリキャラがメインです。設定を先に読む事をおすすめします。

プロローグ（前書き）

序盤は原作の登場人物が少ないのでご注意ください

プロローグ

木の葉の里は戦火の真つただ中であつた。

第三次忍界大戦が開戦されてから早一年。各大国は戦力を増強していき、戦況は泥沼を呈していた。

人々は混乱に陥り、そして恐怖に怯えた。

そんな中、一つの新しい命が生まれた。戦乱の中、家族はこの命を守り立派に育てる事、そして絶対に悲しい思いはさせない事を誓つた。

だが、現実是非情にも一家を飲み込んでいった。激しさを増す戦いの中、母親は命を落とした。それでも世界は止まってはくれない。慰霊碑に新しい名前が付け加えられる。ただそれだけの事であつた。

多くの犠牲と涙の上に大戦は終わった。木の葉の里では新しく波風ミナトが火影に就任した。史上最年少とあつて周囲は大きな期待を寄せた。

だが平和は長続きしなかつた。突加九尾の妖狐が里を襲い、里は壊滅寸前まで追い込まれた。ミナトが自らの命と引き換えに封印をしい事無きを得たが、被害は甚大なものだった。この騒ぎの中、父親も命を落とした。4年前の約束を果たせず、一人にしてしまった。アカデミー入学の半年前の事であつた。

「俺の不幸自慢は此処までだ！俺には前進あるのみ、未来あるのみ。いつか史上最強の忍と呼ばれるようになってやるぜ。そのためにはまず修行だ。今日は実戦形式の演習の日だからな。はりきって行くぜ！アカデミーに全速力で直行だ！！！」

んん？俺の名前？

夜星カゲツ　　よるぼし　　かげつ

夜星カゲツ　　よるぼし　　かげつだ！

大事な事だから二回言ったぞ。覚えておけ！！

登場人物設定 卒業直後（第四話付近）

第十二班

【名前】 隠ユウ なばりゆう
【容姿】 やや灰色がかった黒髪・黒瞳・黒色の軽装・黒ぶちメガネ
【年齢】 45歳
【誕生日】 7月30日
【血液型】 A型
【身長】 179.6
【体重】 68.3
【階級】 上忍
【備考】 丁寧口調 しゃれは通じない

【名前】 夜星カゲツ よるぼしかげつ
【容姿】 黒髪・灰瞳・青に赤のラインが入った服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 12月1日
【血液型】 AB型
【身長】 134.2
【体重】 25.2
【成績】 体術4 忍術5 座学5
【備考】 主人公 風遁使い

【名前】 朝華ナギト あさかなぎと
【容姿】 淡金髪・金瞳・水色を基調とした服装

【年齢】 9歳
【誕生日】 5月4日
【血液型】 B型
【身長】 130.1
【体重】 37.3
【成績】 体術1 忍術4 座学4
【備考】 医療忍術を少し使える こだわりが強い

【名前】 鳥鳴ヒバリ とりなきひばり
【容姿】 茶髪・茶瞳・赤にチェックの入った服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 11月24日
【血液型】 A型
【身長】 132.9
【体重】 22.0
【成績】 体術3 忍術3 座学2
【備考】 キレると手がつけられない 他人に頼る節がある

第六班

【名前】 犬塚ケナミ いぬづかけなみ
【容姿】 黒髪・黒瞳・青色の服
【年齢】 25歳
【誕生日】 4月15日
【血液型】 O型
【身長】 169.0
【体重】 57.8

【階級】 上忍
【備考】 灰色の忍犬 「狼牙」 を連れている

【名前】 うちはムソウ うちはむそう
【容姿】 黒髪・黒瞳・黒と灰が組み合わされた服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 7月28日
【血液型】 A型
【身長】 133・4
【体重】 20・8
【成績】 体術5 忍術5 座学4
【備考】 成績トップ 家柄にプライドを持っている

【名前】 日向ナツキ ひゅうがなつき
【容姿】 青みがかった黒髪で長髪・白瞳・日向家の標準服
【年齢】 10歳
【誕生日】 8月5日
【血液型】 O型
【身長】 135・1
【体重】 23・7
【成績】 体術5 忍術4 座学3
【備考】 分家 班員のまとめ役

【名前】 うみのウネリ うみのうねり
【容姿】 黒髪やや長髪・茶瞳・木の葉忍者の標準服
【年齢】 9歳
【誕生日】 1月11日

【血液型】 O型
【身長】 129.7
【体重】 19.9
【成績】 体術3 忍術2 座学1
【備考】 カゲツの幼馴染 ムソウをライバル視

第四班

【名前】 油女フミシ あぶらめふみし
【容姿】 黒髪・黒瞳・若草色のジャケット
【年齢】 34歳
【誕生日】 6月16日
【血液型】 A型
【身長】 187.1
【体重】 80.6
【階級】 上忍
【備考】 上役と面識がある

【名前】 黒影ヒノデ くらかけひので
【容姿】 黒髪長髪・黒瞳・黒に白い家紋が大きく入った服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 2月28日
【血液型】 B型
【身長】 135.1
【体重】 26.0
【成績】 体術4 忍術3 座学4
【備考】 極度の厨二病

【名前】 かもしかハヤシ かもしかはやし
【容姿】 銀髪・緑瞳・オレンジを基調とした服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 6月8日
【血液型】 A型
【身長】 133.7
【体重】 21.9
【成績】 体術5 忍術3 座学2
【備考】 カゲツの幼馴染 不幸キャラ

【名前】 新緑アオハ しんりよくあおは
【容姿】 緑髪・青瞳・派手なピンクの服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 4月13日
【血液型】 B型
【身長】 130.0
【体重】 30.7
【成績】 体術2 忍術1 座学1
【備考】 典型的なウザキャラ 周りに迷惑をかける

第十一班

【名前】 秋道サザンカ あきみちさざんか
【容姿】 茶髪・薄茶瞳・秋道一族の標準服

【年齢】 36歳
【誕生日】 11月2日
【血液型】 B型
【身長】 175.7
【体重】 90.2
【階級】 上忍
【備考】 余計なひと言が多い

【名前】 如月ヨモギ きさらぎよもぎ
【容姿】 黒髪・緑瞳・紺色と灰色の服装
【年齢】 6歳
【誕生日】 10月31日
【血液型】 AB型
【身長】 118.3
【体重】 11.9
【成績】 体術3 忍術5 座学4
【備考】 この歳で卒業したエリート 品行方正で公明正大

【名前】 棕鳥ツバサ むくどりつばさ
【容姿】 茶髪・茶瞳・臙脂色に家紋が入った服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 9月16日
【血液型】 A型
【身長】 140.6
【体重】 33.2
【成績】 体術3 忍術3 座学3
【備考】 カゲツの幼馴染 間延び口調

【名前】 夕日アカネ ゆうひあかね
【容姿】 黒髪おさげ・黒瞳・赤色を基調とした服装
【年齢】 9歳
【誕生日】 12月19日
【血液型】 O型
【身長】 132.7
【体重】 20.8
【成績】 体術2 忍術4 座学4
【備考】 弱気

アカデミー教員

【名前】 青宿シンマ あおやどしんま
【容姿】 黒髪・黒瞳・木の葉の標準服
【年齢】 30歳
【誕生日】 5月25日
【血液型】 A型
【身長】 173.8
【体重】 60.9
【階級】 中忍
【備考】 影が薄い

【名前】 鳥居ヤシロ とりいやしろ
【容姿】 白髪・灰瞳・木の葉の標準服
【年齢】 30歳

【誕生日】	3月18日
【血液型】	O型
【身長】	182・6
【体重】	74・5
【階級】	特別上忍
【備考】	カゲツ達の恩師 実践主義

登場人物設定 卒業直後 (第四話付近) (後書き)

ナルト達よりも四歳上です。

ただし、卒業年齢が早いので七期上になります。

9 / 25 ストーリー中に出てくる話は削除しました。

第一話 アカデミーで演習だ！

さっきも言ったけど、今日の授業は丸一日実戦形式の演習になっている。ランダムで組まれたスリーマンセルで、他のチームを捕獲して連れ帰れば合格だ。

さーで、どんな作戦でいくかな。俺は颯爽と教室の扉を開けた。

「おはよー!!」

俺が声をかけた、というより怒鳴った。

「よっ」

「おはよー」

「おはようさん」

3人から声が返ってきた。ウネリ、ハヤシ、ツバサのいつもの三人組だ。孤児院に居た頃からの親友だ。

「今日は勝たしてもらっぜ」

「まだ敵チームになると決まった訳じゃないとおもっんだな」

ツバサ君ごもっとも……ってせっかく気分が乗っていたのに突っ

込むなし！

「負ける気がしねえ！」

「ウネリ、その自信はどこから来るんだ？」

「うるせえ、お前は俺に負けっぱなしだろ」

たしかにハヤシは負けっぱなしだけど少し違う。何度か同じ班になった事があるから分かるんだけど、なぜかハヤシの班は不幸に見舞われる。他国の侵入者と遭遇したり、先生達のミスで帰還指示が飛ばされたりとか、そんな感じだ。

こいつ呪われてるんじゃないか？

「今日勝つのは俺だ」

「いや、僕だ」

「俺に決まってるんだろ」

俺もすかさず応戦した。そしたら

「俺っちだと思っようー」

その変な間延びな言い方は止めるよ・・・ツバサ。

そんな終わりのない言い争いが始まるうとした。

が、

「静かにしろー 席に着けー」

俺達の担任のヤシロ先生が入ってきた。俺的に面白くて結構いい先生だと思う。

「前置きは全て置いて、予告してた通り今日は演習をするぞ。勝てれば結構。負けた時には覚悟しとけ」

置くんかい！ きつと俺を含めたクラスの全員がツッコミを入れたはずだ。

わあ、何されるんだろ……

「誰と組むか気になってるだろ？ 早速発表するぞ」

おお！？ 待ってました！

結局、ウネリとアオハの二人と組む事になった。

ウネリは正直かなり不安だ。目立ちたがり屋のこいつは、スタンドプレーばかりしやがるんだよ。アオハは……知らね。

始まって1分。いきなり

「はあ？こいつらとっ？」

アオハが暴言を吐いてきた。なんなんだこいつは。

「ま、あたし的には適当にやって時間経てばいいって感じかな？
あはははは」

すこしは黙れ！ 一言目ですでに俺の堪忍袋はミシミシと音を立てていた。

「あーあ。つまんなーい」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「黙らんかい！！！」

あ、俺がキレる前にウネリがキレた。

「あはははは、じゃねえよ。可愛くないんだよ」

「どうして怒ってるの？」

だめだこの班。負ける気しかしねえ。今、他のチームと遭遇したら最悪だ。

シュッ

いきなりロープが飛んできた。俺はぎりぎりのところで回避した。

最悪だ。遭遇した。

後ろを振り返ってみてみると、ツバサとハヤシと一歳年上の日向ナツキの班だった。

「ラッキーついにこの僕にも運が向いてきたみたいだ」

確かにね………うん。

「ほら、油断しない。さっきの作戦で一気に決めるわよ」

あ、これヤバイかも。

途端にハヤシが正面から突っ込んできた。避けた所にトラップがあると判断した俺は

「落ち着け、三対一で一人倒そう」

と後ろで不毛な争いを繰り広げていた二人に指示を出した。

「ああ、分かってる」

こちらのペースに引き込めばこっちのものだ。こんなところで負けてられない。いくぜ！

・・・となるはずだった。なのに

「きゃああああ」

アオハが逃げ出しやがった。馬鹿だろ！絶対馬鹿だろ！！
案の上、その先にはネット的な物があり、捕まっていた。
もう知らん。

『風遁・風導流』でウネリを風に乗せ、ハヤシとの一騎打ちになった。

これは俺の父さんが編み出した風に乗せて仲間を運べる便利な技だ。

スカッ

はい？

ハヤシの幻影が消え、ただの分身だと分かった。やられた。ウネリはそのまま突っ込んでいき

「はい、二人目」

あっさりと捕まった。

「詰みだよ」

気がついた時にはもう遅かった。すっかり忘れていたツバサに後ろに回られ、チャクラを練り込んだ袋に入れられた。こんなところで風遁やったら自分がダメージを受ける。これは負けたな。

前言撤回。今が最悪だ。

結局大した見所も無く、俺達の戦いは終わった。今回の演習で俺が得た教訓は、アオハとは班を組まないようにするべきだということだった。

真っ先に捕まった俺達三人は罰ゲームとして一カ月間アカデミーの掃除をさせられる事になった。

もちろんアオハが

「あんた達のせいよ」

って言うてきた事は言うまでもない。

あーあ。下忍への道はまだまだ遠いな。

第一話 アカデミーで演習だ！（後書き）

カゲツは全然強くない普通のアカデミー生です。

風遁が使えたりするので忍術の成績は最高の5になっていますが。

次回は原作キャラを誰か一人だけ出そうと思います。

第二話 すばらしきアカデミー生活

この間は酷い目にあつた。もうあんな事はごめんだな。そんな俺は現在進行形で登校中だ。アカデミーまでのまっすぐな道だ。周りには他の生徒達も歩いてる。

「カゲツか」

名前を呼ばれたみたいなんで振り向いたら、うちの家紋が入っている黒い服を着た人が立っていた。

「イタチさん！」

この人はうちはイタチさん。俺達よりも一歳年上で、最年少で中忍に昇格した憧れの人だ。両親を早くに失くした俺の面倒を良く見てください、今でも目をかけてくれている。いつもは弟のサスケ君と一緒にんだけど、どうしたのだろう？

「今日はサスケ君と一緒にじゃ無いんですね」

気になったので聞いてみると

「昨日から体調を崩しているからな」

そい言って表情を歪めた。

よっぽどサスケの事が大切なんだろうな。兄弟がいない俺は少し寂

しかった。

「早く良くなるといいですね。じゃあ、アカデミーに行ってきた
す」

「ああ」

もう少し話していたかったけど、イタチさんは任務が忙しいだろう
から、早々に切る事にした。

「さあ！ 今日も気合入れていくか！！」

周りにいた奴が一齐に振り向いたが、俺は気にしない。

午前中はずっと座学の授業だった。トラップの張り方とか火の国
周辺の地理とか習ったけど、全部もう知ってるからかなり退屈だ。
ウネリやツバサやアオハは完全に熟睡中。俺も寝たかったんだけど、
ど、何気に座学の成績がトップだったりするんでヤシロ先生やシン
マ先生に当てられまくって寝れなかった。あと言い忘れたけど、ツ
バサは結構真面目なんでいつも起きてる。てか先生達寝てる奴らは
ちゃんと起こしなよ。

この間それを言ったら

「忍は常識よりも臨機応変さが求められる。きつとあいつらも実践向きでない座学よりも、体術や忍術の修行のために体力を温存しようという考えあつての行動だろう」

って返答が返ってきた。

……絶対それは無い。

あいつらがそこまで考えてる訳ないだろ。考えていないに100両賭ける。

俺はそう思ったけど、別に粘る理由も無いのであきらめる事にした。

午後は兵糧丸作りの実習だった。

開始5分くらいで騒ぎが起きた。みんながざわざわ言いだしたんで、そつちを見てみたら

「その分量は123…38じゃなくて123…37だろ！」

「ああ！…タイミングが0.28秒長い！！！」

って喚いてる奴がいた。

うわ、めんどくさ。

騒いでる奴はいかにもって感じに太ったナギトだ。金髪を振り乱して絶叫してる。もはや錯乱以外の何者でもない。この手の授業ではいつもこうだ。一緒に作ってるアカネっていうくの一は泣きそうになってる。

ドンマイ！

「ほらそこ手を止めるな」

やばい、こっちにも絡んできた。俺はさっさと作業に戻る事にした。

何とか実習を終えた俺達はそのまま校庭での手裏剣の授業に向かった。

「いいか！ 実戦では正確さが求められる。失敗は許されない。一撃で相手を倒すんだ！ ここにある直径30センチの的の中に各自が持っている手裏剣を投げ込むんだ。精神を研ぎ澄まし、意識を一点に集中させればきっとできるはずだ」

「要は的当てって事ですね」

「ぞっくり言ったな・・・」

「まずはムソウ、手本を見せてやれ」

「わかった」

最初は成績トップのムソウだった。投げた手裏剣は見事に的のど真ん中に当たった。

「さすがだ。いいぞ」

「俺の実力なら当然だな」

最後の余計なひと言が無ければ賞賛するんだけどな。

「次はヨモギ、お前だ」

「はい」

次は三歳年下で俺達と同じ学年に編入になったヨモギだ。こちらもど真ん中に当たった。すげえ……

「良くやった、その調子」

「ありがとうございます」

俺も負けないようにしないとな。

「次はそうだな……ハヤシ、お前がやれ」

「ちよー！ ハードル上がり過ぎじゃないですか」

確かに。

「えーい、うりゃあ！」

手裏剣は一直線に飛んでいき、きれいに的の上を通過していった。

「次はヒノデ、頼んだぞ」

ノーコメントですかヤシロ先生……

「くくく、この俺に会ったのが運のつき」

何だこいつ……

「苦しみと絶望の雨を降らせてやるっ」

うわ……

痛い！ 痛すぎるよこの人！

「くらえ！」

言動はともかくとしての的には当たった。

「はっはっは。これこS「よし、次ヒバリ」」

「聞けよ!?!」

先生ナイス！

「私？見てなさい」

自信満々なだけはあってかなり良い位置に当たった。

「良くやった。次はカゲツだ」

ようやく俺の番だ。

「わかりました」

俺は狙いを研ぎ澄ませ、フォームを意識して投げた。
手裏剣はヒバリとほぼ同じ位置に当たった。

まっこんなもんよ。

「うん、なかなかのものだ」

「次は・・・アオ八だな」

あいつか・・・！

「うん？あつたしー？」

この喋り方、嫌いだ。

「じゃあ、いくよー」

アオ八が一気に3つ投げた手裏剣は放物線を描きまっすぐ俺達の方
へ・・・・・・・・・・

へ？

ちよつと待てえええええ！！俺達は全速力で散らばった。

あのやろつ！ わざとだろ！ 絶対わざとだろ！！

「いたっ……」

被害者が出た。不幸少年ことハヤシとさっきナギトに泣かされてたアカネだ。

「あつははー。ごっめーん」

少しは責任感じる！

「見せてみな」

そう言つて出てきたのはナギトだった。ナギトは自分の手を傷口に当ててチャクラを流していた。傷口がどんどん閉じていく。得意の医療忍術だ。

「ナギト君、ありがとう」

あいつ、結構良いところあるじゃん。

「ナギト、ありがとう。アカネは医務室に行つた方がいいな。そしてアオハ、最悪だ」

同意。

「それでは再開だ。ナツキ、お前の番だ」

「はい」

「……………あれ？ 僕は？？」

ハヤシはどこまでも不幸だ。

その後もそれぞれ挑戦していった。

分かった事は、ムソウとヨモギとナギトがすごいでって事とアオハが別の意味ですごいでって事だ。

第二話 すばらしきアカデミー生活（後書き）

次はいよいよ卒業試験です。ムソウ達の結果は!?

第三話 運命の卒業試験

アカデミーは今日で全てのカリキュラムを終了した。明日は俺達にとってこれまでの修行の成果を試す事となる卒業試験の日だ。いつもならすぐに帰るんだけど、今日に限ってはこれまでの感慨なのが全員が教室に残っていた。

「明日、俺達が忍びになれるかどうかが決まるんだな」

「絶対に合格しようぜ」

「おうっ！」

そつだ。俺達はまだスタートラインにすら立つちやいない。明日、立って見せる。

「頑張るぜ」

「私だって」

「俺っちもな」

「・・・私も」

固い決意をしたところで、今日は解散になった。

「ただいまー」

俺は誰も居ない家に帰った。4年前からはずっとこの光景だ。俺でも孤独は辛い。こんな日には感傷的な気分にもなる。

……母さん、父さん。俺、頑張るよ。

写真に語りかけ、今日は明日に備えて寝る事にした。

……朝だ

今日は卒業試験当日。ぜってー受かってやる。

いつもより一時間も早く目覚めた俺はさっさと朝食を済ませ、アカデミーへ向かった。

言っておくけど、俺は朝は弱いんだ。これは結構凄い事だと思う。

俺はいつもの通学路を通っていった。

「カゲツ君」

うちの敷地の前で声をかけてきたのはサスケだった。

「風邪、治ったんだ。よかったな」

「うん！」

イタチさんはしばらく前からAランク任務に出ていない。

「今日は卒業試験なの？」

「そうだよ」

「頑張ってるね」

「おう！」

その時、門からムソウが出てきた。

「ここで何をやっている。ここはうちの敷地だ」

いきなり何を言い出すかと思えば、嫌なやつだ。

「別に何だっついていいだろ。それに門の外だからぎりぎり敷地じゃ無い」

「フンツまあいい。せいぜい今日は落ちないように努力するんだ

な
」

「言われなくても」

言いたい放題言っつてそのまま行きやがった。本当に嫌なやつだ。

「じゃあ、そろそろ俺も行ってくる」

「またね」

遅れたらまずいから、俺もアカデミーに向かう事にした。

アカデミーに着くと、早い時間にしてはかなりの人数が集まっていた。

「緊張するよ。僕もつだめだ」

ハヤシが弱気な事言っつてたから

「いつもみたいにアクシデント起こして失格とかになるなよ」

とプレッシャーをかけておいてやった。

「ウフフ。あたしが落ちると思っつて？」

木の葉の平和と安泰のためにお前は落ちろ！ アオハ。

「静かにしろー」

ヤシロ先生が入ってきた。

「分かってると思うが、今日は卒業試験だ。受かれば天国、落ちれば地獄だ。泣いても笑ってもこれが最後、悔いの残らないよう全力でぶつかってこい!!!」

「『はい!!!』」

「一人ずつ順番に呼ぶから名前を呼ばれたら入ってこい」

いよいよだ………

「朝華ナギト」

「は、はい」

・
・
・
・

ドアが開いた。

ナギトは満面の笑みで丸顔をもっと丸くさせてた。
合格だな。

「うちはムソウ」

「・・・」

・ ・ ・ ・

「当然の結果だな」

まあここはね。

「うみのウネリ」

「おっす」

・ ・ ・ ・

「だっしゅああああ!!!!」

「やったな、ウネリ」

「おう!!」

ウネリは受かったらしい。

「かもしかハヤシ」

「え、あつ、はい！」

あいつ、大丈夫か？

・ ・ ・ ・

ガチャリ・・・

「・・・・・・・・」

おい、まさか・・・

「やったよ」

「え？」

「合格だよ！」

良かった。って俺がほっとしてどうするんだ。

その後も順調に試験は続いていった。俺は名字が「よ」だからまだまだ先だ。

「新緑アオハ」

「わっはっはーい」

・ ・ ・ ・

「うかつちゃった、うかつちゃったー」

チッ

以外と簡単なのか？ずいぶんと進んだけど、脱落者は全然出ねえ。

「身代ザコイ」

「はい」

・・・不合格

あ、出た。

「椋鳥ツバサ」

「はい」

次はツバサの番だ。成績は中の中だけど、これまでの合否を見れば

楽勝のはずだ。

・
・
・
・

ツバサが出てきた。

「どうだった？」

「もちろん合格だよー」

これでウネリ・ハヤシ・ツバサは三人共合格だ。後は俺だけだな。

そうこうしているうちに次が俺だ。

「夜星カゲツ」

きた！

「はい」

俺は返事をする、試験をする部屋に入った。

部屋の中は意外と殺風景で、目の前にヤシロ先生とシンマ先生が立っている。

「お前で最後だな。試験の内容は分身の術だ」

なるほど、分身の術か。俺にかかれば楽勝だな。

「始め！」

「分身の術！」

俺は素早く印を組み、分身を三体出した。

「よし、合格」

やった・・・やったぞ！合格だ！！

「今日からはお前も木の葉忍者の一員だ」

ヤシロ先生が俺に額当てをしてくれた。超感動する。

「ありがとうございます！」

俺が部屋から出ると、ウネリ達がやってきた。

「どうだったよ」

「合格に決まってるだろ」

「おめでとう」

「そっちなこそ」

俺はウネリと拳を突き合わせた。

「僕達四人共合格できたんだね」

「ああ、やったな」

そっだ、俺達はやったんだ。憧れの忍びになれたんだ。

結局、不合格者はザコイの1名だけだった。不合格者はもう一年アカデミーで修行し直すらしい。

明日は早速班決めがある。誰とでもかまわねえ。俺が引っ張っていいだけだ。

「あたしって何てかわいいくの一なのかしら？」

「けっ、このヒノデ様と同じ班になろうって奴は誰だ？」

若干二名なりたくないやつらがいた。

とにかく、明日から俺達の忍びとしての生活が始まる。

「燃えてくるぜ！」

全員の注目を浴びたが、俺は気にしない。

第三話 運命の卒業試験（後書き）

あつという間にアカデミー編終了です。

次回は恒例の班決めと自己紹介になります。

カゲツは誰と組む事になるのか？

もう分かっている人もいると思いますが、ご期待下さい。

第四話 結成！第十二班

やった、やったぞ。ついに、ついに。

今日から下忍だあああああああ！！！！

この日を待ってたんだ。張り切っていくぜ！

俺は家を飛び出し、全速力で昨日まで授業を受けていたアカデミーに直行した。

「ひゃっはー」

奇声を上げながら、アカデミーの廊下を走ってたら

ドスッ

ぶつかつた相手は可愛い女の子・・・なはずも無く、メガネをかけたいかにもお堅い感じなおっさんだった。

「君、少しは気をつけなさい。そんなんじゃ立派な忍びにはなれませんかよ」

「す、すみません」

いきなり水を差された。

あちゃー

気を取り直して、教室に行ったらみんなもう来てた。どうも俺が最後っばい。

「おせーぞカゲツ」

「そっだそっだ」

「分かってるよ」

さっきの一件ですっかりテンションが下がっちゃった。

「はあ・・・」

「何しよぼくれてるんだよ、今日は記念すべきスタートじゃないか」

ウネリもなかなか良い事言うねえ。

「あ、ヤシロ先生が来たよ」

ハヤシに言われて見てみたら、大量の資料を持ったアカデミー教員がいた。

「まずはこれを言わないとな。お前ら！ 良くやった！」

教室全体から歓声上がる。

「今日からはスリーマンセル+担当上忍で行動してもらおう。班はチームバランスを考えてこちらで決めさせてもらった」

「えー」

「そんなー」

まあ、仕方ねえだろうな。成績下位のウネリとアオ八とかが組んだら悲惨だろうし。

「黙れ！ 忍びは常に危険と隣り合わせだ。だからベストと思われる組み合わせにした」

まだ文句言ってる馬鹿がいるけど、ヤシロ先生は無視して班の発表を始めた。

「第一班………」

「第四班 黒影ヒノデ・かもしかハヤシ・新緑アオ八 担当上忍は油女フミシさんだ」

あーあ、またあいつ外れくじ引きやがった。ハヤシは茫然自失になっ
てる。

「第六班　うちはムソウ・日向ナツキ・うみのウネリ　担当上忍は犬塚ケナミさんだ」

お、ウネリとムソウが同じ班か。てか血継限界二人かよ。

なかなか呼ばれねえな。今残ってるメンバーならツバサと一緒にやりたいんだけど。

「第十一班　如月ヨモギ・椋鳥ツバサ・夕日アカネ　担当上忍は秋道サザンカさんだ」

結局最後かよ。それにしてもこの班優秀過ぎやしないか？　バランスが取れてない気がするな。

「第十二班　夜星カゲツ・朝華ナギト・鳥鳴ヒバリ　担当上忍は隠ユウさんだ」

隠ユウ？　だれだそれ？

決まった班はそれぞれで顔合わせをするらしい。で、今は屋上で隠先生とやらを待ってるってこと。

「これからは同じ班だね。よろしくー」

ヒバリが声をかけてきたから適当に返事をしておいたけど、喋った事もあまり無いし、良くわかんない。ナギトはすでに睡魔に襲われ始めているみたいだ。

「すみませんね。遅くなってしまって」

予定時刻から遅れる事二分。ユウ先生と思わしき人がやってきた。

やばい、さっきのぶつかった人だ。

なんてバッドタイミング。よりによって結成当日に注意されたとかないわあ・・・

「先生おーそーいー」

「ははは、すみませんねえ」

丁寧な口調が何か嫌だ。

「では気を取り直して、今日から君達には班を組んでもらう事になるのですが、その前に君達の事をもっと知りたいですねえ。簡単な自己紹介でもしてもらいましょうか」

自己紹介か。ベタだな。

「自己紹介って言われても、具体的に何を言えばいいんだ？」

いつの間にか起きたナギトが思いっきりタメ口で聞いたら

「そうですねえ。例えば私の場合なら、名前は隠ユウ。好きな物は木の葉の里。嫌いな物は口先だけの無力者。得意な術は火遁全般。趣味は書道で将来の目標は歳も歳だし特に無いって感じですかね」
「って聞いてもない事をさらけ出しまくってた。」

「じゃあ、そのあなたからお願いしますよ」

「はい。私の名前は鳥鳴ヒバリ。好きな物はヒ・ミ・ツ。嫌いな物は爬虫類かな？得意な術は投剣連打。趣味はガーデニングで将来の目標はくの一初の火影になる事です」

意外と普通だった・・・

「次は真ん中のあなたです」

俺か。

「俺の名前は夜星カゲツ。好きな物は新品の忍具。嫌いな物は戦争とか。忍びとしてはどうかと思うけど、できるならそういうのは避けて通りたい。得意な術は風遁系統。趣味は天体観測。それから目標は歴史に残る忍びになる事かな」

「最後はあなたです」

「俺の名前は朝華ナギトだ。好きな物は焼き肉。嫌いな物は人の足を引く張る奴。得意な術は医療忍術だ。趣味は新しい兵糧丸の作成。目標は医療班の部隊長になる事だ」

一番現実的な目標を言いやがった。ちよっと面白かった。

「大体分かりました。ところでみなさん、卒業試験と下忍試験は別だという事を知っていますか？」

何を言ってるんだこの人は。

「どっという事ですか」

「卒業試験はあくまで下忍になる可能性のある者の選考。下忍試験に合格できなければ、自動的にアカデミーに送り返される事になります」

「「「はあ!?!?!」」」

みごとに揃った。

「ですがご安心下さい。この試験はチームワークを測るもの。君達はすでに基準を満たしています。私の方から合格と言ってあげましょう。その代わりに明日、私の厳しい訓練を受けていただきます。容赦はしませんよ。死なないように気をつけて下さい」

いやいや、どこを見てそう思ったんだよ。どこにチームワークがあるんだよ。合格は嬉しいけど、訓練って何ですか!?! 死なないよ うにっってどっただけですか!?!?

「明日の朝五時にここに集合。話はこれだけです。では」

ユウ先生はそれだけ言い残して、白い煙と一緒に消えた。

「……………」

「……………」

「……………」

三人そろって絶句だ。あ、たしかにチームワークいいかも。ってそんな場合じゃない！

「ちょ、何よ今の。訓練って何？」

ヒバリもパニックだ。

「まあ、良く分かんないけど、合格できたし良いんじゃない？」

いや、たしかにそうだけど。

「はあ……………」

俺はため息をつく事しかできなかった。

明日何があるんだろ……………憂鬱だ……………

第四話 結成！第十二班（後書き）

この年の卒業生は36人です。

無理です。絶対無理です。いざとなったら真つ先に逃げます。はい。

・・・三十分後

「みなさん集まったようですね。では今日これからの事を説明します。君達にはこれから第三十九演習場の最深部まで行ってもらいます。アカデミーでの演習とは格が違います。なめないほうが無難でしょうね。内部の様子はここでは言いません。その都度、臨機応変に対応する事が求められます」

嫌な予感しかしねえぞ。

「さらに、何人か私の知り合いに刺客をやってもらおうように頼んでおきました」

まじですか。

「先生、最深部まで行ってどうするんですか？」

「そうですね・・・それは着いてのお楽しみです」

結局何も分かんないじゃん。

「では、そろそろ準備はいいですね」

「良くないです」

ばっちり意味不明です。

「では私は先に行ってます」

ユウ先生完全無視。

どうしてこの班は人の話を聞かない奴ばっかなんだよ!?

「どうする?」

いや、こっちが聞きたいから。まあ取りあえず入らなきゃ始まんないからな。

「取りあえず、演習場に向かおうぜ」

「そうだな」

「りょうかい」

俺達の目の前に規格外のでかさの洞窟がある。こんな場所が木の葉にあったんだ・・・

「ここが第三十九演習場か」

「やべえ、帰ってえ」

本能が拒絶してるよ、これ。震えが止まらないんだけど、どうしよう。

「本当に入るの？」

「それしかないだろうな」

「多分トラップが仕掛けられてるだろうから、気をつけていこう」

「……………」

「……………」

「……………」

壮絶な一步目の押し付け合いが始まった。
この雰囲気、俺には耐えられない。

「いけよ、ほら」

ナギトの背中を押してやった。

「おい、ちよっ、まっ」

ヒバリと俺は全速力で木陰に隠れる。

……………

何も起こらなかった。

「なーんだ。なんにもないじゃない」

「期待して損した」

「人に行かせておいて期待するな！」

これで安心して入れる。君の苦勞は無駄ではないのだよ。うん。

予想に反して洞窟の中は殺風景だ。トラップも無ければ、刺客も現れない。

「なあ、道合ってるよな」

いや、合ってなきゃ困るから。

「間違っわけないでしょ。一本道なんだから」

「確かN」「うわ!!!」「」

いきなりナギトの姿が消えた。もとい穴に落ちた。

「ナギト君！」

やべ、あいつチャクラ吸着苦手なんだっけ。俺は急いで足元からチャクラを放出した。

「待ってる！」

いきなり世話焼かせやがって。俺は壁面を全速力で下り始めた。
ナギトは5メートルくらい下を現在進行形で落下してる。

あと4メートル

3メートル

2メートル

1メートル

「掴まれ！」

ナギトに向かって手を伸ばした。一回目はすかつて、二回目で見事
掴んだ。

「ぐおおおお！ 重い！！！」

ナギトの体型がもろに悪影響を与えている。

「ごめん……」

「うわ！ 話しかけるな！」

これはキツイ。無茶苦茶キツイ。少しはダイエットしろよ！

「ぐおおおおお！」

「登った！」

何とか登り終えた俺はその場へたり込んだ。

「良かった、二人とも無事で」

「まあな」

息が上がりまくってる。

「くそ、俺とした事がこんなトラップに」

トラップじゃないと思うのは俺だけ？

「ただの事故だと思っけど」

俺だけじゃ無かった。

「地上だ！」

やっと洞窟を抜けた。外の空気が気持ちいい。

「地図ではどっちに進む事になってるんだ？」

「この川を少し下流に行って、それから崖を登れば近いな」

またかよ・・・

「で、どっつするよ。川岸が無いじゃん」

「いかだでも作りましょ」

「今からかよ」

ナギトは文句言ってるけど、それくらいしか方法が無いからヒバリの案を採用する事になった。

「よし、張り切っていこー」

やたらとテンションが高いヒバリを先頭に俺達は川下りを始めた。

開始五分

「やばいーやばいって!」

「ちよっとどうすんのよ」

「俺に聞くな!」

ベタな事に滝出現。あはは、全然笑えん。なんて言ってる場合じゃないな。

「俺に任せろ。風遁・風導流」

この術は仲間を風に乗せて送る技だ。結構使える。

・・・ってこれじゃ俺だけ取り残されるじゃないか！

「ひいー助けてー」

飛び移れるか？ いや、無理だ。でもやるしかねえか。

突然何か俺に巻き付いた。

！？

俺の体が宙に浮いて、川面に向かって一気にダイブ！

そして、1メートルもない岸に引き揚げられた。

た、助かった。

「危ないところだったね」

「サンキュー」

ヒバリが忍具を投げて俺を引き上げてくれたらしい。なぜか今日は俺だけ苦労してる気がする。

「そういえば、トラップも刺客もまだ現れていないな。無いに越した事はないんだけどさ」

俺はさっきから気になってる事を言ってみた。いくら何でも、さすがにこれはおかしくないか？

「その事なんだけどさ・・・」

ナギトがなぜかバツの悪そうな顔をしている。

「どうしたんだ？」

「何なの？」

気まずい沈黙が流れる。

「川下じゃなくて、川上だったっぽい。悪い、間違えた」

もっと気まずい沈黙が流れる。

「はい？」

もうやだ、俺は何も考えないぞ。現実逃避してやるからな。

「ちょっと、今までの私達の苦勞は何だったのよ」

「いやあ、ごめんごめん。地図が逆さまだった」

「」「ふざけるな!!」「」

もういいよ……少し休む……

第五話 限界！？超過酷演習（後書き）

やっぱりこのネタはお約束です。

第六話 俺達の結束

「ねえー、もっと早くならないの?」

「無茶言つな。これが限界だ」

「同じく」

ナギトが道を間違えたせいで俺達は川上に向かって上らされてるところだ。しかも、いかだはさつき流されたから今はただの丸太を漕いでいる。精神が折れそうだ。誰か慰めてくれ。

「遅いー」

「ヒバリも手伝えよ・・・」

「レディーにこんな重労働させる気?」

なんて都合の良いやつなんだ。それでも忍びかよ。

「あとどれくらいなんだ?」

ナギトにはもう任せられないって事で今はヒバリが地図を持っている。

「大丈夫! あとほんの一时间だから」

「どこが大丈夫なんだよ!?!」

「どこも大丈夫じゃないよ・・・」

ナギトはもう限界らしい。

「もうダメ」

ナギト脱落。そして俺一人が漕いでいる。
これ、無理じゃね？

「ちよつと、何よあれ!？」

??????

前を見たら大量の丸太がこっちに向かってきた。

「うわ! まじかよ!？」

「早く避けて!」

そんな急には進行方向変えられねえよ!

「ぶつかる!」

急流に落下はいやああああ!!!

バツコーーーーン!!!

何だ!!？

「いつまでもフ抜けてられない。ここは俺にまかせろ！」

ナギト復活！ かつこいいー!! でもいつの間に。

「頼んだぞ！」

ナギトは次々に襲いかかる丸太を破壊し始めた。大迫力だ。俺とヒバリは丸太を前に動かす役だ。

バツコーーーーーン!

バツコーーーーーン!!

ドウバツコーーーーーン!!!

す、すげえ……

「右に避ける!!!」

ええっ!？

ぎりぎりの所で次の丸太をかわした。

「どうしたんだ？」

「見るよ」

丸太に起爆札！？

「危なかった。もう少しで大爆発だ」

「予想以上に手が込んでるわね」

「ちよっ、前！」

こんどは両サイドから二つまとめてだ。

「落ち着け、真ん中を慎重に進めば簡単に回避できるはずだ」

ナギトの言ったとおり丸太は両側の崖にぶつかり起爆札が炸裂した。

「二人とも！ 大変よ！」

前を見たら今度は百個くらい流れてきた。

「これは無理だ。一旦避難するぞ」

俺達は左側の崖に飛び移った。

すぐ真下を起爆札付きの丸太が流れていく。

「あーあ。船無くなっちゃったね」

「仕方ない。時間がかかるけど、このまま崖を伝っていこう」

崖にもトラップがしかけられているかも知れないから、ゆっくりと進んでいく事になった。

「やっと着いた。死ぬかと思った」

「もうヘトヘトよー」

壁面移動一時間。半端じゃ無かった。いつの間にかもう夕方だ。

「その程度で疲れてるようじゃまだまだだな」

「「「ヤシロ先生!?!?!」」」

いきなりの登場に俺達はかなり面食らった。

「どうしてここに居るんです?」

「あれ? 聞いてなかったのか。お前たちにはこれから俺と戦ってもらう」

うっそだー。

「どついつ事？」

「そついつ事だ」

「分かんないよ」

「問答無用！ 始めるぞ」

「ちよ、まつ「水遁・水流弾」

待てって言うてるのに！

俺達は一斉に散らばった。

「避けるの早くなつたじゃないか。だがまだまだだ」

ヤシロ先生は動体視力を超えるスピードで移動すると、あつという間にヒバリを捕まえた。

「ほら、どうする？ 実戦ではこんな場面が多々あるぞ」

正面から行っても無駄だ。どうすればいい？

「カゲツ、俺が先生の気をそらすからお前は後ろから回れ」

「分かった」

ナギトが前をいき、俺はナギトの左後方から回り込む。

「僕が相手です！」

ナギトは勢いよく跳躍すると、ヤシロ先生に猛烈な蹴りを入れた、
が足を取られた。

「その程度の速さでは通用せん」

ヤシロ先生はそのまま回転を始めた。

今だ！

俺は高く跳び、ナギトを振り回す先生を飛び越してヒバリの元へ向
かった。

その間に先生は手を離してナギトを吹っ飛ばした。

「勝ちだ！」

ヒバリの縄を解いた俺は勝利を確信した。

だが

「なかなか良いものを持つてるな。だが詰めが甘かったな」

「何！？」

ヒバリの姿がヤシロ先生に変わった。

「変化の術！！」

ああ、そんなあ・・・

「ナギトものびたし、俺の勝ちだな」

「うう……」

「惜しいな。陽動は体術が苦手なナギトじゃなく、お前がやるべきだったな」

そうだったのか。

そういえばヒバリはどこ行ったんだ？

「ちよつとー！ 酷いじゃない。私と先生を間違えるなんて！」

離れたところにある岩陰にロープで結ばれていた。

「悪い、悪い。今解いてやるから待ってる」

「うう、イテテ」

ナギトも気がついたようだ。

「大丈夫？」

ヒバリが駆け寄る。

「大丈夫じゃねえ」

ハハハ……

「見せてもらいましたよ」

いつの間にかユウ先生が来ていた。口ぶりからすれば、ずっと見てたんだな。

「文句無しです。君達全員合格です！」

「????？」

「????？」

「一体何の事ですか？」

俺にはさっぱり意味が分からねえ。

「実は今日の演習こそが本当の下忍試験だったんです。そして君達のチームワークは最高だという事が確認できました。洞窟といい、滝といい、起爆札といい、三人がそれぞれ助け合って持ち味をだしてましたね。直ぐに縄を解きに行ったり、目が覚めた仲間駆け寄る様子は感動させられましたよ」

成程。やけにあっさり合格できたと思ったらそういう事だったのか。

「なーんだ、そうだったんだ」

「確かに今日は俺達頑張ったよな」

「ああ」

俺達なかなか相性もいいのかも。何はともあれやったぜ！

「早速明日からバリバリ任務をやりますよ。いいですね？」

「はいっ」

「おっっ」

「もちろん」

任務か・・・何が待っているのだろう・・・とにかく俺達は全力でぶつかるだけだ！

演習の帰りに一楽に寄ってみたら、ウネリ・ハヤシ・ツバサの三人組がいた。

「どうしたんだ？ みんな揃って」

「ああ、無事に下忍として認められたお祝いだ」

「じゃあみんな受かったんだな」

「やったねー」

四人そろって合格か。それはすげえな。

明日からついに忍びとしての本格的な任務が始まる。張り切っ
てい
くせー！

第六話 俺達の結束（後書き）

という訳でめでたく合格です。

今気づきました。最初から崖伝いに行くほうが早い。

第七話 祝・初任務

前回晴れて下忍として認められた俺達について任務の依頼が来た。それで今、三代目火影から直々に説明して貰ってる最中だ。

「お主らにやってもらうのはこの猫の捕獲じゃ」

そういつて三代目火影は写真を出した。そこに大型の黒猫が写っている。

「依頼主の方はこれから木の葉を発たなくてはならないそうでの、タイムリミットは今日の夕方六時じゃ。それまでに、必ず連れ帰るように」

六時か。今は十一時だからあと七時間だな。

「任せて下さい」

「うむ」

「捕まえるといつてもどこに居るかも分かんないんだよな」

しまった、そうだった。

「うちの班の感知役はカゲツでしょ？何か分からないの？」

「猫みたいな小さな動物じゃ分かんない」

「頼りない台詞ね」

仕方ないだろ。本当の事なんだから。

「取りあえず、手分けして探してみようぜ。見つけたら無線で合図だ」

「分かった」

「オーケーよ」

そういつて俺達は散らばった。

確か路地裏に猫がたくさんいたよな。まずはそこから当たってみるか。

「おお、すげえ」

いるいる。数えきれない程の猫が・・・

「どうやって探すんだよ!?!」

とてもじゃあるけど、動く猫を片っ端から確認していくのは無理だ。しかもよりによって黒猫ばかりだ。黒猫が不吉って迷信を信じかけてるよ。

その頃、ヒバリも見つけられないでいた。

「うーん、全然いないなあ」

とにかく走り回っていればそのうち見つかると思っただけで、全く気配が無いわね。困ったなあ。どうしたら良いんだろう？カゲツからもナギトからもまだ連絡ないみたいだし・・・森の方も見てきてみようかな。

「さてと、探すはいいけど、どこから当たるかな」

木の葉って意外と広い。七時間で全部を見るのは無理だ。猫がいそうなのとっつてどこだ？ よく考えてみよう。

「そうだ、あそこがあるじゃないか」

俺は全速力で走った。

「ちつくしよー！ こいつでもねえ」

結局あきらめて一匹ずつ確認しはじめたはいいけど、全く分からない。どいつを見たかも忘れてきた。これは予想以上に難しいぞ。あ、一匹向こうにいった。追いかけよう。角のところで追いついた。

ゴンッ！

「いつてー！ 誰だよー！」

「なんでお前がここにいるんだ？」

「ナギト？ お前こそ」

・・・って同じ場所探しに来たのかよ。

「って同じ場所探しに来たのかよ！」

先に言われた。なぜか悔しい。

「ここが一番いそうだったからな。大体は探してみただけど、見つからなかった」

「そうか」

「ゴミ捨て場でも見てくるか」

「ああ、そうしようぜ」

今は東の端にあるゴミ捨て場に向かってるとこだ。ナギトが遅い。

「もっと早く走れねえのかよ」

「うるせえ」

ナギト、アカデミーでも走るのには苦手だったからな。

「そういや、ヒバリはどうしたよ？」

「俺は会ってねえけどな」

「そうか、まあ連絡が無いって事はまだ見つけてないんだろ。それより、急ごうぜ。もう夕方だ」

「分かってる」

あと二時間で見つけないと、任務は失敗だ。

「お、ヒバリから連絡だ」

俺は耳に小型の無線を当てた。

「た・す・けて」

!?

「はあ!？ 今どこにいるんだよ」

「・・・大声を出しちゃダメ」

「いったいどうしたんだ？」

「ヒバリ、聞こえるか？ 状況を詳しく説明してくれ」

「・・・アカデミーの裏の森にいるの。そしたら、怪しい人達がいる、今隠れてるの」

「詳しい場所は判るか？」

「・・・大きな杉の木がある開けたところ」

「分かった。今いK「キヤアアアアアアアア!!!」

「ヒバリ! どうした! ヒバリ!」

「・・・」

「おいおい、これまじでヤバイんじゃない？」

「ナギト、ユウ先生に連絡してくれ。俺は先に向かっている」

「分かった。気をつけるよ」

「おう!」

全速力で森に向かった。

いた！ 案の定ヒバリは捕まっている。どうも気絶させられてるらしい。

無闇に出ていくのは自殺行為だな。向こうが動きを見せるまでは先生を待とう。

集まって何か話してるみたいだ。ここからは遠くて聞こえない。

その時、クナイが飛んできた。

！！

ぎりぎりの所でかわした。

「そこで何してるよ？ ばればれなんだよ」

「そうみたい」

「お前らは先に行ってる」

一人を残して、どこかに行った。

「散歩しにきた。じゃ、ダメか？」

「ふざけるな。死にたいか？」

相手は殺気をぶつけてくる。
もうやるしかねえみたいだな。なら先手必勝だ！

『風遁・裂破』

刃状の風が相手の忍びに向かって飛んでいく。
かわされた。

「そつちがその気なら本気でいってもいいよな？」

良くないです。

「火遁・豪火球の術」

まずい！ なんとか横っ跳びに避けて後ろを見ると、木が炭化している。

風と火じゃ相性が悪いな。

「逃がさねえぜ」

猛スピードでこっちに向かってきた！ クナイを振りかざして、襲いかかってくる。ぎりぎりまで見極めて、応戦する。速度は互角だ。クナイとクナイがぶつかる音があたりに響く。

「下忍ふぜいが」

後ろに回り込まれた。このままじゃやられる。振り向きざまに大突破を繰り出してみた。

全く完成していない技だったけど、油断していたのか吹っ飛んでい

った。

今の内に！

わずかな時間で、ヒバリのそばについた。

「なめるんじゃねえ！！」

ナギト達はまだかよ！？

「火遁・火龍弾」

やられる！

「風遁・烈風掌」

力負けしたらおしまいだ。チャクラを練りまくって繰り出した。

風と炎が真ん中でぶつかる。そして、炎を跳ね返した。

よし！ さすがに今度はかなりのダメージを負ったはずだ。

予想通り、相手は倒れてた。

「た、助かった」

勝った。というよりも勝ってしまった。

「カゲツ・・・君？」

「ヒバリ、気がついたのか」

「うん・・・」

よかったー。本当によかった。

「カゲツ君が助けてくれたの？」

「そんなところかな？」

「ありがとう・・・」

「ようよう、手なんか握り合ってお熱いねえ！」

「ナギト！？ 違う！これは」

いつの間に！！

「一人でやったんですか？ 信じられません」

自分でも信じられねえよ。

「とにかく、無事でなによりです」

本当、死ぬかと思った。

「雲隠れの忍びですか・・・二年前に日向宗家誘拐事件があったばかりだというのに困ったものです」

そうなんだ・・・

「ああ！ あの猫！」

十メートル先に黒猫発見！ 特徴全て一致！ あいつだ！

「今何時だ？」

「五時十一分」

「いそいで追いかけるぞ！」

このまま任務失敗じゃ、洒落にならない。ぜってー捕まえてやる！

任務再開だ！

第七話 祝・初任務（後書き）

という訳で今回はDランク任務編です。
時系列はこれで合ってるかな？

第八話 得意分野？

「よし、もうすこしだ」

今は猫を追いかけて疾走中。タイムリミットの午後六時まではあと三十分だ。

「一気に加速するぞ」

俺は速度を上げる が、

ズッデーン！！

何かにつまずいた。

「へっへーん、引つかかったてばよ」

金髪の少年があざ笑ってた。俺の足元に縄が引いてある。

「だっせーな」

「ちょっとー何やってるのよ。先行ってるわよ」

お前たちまで・・・くそー。

「チッ、ナルト！ 覚えてろ！！」

しばいてやりたいけど、かまってる暇がないから二人を追いかける事にした。

「よし、捕まえた」

「案外すばしっこかったな」

「喜んでる場合じゃないわよ。急いで火影執務室にもどりましょ！」

「そうだった、急ごう」

てな訳でなんとか間に合った。本当にぎりぎり、五時五十八分に任務完了だ。今は建物の前で新下忍みんなが集まって、結果を報告し合ってる。

第四班は子守りとか畑作とかの雑用をやらされたらしい。そんなの忍者に頼まず、近所の人に頼めよと思ったのは俺だけじゃないはずだ。ヒノデが柄に無く燃えていたのが笑えたと、後でハヤシが教えてくれた。俺も見たかったなあ。

第六班は俺達と同じでペットの捕獲の任務だったらしく、ナツキサンの白眼で簡単に見つけて、連れ帰ったらしい。いいなあ、白眼。俺にもあれば苦労せずに済むのに。余談だがムソウがケナミ先生の忍犬・狼牙に嫌われたらしい。何があったんだ？

第十一班は配達物の任務を任せられたらしい。ヨモギ・ツバサ・アカネの絶妙なコンビネーションで配達物を空中で渡して、投げ入れていたそうだ。知らぬが仏だな、これは。

アカデミーよりも和気あいあいって感じた。任務でなじみが出たのかも知れないな。特にヒノデが急に饒舌なってた事には驚いた。いつもなら ケツ とかしか言わないのに。この一週間で何があったんだ？

「そっぴやムソウ、何で犬に嫌われたんだ？」

「う、うるさい！」

ナギトとムソウはさっきからずっとこんな感じだ。俺も気になるけど、教えてくれそうにもない。

「あ、それはな「ウネリ、黙れ！」

「ほらほら、喧嘩しないの。任務も大成功だったし、いいじゃない

い

「ムソウとウネリと一緒に組んでいられるのは多分ナツキさんのおかげだろうな。」

「任務はいいんだけど、僕的には雑用任務は嫌だな。」

「あたし的にはこれからも楽な任務だったらいいなー、みたいな
」

まあ、アオハの言う事も一理あるかもな。

「カゲツ兄ちゃんって風遁使えるんだよね？」

おっ、俺の得意分野の事聞いてくれた。感謝するぜ。

「ああ、そうだ」

「僕も使えるようになったんだ！」

お株奪われたー！ 自慢ですかー！！

「今度一緒に修行しよ！」

「そ、そうだな」

ヨモギ、恐ろしい子。

そんなこんなで今日は解散になった。家に帰ったら、わき目も振らずベットに直行した。

目を開けたら、空が赤くなっていた。

「もう朝かよ」

窓から外を見てみたら、沢山の人が歩いていた。

「やけに今日は人通りが多いじゃないか」

何かおかしい？

んん？？

「夕方—————!!!」

一日を無駄にした。

今日は任務が入ってないって事でユウ先生が特訓をしてくれる日。いつもの集合場所に第十二班が集合してる。

「やあやあ、みなさん。集まっていますね」

紙を何枚か持って、ユウ先生が現れた。

「これからの任務に当たって、君達には何か一つ絶対的な術を身につけてもらおうと思いましたが、今日から私の指導で各自修行してもらいたいと思います」

絶対的な術か。相手を一発で倒すような術を身につけたいな。

「その前に、君達のチャクラの属性を調べたいと思います」

「「チャクラの属性??」」

ナギトとヒバリは知らないらしい。

「性質変化といって、チャクラを火や水なんかに変える術がありますよね？ ほら、カゲツ君が使ってる風遁などですよ。人によって変化しやすい性質が違っているんです」

「どうやって調べるんですか？」

「この紙を使います」

ユウ先生は持ってきた紙を出した。

「これはチャクラの感応紙でしてね、例えば火の性質変化の私がチャクラを流し込みますと」

紙がポウツと燃え上がった。おおー。

「こんな感じに燃えます。風なら紙が切れ、雷なら紙にしわが入り、土遁なら紙が崩れ、水遁なら紙が濡れるといった感じですよ。みなさんもやってみて下さい」

そういつて俺達に感応紙を渡してきた。

俺は風遁だから紙が切れるはずだな。そう思ったたら

！！

「紙にしわが入った!?!」

え、何これ？ どういう事？

「どうやら君は風と雷、二つの属性を持っているようです。これは大きな武器になりますよ」

そうなのか？ 取りあえずやっただぜ。

「俺のは濡れたぜ」

「私のは崩れたわ」

ナギトは水遁、ヒバリは土遁らしい。

「みなさん自分の性質は分かったようです。ではこれから、みなさんに合った術を教えてあげましょう。と言いたい所ですが、性質変化を使うだけでも修行が必要です。なのでしばらくはその練習がメインになります」

性質変化の修行か・・・俺が風遁を覚えたのはほぼ勘だったからな。小さい時だったから良くは覚えていない。

「何をもたついているんですか？ 始めますよ」

ユウ先生がいつになく熱い。嫌な予感がするぞ・・・・・・・・

第八話 得意分野？（後書き）

風と雷には特に意味はありません。四人で全部の性質変化を持たせたかっただけです。

修行の場面って意外と描きにくそうだな・・・

第九話 ついに挑戦Cランク任務

「今日はここまでにしておきましょう。明日も今日と同じ時間に集合です。では解散」

やっと、終わった。俺はその場に倒れ込む。ヒバリとナギトも憔悴しきった様子だ。

性質変化の修行を始めてから一カ月。ここまでキツイとは思わなかった。風遁はすぐに覚えられたのに、どうして雷遁はこんなに難しいんだよ。

「私もうだめ」

「俺もだ」

「右に同じ」

三人共思う事は同じだ。

任務の方はというと、あいかわらず簡単なDランク任務ばかりだ。楽なのはいいけど、最近物足りなくなってきたのも事実だな。

任務はいつも、火影の執務室で発表される。今日も第十二班全員で

集まっている。

「これが今回の任務じゃ」

三代目が依頼書を渡すと、ユウ先生の顔色が変わった。

「火影様、これは」

「うむ、そろそろ任務にも慣れた頃と思うてな」

と、すると・・・まさか!?

「今回は試験的にCランク任務をやってもらう」

やっぱり!

「内容はある人物の護衛じゃ」

「ある人物?」

「田の国の要人での、あの国には忍びがおらんので安全を確保してほしいとのことじゃ」

要人・・・いい響きだ。

「任務開始は明日の朝からじゃ。良いな?」

「・・・は、はい!」「」

「話はこれだけじゃ。ユウ以外は下がって良いぞ」

「だあっしゃー!」

建物を出て俺は開口一番に叫んだ。さっきは驚きすぎてリアクシヨンできなかったけど、今は歓喜爆発だぜ。

「ついに俺達の力が認められたんだな」

「張り切っていきましょう」

「おう!」

しっかり準備しなきゃな。明日が楽しみだ。

「火影様、話とは?」

「うむ、今回の依頼主についてなんじゃが、少し気になる事があつての」

三代目は浮かない顔をして答えた。

「気になる事?」

「木の葉の内状を探るような行動が多々あつての。肩書きにも詐称があるようなのじゃ」

「何ですって!?!」

予想もしていなかった返答にユウは驚いた。

「今回の任務中、不審な行動があればわしに伝えてほしいのじゃ。場合によっては拘束してもかまわんぞ」

「分かりました」

これは・・・面倒な事になりましたね。

俺が集合一時間前に集合場所に行ったら、珍しくユウ先生が先に来ていた。ユウ先生はなぜかいつも集合時間ピッタリか、数分遅れてくるんだよな。

「やあカゲツ君、おはようございます」

「おはようございます。今日は先生早いですね」

「ははは、私だってこんな時もありますよ」

うん? いつもと雰囲気が違う?

「おっはヨー」

そんな事を考えてたら、ヒバリが来た。

「あれえ！？ 何でユウ先生がいるの！！？」

「みなさんの中での私のイメージがどうなっているのか大体分かりましたよ」

ユウ先生が拗ねた・・・

二十分後、ナギトが来た。

「「遅い！」」

「は？ まだ集合時間じゃ無いだろう。てか何でユウ先生がもう来てるの？」

三人の第一声揃ったよ。

「とにかく、みなさんお揃いのようですね。では依頼主さんの約束の場所に向かいますよ」

ナギト無視された。それにしても、約束の場所って最初からそこに集合すれば良かったんじゃない？

俺達はユウ先生についていった。

「お待たせしました。私達が今回、護衛に付かせてもらうメンバ―です」

今いるのは木の葉の門をくぐって少し行った所。依頼主つてのは背中に大きな模様の入った服を着ていて、黒いサングラスをかけた怪しい風体の男だ。

「本当に遅かったね」

ム力つくな。まだ時間になってないじゃないか。

「申し訳ございません。担当上忍の私が代表してお詫び申し上げます」

「まあいい、お前らの信頼なんて元々無いからな」

チツ、態度のでかいおっさんが。

「何あの人。嫌な感じね」

「どうしてこんな奴の護衛しなきゃならないんだよ」

「こんな奴、勝手に襲われとけての」

後ろで陰口を叩く。

「ほら、みなさん何を喋っているのですか。この方は田の国の大名の側近の水無月タンボさんですよ。間違っても、失礼があつてはいけませんよ」

「はい」

もちろん棒読みで答えてやった。

「さあ、とつとと出発するぞ。遅くなったらまずいからな」

本当に我儘な人だ。

「そうですね。ではみなさん、出発しましょう」

道中、何度もタンボにキレそうになりながら、田の国に着いた。

「おお、すげえ。誰もいねえ！」

ナギトがタンボの前で爆弾発言をしゃがった。けどそれは本当の事だな。一面の田畑で人影は無い。田の国って名前はここからきてるんだな。

「当たり前だ。田しかねえから田の国ってんだよ」

俺の予想、当たったぜ。

「目的地はどの辺りですか」

「ここから三時間程行った先にある寺ですよ」

よし、そしたらこの態度のでかいおっさんともおさらばだ。

三時間後・・・着かねえ。しかも森のまっただ中だ。

「先生、まだですかー」

ヒバリがしびれを切らした。

「そのはずなんですけどねえ」

先生が気まずそうな顔になった。これもしかして、もしかしなくて
も迷ってんじゃないかね？

「あの、タンボさん？」

「・・・・・・・・・・」

うわ、絶対迷ったよ。こいつの地元のはずなのに。

「みなさんは少しここで待っていてください」

ユウ先生がタンボと二人で森の奥に入って行った。

「追われていますね」

「そのとおりだな」

第九話 ついに挑戦Cランク任務（後書き）

やっとできました。今回は難産でした。

第十話 真偽を見極める！

「先生達遅いね」

「本当何やってんだか」

ユウ先生とタンボが森に消えてから、もうかれこれ三十分だ。さすがに待ちくたびれてきた。

「俺、見てこようか？」

「止めときなって。入れ違いになるかも知れないだろ」

このまま待ってけつてのかよ・・・

さらに三十分後

ユウ先生は何事もなかったかのように木々の奥からひょっこりと顔を出した。

「遅い!!!!」

「少し遅くなりましたが出発しましょう」

少し、か？ それはないと思います。

「それと、予定を変更してこの先の洞窟に向かう事にします」

「どうしてですか？」

「色々と事情があるのでですよ」

そうですか・・・って納得できるか！

「えーこれ以上歩きたくない」

なんて我儘なんだ。

「その通り。これ以上進む必要はありません」

!?

俺達の間には衝撃が走った。

今の声は！ でもそんなはずは・・・

「ようやく追い付きました」

後ろに息を切らしたユウ先生が来た。そして、俺達の前にもユウ先生がいる。・・・あれ？

「どういう事なんだ!？」

「今すぐその人達から離れて下さい。その人達は偽物です」

「何だって!？」

『火遁・火龍弾!』

!!

「逃げて下さい!」

俺達は急いで後ろに跳んだ。

そのまま、二人のユウ先生は俺達の右と前に分かれる。

「みなさん、騙されないでください。敵の罠ですよ」

「どつちが本物なのよ」

「私です」

なんてこつた。

注意して見てみたけど、全て同じだ。それに少しくらい違っていても、出会ってからあまり日にちが経っていない俺達には分からない。

「落ち着いて考えて下さい。私がみなさんと一度でも離れましたか？」

「た、たしかにそうだ。こつちが本物だ」

いや、違う。

「ナギト待て、ついさっき一度別れた所じゃないか」

その事を忘れるなんて、怪しい、怪しすぎるぞ。一気に後から来たほうの先生に疑惑の目が向けられる。

「ちよつと待って、いつものユウ先生は青色の額当てだったのに、あつちの先生は緑色をしてるよ」

ヒバリの指摘にはつとずる。本当だ。じゃあ、やっぱり俺達の前にいる元から居た先生が本物なんだ。

「こつちだ」

俺達は最初にいた先生の側についた。

「懸命な判断、感謝します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたの目的は何ですか？」

「その子達は私の生徒です。返していただきたい」

「はあーまだ言いますか。茶番はもう飽きましたよ」

「どうしてもと言うなら力づくでいかしていただきますよ」

言うより早く、こっちに向かってきた。

「危ないのでどいて下さい」『火遁・火龍弾』

まずい！

「危ない、避ける！」

俺達は一斉に炎を避ける。ユウ先生は逆側に避けて行った。

「まだまだいきます。『火遁・火龍炎弾』」

炎が逃げる先生の方向に曲がり、飲み込んだ。

「先生！」

嘘だろ？ 本当に大丈夫かよ？

・・・・・・・・・・・・・・・・！！

立ちあがった。

「よかった」

「心配させあがるぜ」

「先生なら当然でしょ」

ん？ なにかおかしいぞ。

立ちあがった人陰は・・・先生？

「骨が折れそつだ。ここは一旦引かせてもらつ」

煙の中から出てきたのは、ユウ先生よりも少し若い、浅黒い顔を
した男だった。

だ、誰だ？

「もう邪魔はさせませんよ」

人影が黒い靄になつて消えた。
俺達が信じていた方が間違つていたのか。

「みなさん大丈夫ですか？ ひどいですよ」

「「「」、ごめんなさい」「」

あれ？

「離れていないって言ったのは？」

「完全に騙されているようなので、私は普段ならば勝手において
いかないとの意味で、ああ言ったのですが・・・裏目に出たよう
ですね。申し訳ありません」

「額当ては？」

「情けない事に、あの人達に盗まれてしまったようです」

沈黙が流れる。

「それよりも、一旦というのが気になりますね。また仕掛けてく
るつもりかも知れませんがね。今回の任務、裏がありそうです」

ぞくぞくと背筋が寒くなった。

「木の葉に戻りましょう」

ええ！ WHY？

「明らかにCランク任務の域を超えています」

「そんなぁ・・・」

「ヒバリさん、敵の目的も分からないんですよ」

「・・・」

「カゲツ君とナギト君もいいですね」

有無は言えないな。ナギトと目線で意見を交わす。

「仕方ないです」

「うん」

「分かってもらって安心です。気をつけて帰りましょう」

珍しく、ユウ先生が笑ってる。かなり眩しく感じた。

第十一話 襲撃者と援助者

木の葉に戻るとユウ先生が言いだした途端に口を挟んだやつがいた。

「待て、勝手に決めるな。依頼者はこの俺だぞ」

タンボ！ すっかり忘れていた。忍びにおいて、依頼を断る事は信用にかかわる。

ユウ先生は冷たい目で言い放った。

「あなたもいいかげんにしたらどうです？ こんな事は任務外です。それに」

それに？

「あなたの正体に私が気づいていないとも思っているのですか？」

「俺の正体だ？」

「木の葉もずいぶんと見くびられたものです。あなたの本当の名前は天下ミモトですね」

誰？

「なるほど、そこまで分かっていたのなら話は早い」

「先生、この人は一体？」

「四年前に木の葉を裏切った抜け忍です。姿を変えても私の目は誤魔化せませんがね」

「こいつが抜け忍だって!？」

「で、どうするよ」

「あなたは抜け忍。本来なら始末すべき存在です。ですが、今はこの子達の安全が最優先。今回に限り見逃してあげましょう」

「ほお、それはありがてえ」

不気味な笑みを浮かべてきた。

「ですが、もしまた妙な事を考えるようなら、今度は容赦しません」

「さて、どうだかね。できるとこまでやってみな。ははははは!」

ミモトの姿が消えた。瞬身の術だろうか。見えなかった。

結局、危険との判断で俺達は木の葉へ帰る事になった。初のクラ

ンク任務だったのに残念だな。まあ、仕方ない。仕方ないのは分か
ってんだけど。

「はあ、何でこうなるんだよ」

「うるさい、それ言ったの何回目だ」

「ナギトは何も思わないのか？」

「そりゃ、俺も残念だとは思っけどよ」

テンションが急降下だ。

「はあ、何でこうなるんだよ」

「黙れ！」

「いつまでそんな事をやってるのですか？ まだ敵が近くにいる
かも知れないのですよ」

間違えられたせいで、ユウ先生は機嫌が悪い。

「」
「どっつするんだ？」

「何、あせる事はないさ。そのうちチャンスはある」

田の国から木の葉までつて結構遠い。すっかり夜になった。荒れ果てた歓楽街を歩いている俺達だ。

「今日はここの宿に泊まる事にしましょう」

「さんせい」

「もう疲れちゃったよ」

「……………」

本当に疲れた。色々な意味で。

泊まると言っても、単なる小屋みたいな宿だけど。まっ、無いよりはましか。

「うわあ、中まで汚いぞ」

「しっ、宿の人の前で本当の事言っちゃだめ」

ものすごくツッコミを入れたいが、黙っておく事にしようか。

「いきますよ？ 2階の一番奥の部屋らしいです」

確かにボロボロだ。壁紙はほとんど剥がれてるし、明かりも暗い。不気味だ。

「雨漏りとかありそうだな」

「だねー」

つきあたりには元々あった通路を無理矢理塞いだような痕があった。その横が今晚泊まる部屋。

「ここですね。今晚は明日に備えてゆっくりと休みましょう」

「やったー」

「一休みだな」

「俺もう動けねえよ」

「なさけねえぞ、ナギト」

「うるせえ」

そういつ俺も疲れてるけど。

夜に目が覚めた。いつもは熟睡できるんだけどな。

「ん？」

窓辺にユウ先生がいた。

何してんだろ？

ずっと外を睨んでいる。そんな事考えている内にまた眠くなってきた。忘れよう。

「……い……きる」

んん？

「……カ……ッ」

誰だよ……

「カゲツ！ 起きろー！」

「うわー！ー！」

驚かせるなよ。

「いいかげんにしろよ。もう昼だぞ」

「まじかよ」

「まじだ。先生とヒバリはもう下でまってるぜ」
仕方ねえ。起きるか。

「もう！ カゲツ君遅いよ」

「悪い悪い」

まだ頭がぼうつとしてるけど。

「あれ？ 先生は？」

そつえばいないな。

「怪しい人を見かけたからここで待っててください、だって」

「へえ、ユ」
「うわ！」

突然誰かが俺にぶつかってきた。その反動でナギトに激突した。

「泥棒！ 誰かその人を捕まえて！」

何だって？

「よし、行くうぜ」

「それしかないな」

「私も行く」

三人で追いかける事にした。

「おらあ！ 待ちあがれ！」

意外と足が早い。俺達の全力とほとんどかわらない。ある意味すげえ。

「忍びから逃げられるとでも思ってるの？」

お、曲がった。

「先回りだ」

建物の屋根を渡って、泥棒目がけて飛びこむ。

「届け！」

見事に届いた。

「よし、捕まえた」

「やった」

「俺達の勝ちだ」

やったぜ。任務完了。

「どうもありがとうございます」

「いいんですよ。気にしないで」

被害にあっていたのは俺達より何歳か年上の女の子だった。

「良かったね。ただの泥棒で」

うん？

岩陰からあやしい人影が見えた。

「一」

「二」

「三」

ここからじゃ声は聞こえませんが。もう少し、待ってみますか。

第十二話 怪しい影

「ただの泥棒ってどついう意味だい？」

ものすごく聞き捨てならなそんな台詞が聞こえたんで、聞いてみた。

「そついう意味よ」

いや、だからそれ聞いてるんじゃないか。

「気にしないで」

「「「「気になる!」「」」」

「うーん、巻き込んだじゃっても悪いしー」

なんかやばそうなニュアンスに取れるけど。やっぱり引くべきか？

「「「「どんだん巻き込んだじゃって」

引けなくなった………

ヒバリはもうちょっと考えて発言しようよ。

「分かったわ。話す」

おや？ 動き出しましたね。さっき来た方に引き返していくようですが。まあいいです。私もつけていく事にしましょう。

「????????」

やはりここからでは聞こえませんが。あの紋章、どれも名家のもので。私達を覗き見たり、一体何を企んでいるのでしょうか。

「最近、この辺りで忍術を使う妙な集団が街を荒らしているの

忍術だつて？ この国に忍びはいないんじゃないか？

「それも貴重な薬を盗んだり、古文書が入っている倉に結界を仕掛けたりと、何だか変なのよね」

「何をするつもりだろう？」

「分からない。ロクな事じゃ無い事だけは分かるわ」

禁術………かな？ 最近は落ちぶれた一族が多いし。

「守ってはもらえないの？」

「誰によ。この国には忍びが居ないし、国力そのものが弱いわ
そうか。そうだったね。」

「そのせいでみんなピリピリしてるし、このままじゃ街は衰退し
ていく一方よ。嫌になる」

「町長さんとか、街の上役の人は何て言ってるの？」

「長^{おみ}は・・・殺されたわ。・・・あいつらに」

！

！！

！！！！

「何だって!?!」

「あの人はみんなに慕われていた。だから、その瞬間に希望の光
は消えちゃった・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「私がおう少し早く駆けつけたら、あんな事にはならなかったの
に。姿が見えない事に気付いた時にはもう手遅れだった」

やめてくれよ。この雰囲気には耐えられない。

まずいですね。この方向は。追いつくにも見つからないように回り道をしていては確実に遅れを取ってしまいます。このまま追尾しましょう。

「話はそれだけじゃないわよ。」

まだあるのか。

「そいつらはね、ある人達を必ず襲うのよ」

「ある人達？」

ゴクリ……

「他国の忍びよ」

他国の忍びって……俺達じゃないか。

「忠告しておいてあげる」

本当に人事じゃなくなってきたな。

「いやな予感が当たったな」

「そうみたいね」

「背筋が寒くなるな」

あーあ、やっぱり関わるんじゃないか。こんなところささと……
???

「そういえば、ユウ先生遅すぎないか」

「あ、私も気になってた」

まさかな。

シュッ！

何だ！？ 背後にやばい感じがしてとっさに避けた。

「おい、大丈夫かよ」

「これは……クナイ？」

後ろを振り返ったけど、誰もいなかった。

「いたずらの域じゃ……ないよね」

「おいおい、これは本格的に狙われてるんじゃないか？」

「だろうな」

早く帰りたくなってきた。

散々心配させておいて、何事も無かったかのように先生は帰ってきた。

「みなさん何か変な事は無かったですか？」

あつたよ！ ありすぎた！

・ ・ ・

「成程、やはりそうですね」

「知っていたんですか？」

「私が追っていた忍者達がこちらへ戻ってきていたのでね、気になっていたんですよ」

「何者なんですか？」

「無茶を言わないで下さいよ。私にも分からない事はあります」

「これからどうします?」

「相手はすでに動き始めています。これをチャンスと見て、探りをいれてみるのもいいでしょう」

ええ! 首突っ込んだじゃうの!?

「でも俺達の任務って」

「ご安心下さい。火影様にはすでに連絡をしています」

な、なんですと!

「君達もこんな経験も必要ですよ」

「経験ってそんな・・・」

「ただし、私からは絶対に離れないで下さいね」

コクコク

「あのう・・・」

「何ですか?」

「もし良ければ、ついでにここら辺を荒らしている奴らを退治と
かしてくれちゃうって事はダメですか?」

「目的は同じ。ですよ」

「けど具体的に何をやるんです？」

「まずは探索といきましょう」

「あ、長が住んでいた場所に案内しちゃいましょうか？」

「お願いしますよ」

そんな訳で田の国の動きに俺達は関わる事になった。

第十二話 怪しい影（後書き）

音隠れができる8年前に当たります。

第十三話 備えあれば憂い無し？

「そういえば、まだ名前を聞いていませんでしたね」

「そうだったかな？ あけぼのタツですよ。前は長の家で家政婦をやっていました」

「そうですか」

「あ、あの建物です」

こ、これは・・・この街の例に漏れず、酷い造りだな。

「さあ、入りましょー」

立て付けの悪そうな扉が開いた。

「あれ、中は思ったよりもきれいだな。」

たしかにナギトの言うとおり、異様な程きれいだ。

「ごめんね。最近は全然掃除してないから・・・ってあれえ？」

タツも理由は分からないみたいだな。

入ってすぐの部屋に大きな写真が飾ってあった。

「この家の持ち主って、この写真に写ってる人？」

「そうそう」

思ってたよりも若いな。ユウ先生の方がよっぽど年上だ。

「俺は二階を見てくる」

手分けをして探る事にした。

3時間後

「収穫は？」

「なし」

「全く」

「さっぱり」

ダメだった。この数時間の苦勞は何だったんだよ。

「まあ、そう落ち込まずに。ダメ元で来たんですから」

あれ？ 心読まれた気がする。まあいいか。

「行き詰まっちゃいましたね」

「仕方ありません。わざわざ私に化けて君達を連れていくような込み入った真似をしてきたんです。きつとまた向こうから接触があるはずです。それまで待ちましょう」

げげ、また襲撃されるのを待つのかよ。断じて断りたいんだけど。

「今日の所は引きあげましょう」

「申し訳ございません」

「まあいいわ。予定とは違っにしても、せっかく面白い子を見つけたんだものねえ」

「左様で」

「クククク……」

怪しい笑い声が闇の中に響いていた。

「……ん」

何かに憑かれたみたいだに体が重い。悪夢に襲われる。

「……い……ッ」

何だ……

「……ろよ」

うう……

「カゲツ！ 起きろ！！」

「うわあ！」

「ったく、お前はどれだけ寝起きが悪いんだよ」

「うるせえ……」

「さっさと準備しろよ。下で待ってるからな」

ナギトが部屋を出ていく。

ええと、ここはどこだ？ そうか、タツさんの家に泊めてもらったんだっけ。

「いてて」

ひどい頭痛だ。

表にはもう全員集まっていた。

「もう、何回遅れてきたら気が済むの？」

「悪い悪い」

「とにかく、これで全員揃いましたね。今日からは来るべき時に備えて、私が直々に君達を鍛え上げましょう」

「うわあ」

「そんなあ」

「ひいー」

嫌だ、嫌だ。ユウ先生の特訓は厳しすぎる。敵が来る前に全体力を使い切っちゃうよ。

「問答無用です！」

一蹴された。

「まずは、今日中に性質変化を完成させてもらいますよ。簡単ですよね?」

「」「どこが!?!」「」

今までいくらやっても上手くいかなかったのに、どうしろと言っただ。

「さあ! もたついてないで始めますよ!」

ユウ先生は影分身を出して、俺達一人一人についた。よりによってワンツーマンかよ。

「カゲツ君、君は現状ではどこまで雷遁を使いこなせるようになっていきますか?」

「まあ、それなりについて感じます」

「では見せて下さい」

ははは、やっぱりそう来ますよね!。
手のひらでチャクラを練って、意識を集中させる。雷をイメージして、チャクラを変換させる。

「そりゃあ!」

なかなか良い感じになった。俺ってすげえ！

「まだまだですね」

ガクッ

「全然なってます。いいですか、雷遁というものはですね」

あーあ、また始まったよ。やってれない。

「……の二極を意識してこそ技として使えるようになるのですよ」

それは先生が出来るから言える論理なんじゃないかと疑問に思っている事は秘密だ。

「分かったら、このランプを自力で点けられるようになるまでチャクラを放出し続けて下さい」

チャクラ無くなっちゃうよ……

「ではヒバリさん、君の土遁の腕を見せて下さい」

「はい……」

チャクラを練って、土の粒一つ一つを意識、意識。

・・・よし！

「それ！」

地面の土が気持ち程度に盛り上がった。

「はあ」

先生そんなに露骨なため息をつかないでよ！ 私だって頑張ってるんだからね！

「いいですか、まず基本を押さえましょう。土遁において大切なのは」

うわーん、何も頭に入らないよ。

「・・・という訳で操る事ができるのですよ。いいですね？」

「良くないです」

「では水遁を使ってみて下さい」

「分かりましたよ」

水の流れを操る。チャクラの強さを調節して水流を作る。

「いけ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・何も起こらない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あははは・・・・・・・・」

「酷い、酷すぎます。チャクラを安定させる事から始めましょう」

それがいいみたいだな。先生が真っ白な紙を出した。

「この1点にチャクラを当て続けて下さい。それだけでいいです」

「よし、楽勝」

「ただし、明日の朝まで続けてもらいます」

「よし、無理」

「では今日はここまでにしてしまおう」

ドサッ

倒れた。

全身がいてえよ。早く戻ろつ。

先にヒバリが戻っていた。

「やつほー、お疲れ」

「何でそんなに元気でいられるんだよ」

「さあねー」

「信じられない」

今日はもうさっさと寝よう。

「あれ？ ナギトのやつ戻ってこないな。何してるんだ？」

「またどこかで倒れてるんじゃないの？」

「何をやっているんですか！ 集中力が途切れてきましたよ！」

保てるか！

「さあもう一回！」

「ひいー」

結局ナギトが帰ってきたのは次の日の昼過ぎだった。

第十三話 備えあれば憂い無し？（後書き）

話が進まない。何とかしないと。

第十四話 蛇の目

「タツさん、これはどこに置けばいいのかな？」

「向こうの机の上をお願いね」

「りょーかい」

ここに泊まり込んでから1週間。これまで目立った動きは無かった。まあ無いに越した事はないんだけどな。中だるみ感が出てきた。雷遁の修行の方はあまり上手くいっていない。そりゃ難しいよ。ナギトとヒバリも苦戦しているみたいだ。特に初日のナギトなんか一晩中帰ってこなかったからな。

今日は一休みって事でタツさんの仕事の手伝いをしている。

「じゃあこれくらいで終わりにしよう。ありがとねー」

昼前に終われたな。後で街の方にも行ってみようか。

「なんだ？」

道の前の方に何かあるぞ。行ってみよう。

「うん？ ええ！？」

「・・・グ」

人だ！ 人が倒れているぞ！

「おい、大丈夫か？」

って大丈夫な訳ないな。とにかくこのままじゃマズイよな。連れ帰ろう。

「しつかりしろ。今、助けてやるから」

その人を背中に乗せて、全力で走り出した。

「これでひとまずは大丈夫なはずです」

「良かった」

「カゲツ君が見つ付けてくれて良かったね」

ユウ先生が応急処置をしてくれた。医療忍者のはずのナギトは修行の過酷さが原因で爆睡中だ。

「それにしてもこの家紋、風間一族のもですね。一体どうしたんでしょうか？」

このおっさんも忍びなんだ。

「起きたら、何があったのか話してもらいましょう」

次の日、とんでもない一報を入れるはめになった。

「先生！ 大変です！」

「一体どうしたんですか？」

「昨日連れてきた人がいません」

「それは大変です。すぐに探しましょう」

全く何なんだよ。せつかく助けてやったのによ。気づいたら居なくなってるとかどんだけだよ!?

「どうだった」

「こっちには居なかった」

「困りましたね。あの状態ではそう遠くには行けないはずなのですが」

「みんな！ 見つけたよ！」

高台に上がったヒバリが見つけた。

「ここからずっと東にいった道を走ってるよ」

「追いかけましょう」

世話焼かしやがって。怪我が治ってないってのに。

「よし、近づいてきている。あともう少しだ」

ここからは一気に行くぞ。

「止まって下さい」

急に呼び止められたせいでつまずきそうになった。

「何ですか？ もう少しで追いつけるのに」

「もう一人だけかいますね。それに、様子が少しおかしいようです」

どういう事だ？

「ここからは静かに進みましょう」

ユウ先生がかなり真剣だっただけに、俺達は無言で従う事にした。

居た！ 昨日のおっさんと、背が高い青年がいる。そういえば青年の方はどこかで見た事があるような気がするな。思い出せない。

「誰だろう」

「しっ、静かに」

一体何の話をしているんだ？

「良くやった」

青年が先に口を開いた。

「おい！ 隠れていないで出てきたらどうだ？」

やべえ、バレてた。

「どうするのよ先生」

「見つかってしまったのなら、隠れている意味はありません。ここはおとなしく出ていきましょ」

先生の合図で四人同時にひなたに出た。

「全くご苦労なこつた。まんまと罠にはまってくれたな」

罠だつて？

『土遁・地中牢』

周りの砂が一気に持ち上がり、逃げ道を塞いでいく。

「逃げる」

遅かったか。四人共閉じ込められた。

「な、何これ？」

「ちょ、出れないぜ」

ナギトとヒバリはパニック状態だ。俺もだけど。

その内、技が収まったのか静かになった。

「一体どういつつもりですかな？」

ユウ先生はなぜか冷静だ。

「残念だがお前に用は無い。俺達の目的はそのガキだ」

そいつは真直ぐに指をさした。俺に向かって。

「俺だつて!？」

な、何で俺なんだよ。こんな奴知らないって!

「さつぱり飲み込めませんね」

「貴様が知る必要は無い」

言つたとたんに煙のような物が充満し始めた。

「みなさん! 息を止めて下さい」

そんな急に! やばい、吸つちまった。意識がぼやけてきあがつた。

ちく……しょ……う

「手間かけさせやがって。おい、お前も手伝え」

それにしても、こんなガキにどんな価値があるっていうんだ。全くあの人を考える事は理解できねえな。

グ……どこだ、ここは？

目がかすんでいる。頭も働かない。途方もなく気分が悪い。

「あら、気がついたようね」

誰だ？

「何を戸惑っているのかしら？」

俺はどこかに寝かせられているらしい。そして頭上から気味の悪いオカマ口調の声が聞こえてくる。

「まだ意識が回復しきっていないようね」

そつだ、俺は敵に捕まったんだ。するとここは？ 気合で意識を取り戻すと、声の主らしい男とさっきの青年がいた。

「誰だ……お前らは？ 何が……目的だ？」

「ずいぶんとたいそうな口を聞くガキだ。こらしめてやるつか」

「まあまあ待ちなさい、イカツチ。この子は数少ない成功作なんだから」

「成功作？ 一体何の話だ？」

こいつは何を言っているんだ？

「フフフフ・・・」

「な、何がおかしい!？」

「良い目をしているわ」

???

「私と同じ、変革者の目」

どうにかしてここから逃げ出せないのか。窓は無し、扉は閉じられている。

「ここからどう化けるかしら? 楽しみね」

このままだと何をされるか分かったもんじゃない。ナギト、ヒバリ、先生。早く来てくれよ。

第十四話 蛇の目（後書き）

だんだんカゲツの性格が変わってきたように感じる・・・

第十五話 火遁使い VS 火遁使い (前書き)

今回は短めです。

第十五話 火遁使い vs 火遁使い

先が見えない。暗い廊下は永遠に続いているようだ。3人は急ぐ気持を抑えて、慎重に進んでいった。

「くそっ、どこだ、どこなんだ。すぐ近くまで来たっのに」

「大声を出さないで下さい。見つかってしまいますからね」

「そうよ、私達まで捕まったらどうしようもないんだからね」

「分かってるけどよ・・・」

今俺達がいるのは敵のアジトの真っ只中。カゲツを助けるために強行突破に出たんだ。

「こちらは大丈夫のようです。行きますよ」

この通り、ユウ先生が先導して俺達がついていっている。カゲツ、無事であるよ。

「でりゃあー！」

両脚に衝撃が走ったせいで、俺は悶絶した。

「やっぱりダメか」

さっきから何度も脱出を試みたけど、全く開かない。変な二人組もどこかに行ったりし、せつかくのチャンスだってのに。

「もう一度」

今度はクナイを扉の鍵前を目がけて全力投球してみる。

キンッ

悲しい音を響かせて、クナイははじめじめとした床に落ちた。

また無理だった。こんな事ならもっとクナイにチャクラを纏わせる練習をするべきだった。

「あれえ？ みんな、どこいつちゃったのかな？ せつかくお昼御飯ができたのに」

手伝ってもらったし、お礼がしたいんだけど・・・

「よう、タツ」

うん？ 呼ばれた？ ええ！？

「あ、あなたは！」

「またダメか」

もうちょっとだったのに。ってやばい、足音が近づいてきた。

「次はここです」

一瞬間をおいて、扉が破壊された。

「みんな！」

「カゲツ！」

「カゲツ君！」

「どうやら無事だったようですね」

やばい、泣きそうだ。そんな感動の再会を邪魔してきた奴がいた。

「それはどうかな？」

お前は！ タンボ否、ミモト！

「そう簡単には通させない」

「随分と厄介な人ですねえ」

「そいつは我々にとって大切な人材だ」

「ならもつと大切にあつかってほしいものだな」

無性に腹が立ったから言ってみる。

「生意気な奴だ」

他にも仲間がいるみたいだし、さっさと片付けないとな。

「ここは・・・私がやります」

ユウ先生！

「木の葉の上忍として、抜け忍を放っておく訳にもいきませんか
らね」

「上等じゃねえか。容赦はしねえ」

「「覚悟!!」」

『『火遁・龍火の術』』

もの凄い勢いで炎の塊がぶつかり合った。

「何!？」

あれ？ ユウ先生は？

次の瞬間、ミモトの背後にクナイを持った先生が現れた。捉えた！

「遅いです」

「お前がな」

振り返りざまに紫色の炎を出す見たことも無い術を使ってきた。

危ない！

「いいえ、あなたがです」

炎が一瞬で消えた！？

「幻術か」

「あなたはすでに私の手中にはまっているのですよ」

ミモトの着地した地面からトラップが炸裂し、ミモトを鎖でつないだ。
だ。

いつの間に仕掛けたんだ。

「さあ、どうします？ おとなしく木の葉までついてきてもらいますよ」

「手はガラ空きだ！」

『火遁・火龍弾』

「言ったはずです。あなたはすでに私の手中だと」

またミモトの術が消えた。

「なぜだ。幻術は確実に解いたはず」

「あなたに教える気はありませんよ。眠ってもらいます」

ミモトがゆっくりと姿勢を崩した。

「すごいですね。一方的でした」

「先生かつこいいー」

「うん、凄いな。どうやったんだろ？」

「そうですね。まあ、まだ皆さんには早いです」

「なんだよ、もったいぶって」

「教えて下さいよ」

「それH」「なめ、るんじゃない・・・ねえ!」「」

! !

「どっという事でしょうか。起きられるはずは・・・!」

「何よこれ」

ミモトの体を赤黒い痣が覆っていく。本能がその姿を拒絶する。

「これで万全だ。一気に決めさせてもらっぜ」

なんなんだこいつは。化け物みたいな姿になりやがったぞ。

『火遁・爆裂弾!』

俺達の目の前に、「死」が迫っていた。

第十五話 火遁使い VS 火遁使い（後書き）

火遁・爆裂弾：起爆物を炎に混入させて放つ技

第十六話 俺の一撃

危ない！

今までとは比べ物にならない程の炎がおしよせてきた。

『風遁・大突破』

とっさに繰り出したけど・・・やばいつて！ 押し返される！

じわりじわりとせまってくる。先生は・・・チャクラ切れか。

「もうダメだ！」

『水遁・水乱波』

ナギト！

「いつまでも頼ってばかりいられるかよ」

すげーよお前。・・・って気を抜いている場合じゃないな。もう一度気合を入れ直すか。

「私の事も忘れないでよね？」

「ヒバリ・・・」

土がミモトの動きを封じていく。炎も途切れた。

勝てる。

「よし、止めだ」

「ダメです」

!?

「早く・・・逃げてくださ・・・い・・・」

え？

「フハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「きゃっ」

一気に弾かれただつて！？ そんな！

「その程度か。なめられたものだな」

「嘘だろ」

「喰らいな」

風が舞った次の瞬間、姿が見えなくなった。

「なっ」「遅い」

「ぐわあ！」

「ナギト！」

一気に飛ばされ、壁にめり込んだ。なんて奴だ。

「ほら、よそ見をされていていいのか？」

耳元の空気が切れる。とっさに反対側へ避けた。

「外したか。ならお前だ」

ミモトの巨大化した拳がヒバリにぶち当たる。が、ヒバリの姿は消えて木がばらばらに破壊された。変わり身だ。

「低級な術を」

「その低級な術に騙されて恥ずかしくないのか？」

「カゲツ君！ 余計な挑発をしないで！」

すみません……つい……

「ほん・・・グッ・・・」

「ヒバリ！」

一体どうなっているんだ？ 確かに避けたはずだろ。

「油断したな。たとえ避けたとしても、この技は空気の圧縮でダメージを受ける。どちらにしる逃げ場は無い」

しまった。そうだったのか。

「後はお前だけだ！」

「負けるかよ！」

『火遁・豪龍火の術』

『風遁・大突破』

勢いが、負けている。さっきより強くなっているんじゃないのか？
どんだん炎は迫ってくる。

倒れている3人が視線に入る。

ぐう、風遁と火遁じゃ相性が悪いか。どうすればいい？

そうだ。こんな時のためにあの術の修行をしてきたんじゃないか。完成はしていない。けど、もうこれしかない。

全身のチャクラを一点に集中させ、雷に性質変化させた。

『千鳥！！！』

喰らいやがれえええ！ 全力でミモトにぶつけた。

「グバツ」

そのままの勢いでミモトは後ろの壁に叩き込んだ。

「てめえ……………」

今度は油断しない。すぐにクナイを構えた。

ミモトは襲ってこなかった。黒い物が体から引いていく。なんだっ
たんだ。

ミモトはその場に倒れた。

「……………」

勝った。

勝ったんだ。

つてこうしている場合じゃないな。ここは敵の本拠なんだ。早いとこおさらばしないとな。

気絶しているナギトとヒバリを背負う。

「やりましたね。さすがです」

「先生の教え方が良かったんですよ。それよりも早くここを出ましょう」

「もちろんです」

「そいつはそうするんですか？」

「抜け忍ですからね。後で木の葉で引き渡しましょう」

結局その後は敵に遭遇する事もなかった。俺達は一旦タツさんの

家に戻る事にした。

「うん？」

「ヒバリ、気づいたんだな。良かった」

「私どうしたの？」

「ミモトの攻撃を喰らったんだよ」

「そう・・・」

「まだ動かない方がいいぞ。骨が折れてる」

「また、助けられちゃったね」

「気にするなって」

援護してくれなかったら、負けていたよ。

「くそう！ 俺達が助けに行っただはずだったのに！」

「ナギト！」

驚かせるなって・・・って!?

「つか起きてるなら降りろよ!！」

結局自分で歩くのが面倒だっただけらしかった。

「一体どうしてなんですか!？」

あの声はタツさん？ 一体何があったんだ？

「何かトラブルのようですね。行ってみましょう」

「そいつはどうするんです?」

「木の葉の特別な縛り方です。一応影分身に見張らせておきますが、そう簡単には抜け出せないでしょう」

タツさんともめていたのはさっき俺達を襲ってきた若い男だった。

「お前は!」

はっとした目でこちらを睨んでくる。

「ちっ、お前らがここに来たって事はミモトは負けたって事だな。つくづく使えねえ奴だ」

「ちょっと待ってくださいよ。どうしてみなさんが長の事おのを知っているんですか?」

！

そうか、こいつは。

「やはりそうでしたか。写真に映っていた人とよく似ていたのでまさかとは思いましたが」

「さっき俺達の邪魔をしてきたんだ」

「気をつけて」

「早くそいつから離れるんだ」

こつちを一睨みすると、自分から離れていった。

「いきりたつなって。まあいいさ。ミモトはくれてやる」

ユウ先生が一步前が出る。

「あなたは愛されるリーダーだったのでしょう？　なぜ悪事に手を貸すのですか？」

「この国が、弱いからだ」

？

「どついつ事ですか？」

「まあいい、教えてやろう。自国の忍びを持たないこの国は常に

他国から狙われてきた。そのせいで、多くの犠牲が出た。俺は様々な手を尽くしてきた。それでも、全て無駄だった」

「それとどんな関係があるのです？」

「そんな中、あの人が見れた」

「誰です？」

「さあな。それ以上は教える気はねえ。とにかくこの国に隠れ里を作り、護ってくれると約束してくれたんだ」

「なんですって!？」

「大名は国を強くする事に乱心だ。利害が一致したのだろう。俺はその人の歯車の一つになる事を決意した。全てはこの国を幸せにするためだ」

「違うよ!」

タツさん？

「じゃあ、どうして、こんな事をするの？ どうしてみんなを困らせるの？」

「目的のためなら少々の犠牲はつきものだろ」

「そんなの、私の知っている長じゃない。その少々の人達を愛するのがあなたじゃなかったの？」

「お前も少しは大人になれよ。この国にもようやく陽が当たろう
としているんだ」

「……………」

「もう一度聞く。俺についてこないか？」

「私は……………！」

第十七話 決断の時（前書き）

変なところで切ったら短くなった・・・

第十七話 決断の時

「もう一度聞こう。俺についてこないか？」

「私は………！」

タツさん！

「行かないよ？」

！！

「どうして、どうして分からないんだ」

長が逆上する。

「確かに、私にはどっちが正しいのかなんて分からない。けど、私はいつも一緒にいられるみんなに幸せになってほしいだけ。……あなたにも」

「ふっ」

顔を上げた「彼」の目はものすごく冷たく、少し寂しそうだった。

「そうか。なら勝手にするがいいさ」

それを言つと何かの印を組んだ。俺たちは身構える。けど何もしかけてこなかった。

「残念だよ……」

最後に小さい声でつぶやいて、そいつは姿を消した。

「」「」「……」「」「」

あまりの事に俺達は何も言えずに黙りこくった。

「いいの、気にしないで」

タツさん、本当に悲しそうな顔をしている。

「前はあんなんじゃなかったんだけどなー。人って変わっちゃうものね。あっははは」

タツさんはいつもの笑顔を見せてくれた。けど、目のふちが光っている。ものすごく、心が痛むよ。

「いけない、せつかくお昼を作ったのにさめちゃってるよね」

……

「さあ！ 行こう！」

「・・・うん」

「そうだね」

「さんせい」

「行きましょうか」

少しだけ、暖かい気持ちになった。

タツさんとあいつの間に何があったのかは分からない。部外者の俺達が口をはさむ事でもない。けど、今まで通りの生活が送れれば、それが彼女にとっての幸せなんだと思う。

うん、俺今良い事言った。

いつまでもものんびりとしていられる訳でもないし、抜け忍ミモトの事もあってその日の内に俺達は木の葉へ帰る事になった。

「どうも今までありがとう！」

「それほど (バシッ

すかさず俺がナギトに平手打ちを喰らわせておく。

「こちらこそ、何だか世話になっちゃったみたいで」

「またくるねー」

「では、我々はこれにて」

伸びたナギトは放って置いていこう。

「さようならー！」

初の本格的な任務。当初の予定からかなり外れたけど、いい経験になったよ。本当に。

「……………つて、こらー！俺を置いていくなー！」

「ちっ、気が付いたら夜とかだったら面白かったのに」

「それにしても、大名つて本当に勝手だよな。いくら国の当主だからつて、無理に国を強くしようとか考えるからあんな風に壊れる人が出てくるんじゃないか？」

「カゲツ君、そんな事を言うものではないですよ。上が無能だと下が苦勞するのは決まっています事です。今更愚痴つても仕方ないですから」

おいおい、先生も何気に酷い事言ってるな。

「この人にもそんな感じの事情があつたのかな」

ナギトが先生の幻術で眠らされているミモトに目を向ける。

「どんな事情があつたにせよ、木の葉を裏切つた抜け忍は放置しておけませんからね」

「これからどうなるんだろ？」

「それは・・・もちろん尋問部送りになるでしょうね」

「この人も今の俺達みたいにマンセル組んでた忍びがいるんだよな」

ナギト、少し同情してるのか？

「その仲間を裏切つたんだろ？ そんな奴、気にする事ないつて」

「けどさあ、もし俺達の同期の誰かが俺達を裏切つたらどうするよ？ そう簡単にバツサリとはいかないと思うんだよな」

「そりゃあそうだけだよ」

縁起でもない事言っなよなあ……

「大丈夫、私たちの中にそんな人いないじゃん」

おっと、ヒバリ氏から単純明快な回答が飛びだしました！

「まっ、それもそうだよな」

納得するんかい！ もうついていけねえ。

「見えましたよ、木の葉です」

遠くの方に「あ」「ん」って書いてあるお馴染みの門が見えてきた。

「おお、ついに帰ってきたんだな」

「私、早く家でゆっくりしたいよ」

今日くらいは胸張って帰っていいかな？

いや、駄目とは言わせない！

「よしじゃー！ 任務完了ー！！」

第十七話 決断の時（後書き）

ようやく田の国編終了！ いやあ、長かったなー。

中忍試験。年に二回行われる試験。小隊長としての素質のある者を選出し、各国の勢力を見極める意味も持っている。

それに参加できるんだ。燃えない訳がねえ。本番まではあと一週間。今から新術を覚えるのは厳しい。なら習得済みの術を磨こう。うん、そうしよう。これで決まりだ。

「ようつてば！」

うん？ 誰か呼んだか？

「無視んなって。微妙に悲しくなった」

「あつウネリ。悪い悪い。少し考え事してたんだ。で、何か用？」

「分かってんだろ。中忍試験だよ、中忍試験。お前、出るのか？」

「ああ、その予定だよ」

第六班も出るのかな？

「そうか。お互い頑張ろうぜ」

「ああ」

「俺は今回こそ絶対に負けられねえ。ムソウの奴に俺の方が上だ
って教えてやる」

「おう、頑張れ頑張れ。・・・（無理だろうけど）」

「今小声で無理って言わなかったか？」

「あ、悪い。つい本音が」

わざとだけどね。

「うるせえええー！」

お前がな！

「俺もお前には負けないぜ。今までずっと二番手ばかりだったんだ。一度くらい一番になってみたいからな」

「中忍一番乗りは俺だ」

「いや、絶対に俺だ」

「俺だ」

俺達の不毛な争いに一人加わった奴がいた。噂をすれば・・・だな。

「ムソウ・・・」

「お前達がこの俺に勝てるかとも思っているのか？ なら、今すぐその考えを訂正した方がいいな」

「何い？」

「じゃあな。俺は勝手に合格しておくからお前らもせいぜい頑張れよ」

見事な捨て台詞を吐かれた。

「……………」

「……………」

約5秒の間、不動尊のごとく俺達は固まっていた。

「ぬごおおおお！ 超むかつくー！」

「なんか言いたい放題言われたぞ！？」

「あいつは俺の手で途中敗退さ・せ・てやる」

もうひとつの決意を固める俺達だった。

それからの一週間をざっくばらんに言えば、ずっと術の命中率を上げるために精度を上げるための修行をしていた。丁度任務が暇だったか一日中時間を裂く事ができた。

そして当日になった。

「じゃあ、行ってくる。絶対に合格して帰ってくるから」

いつかの家族写真の前でいつもの儀式？ をしてから家を出た。

「どうだ？ 俺に勝てるだけの技は身に付けたかよ？」

「げえ、ムソウ」

俺の家から一次試験会場になっているアカデミーまでの一本道の間
にうちの敷地がある。

そのせいでかなりの確率でムソウと出くわすはめになる。

「まあな」

「勘違いが」

何だよ本当に。

「まあいい、途中まで一緒に行っちゃってもいいぜ」

途中までかよ！

「断る。俺は先に行ってる」

こいつと一緒にいても嫌な予感しない。さっさと行こう、それがい

い。

会場に来たはいいけど。

すごい人だな・・・

「あつ、カゲツ君。こっちこっち」

ヒバリとナギトが先に来ていたみたいだ。

「では班員がそろい次第、受験票を貰って会場へ移動してください」

「行こうか」

えっと、俺は130番だな。

「おお！ 栄光の131番だ」

おいおい・・・

「どこがだ」

「何やってんの二人とも？ いくよ？」

え、ええ！？ 俺もその中に含まれているの？

部屋に入ると、そこはさらに威圧的なほどの人口密度を誇っていた。

「うわ、さすがにすごい人だな」

「各国からたくさんの方が来るらしいからね」

「関係ねえって。俺達を受かればいいだけの話」

簡単に言うよな・・・

「よう、来たか」

振り返ると第六班のメンバー発見。

「まあお互いがんばろうぜ」

「おう」

「ふん」

ハハハ、予想通りの反応だ。

「よし、全員集まっているな。今から中忍試験を開始する」

ついに始まるのか。

「一次試験管の山中いのいちだ。今から試験内容を説明するので
しっかりと聞くように」

ごくり・・・

「一次試験は筆記試験の形式で行う。各自、持ち点は10点。カ
ンニングが発覚した場合、一度につき2点ずつ持ち点が減っていく。
持ち点が0になるものを出した班は失格となる。何か質問は？」

「ちょっと、どうして班員全員が失格にならなきゃならないのよ
草隠れの額当てをした下忍が口を開いた。

「実際の任務では一人のミスが全員の命取りになる。だからこの
試験は班員全員の連帯責任にする」

なるほどね。

「他に質問は」

教室が静まり返る。

「無いようなら解答用紙を配る。最後の問題は試験開始後30分
経ってから出題されるから注意するように」

きた。問題は・・・兵糧丸の作り方に、チャクラの性質に、・・・
・・・カンニングするまでもないな。座学トップだった俺をなめるなよ。

二人は大丈夫か？ ナギトは多分大丈夫なはず。問題はヒバリだな。俺にどうこうできる訳じゃないけど。頼むぜ。

早速脱落する班が出た。

うわ、まじかよ。怖ええ。いや、他の班を気にしている場合じゃないな。集中、集中。

それから25分で4班が脱落していった。俺はそうそうに解けたけどな。

「では、10問目を発表する・・・といたるところだが、その前に一つルールを言っておく。この10問目を仮に答えられない場合、その者は今後一切中忍試験を受験する資格を与えられない事になる。これは毎年恒例で決まっている事だ」

何だって!?

「そんな馬鹿な話があるか」

「いくらなんでも厳しすぎるぞ」

あちこちからブーイングの声が上がる。

「だから受けないという退路も用意してある。その場合、班員全員が失格になる。また来年受け直せばいいだろ？」

沈静化・・・

「どちらを選択するかはお前達の自由だ」

落ちつけ、落ちつくんだ俺。考えてみる。毎年恒例ならとつくに10問目に失敗した人がいるはずだ。けどそんなのは聞いた事が無い。きつとこれははったりだ。そうだ、そうにきまっている。きつとこれは覚悟をためすための質問なんだ。よし、俺は受けるぞ。

ちらりと横に目をやると、ヒバリと目があった。ヒバリも気付いたみたいだ。

「130番失格」

えっ？

第十九話 そんなばかな！

え？ 今、130番って言ったのか？ 俺の番号は・・・あれ？
あれ???

「なぜだあああああああ！！！！！！」

「131番失格、132番失格」

「ごめん、二人とも」

ナギト？

！

ナギトが手を挙げていたのか。

「失格者は早々に退室するように」

そんなあ・・・

今日のために修行してきたのに、ウネリやムソウに勝ちたかったのに。

気が付くと周りに見慣れた建物が見えた。

うん？ もう会場の外か……完全に心のスイッチがオフになつてたな。

横にちらりと目をやったら、ヒバリがものすごく暗い顔をしていた。

「ちよと……ナギト君……何やってるの？」

ヒバリ、まあ分かるよ。

「信じられない」

ヒバリがみるみる怒りの表情に変わっていく。あれ？ 何かまずい予感？

「絶対、絶対、ぜーたい許さない！」

「ヒバリ、落ちつけて」

「うるさい！」

「ひいつ」

あーあ、本気で怒らせちゃったな。ヒバリはこうなると手がつけられなくなる。今までに何人も被害が出ているんだよな。触らぬ神に祟りなし。よし、ここはナギトに任せよう。

「ちよ、カゲツ！ 助けて！」

知らない、知らない。何も知らない。

「ああああああああ！」

聞こえない、聞こえない、何も聞こえない。さ、さあ帰ろう帰ろう。

「見捨てる気か！」

「当たり前だ！」

「ただいま、おかえりーっと」

あーあ、まさか昼前に家に戻って来るとは思わなかったな。いつもならこのむしゃくしゃを修行にぶつけるところだけど、今日だけはそんな気になれないな。

「まあいつか。試験はまた秋にもあるんだ。何も急ぐ事ないよな」

そうだ。中忍試験は年に二回。新人はやはやの俺達が慌てる事じゃない。もう一度修行し直して、万全の体制で合格を狙えばいい。そうだ、そうだよ。

「ばかばかしい。顔洗ってこよー！」

俺の声が壁に吸い込まれていく。

……こんな時に一人つてのも堪えるな。といつてももう何年も前からこうだけだ。

母さんは物心ついた頃にはもう居なかった。

父さんはアカデミーに入学するちょっと前、あの九尾事件で死にしまった。あのせいで里で何人もの人が犠牲になった。どうやったのかは知らないけれど、九尾は封印された。近所のおばさんが言っていた話によると九尾が封印されているのはナルトの体の中らしい。そのナルトは今、里のみんなに嫌われている。

誰も救われていない。

俺はもうこんなに悲しい事さえ起こらなければそれでいいと思うけど、里を守るために俺が引っ張っていきたい。だから俺は中忍試験を何度でも受けるつもりだ。

深く考えてもしょうがないな。もういいや、寝よ寝よ。

夕方の日差しが窓から入ってきている。

うん？

「いつの間にか寝てたみたいだな」

枕元の時計は6時を指している。立ちあがって深呼吸をしていたら、玄関の前から声が聞こえてきた。

「おい、カゲツー、居るー？」

あれ？ ツバサか。

「おう、今開ける」

扉を開けると、ツバサのひよる長い姿が現れた。

「やあ」

「どうしたんだ？」

「じゃーん！ 一楽のラーメン券当たっちゃったよー！ 今日
ヨモギ君もアカネちゃんもいないから一緒にいこー」

まっ、いい気分転換にはなるかな。

「おう、着替えてくるよ」

一楽。木の葉隠れの里で一番か二番目に有名な店。・・・と少なく

とも俺は思っている。

「こんばんはー」

「おつっ、っ、らっしゅい」

「醤油ラーメン二つお願いね」

「はいよ」

そういやツバサの班の事ってあまり聞かないな。合同任務とかで組んだ事も無かったし。

「なあ、十一班ってどんな雰囲気なんだ？」

ツバサは即答してきた。

「そうだなー、うん三人共相性ばつちだしー、一緒にいて楽しいしー、言う事ないかなー」

おお、そこまで言えるのか。

「へー、いいじゃん」

「十二班はどんな感じー？」

「え？」

そうだな・・・まあたまにムカつく事もあるけど、俺達結構いいト
リオかもな。

「こっちも同じような感じだな」

「ふうん」

「へい、お待ち」

「ありがとー」

これこれ。何回食べても飽きない味。

「そういえばさ、任務とか修行とかはどんなのをやってる？」

ツバサがにやりと笑った。

「後で見せてあげるよー」

「何だよもったぶって」

「さっ、早くしないとラーメン伸びちゃうよ」

まっ、それもそうだな。

「じゃあこれ食べ終わったらお互いに自慢の技を見せあおうぜ」

「うん！」

第二十話 勢いだけで

「よし、俺の最強技を見せてやるぜ」

俺はにやりと悪い笑みを出す。

全身のチャクラを一点に集中させて雷の性質変化を与える。爆音と共に電撃が辺りに広がっていく。

『千鳥』

「行っけー！」

俺は大声で叫んで、それを力にこめて技を放つ。

轟音と共に目の前の大岩が見事なまでに破壊された。

「やりいー！」

ちなみに一般人も利用する公園だけど、現状回帰とかは何一つ考えていない。気にしないでおこっ、そうしよう。

「やるねえー」

ツバサがいつもの間延び口調で感嘆の声を上げてくれた。

それにしても、俺の今は決まったな。心の中でガッツポーズをした。

「じゃあ僕のもいくよー」

確かツバサはアカデミー時代、どれをとっても平均的な成績だったな。さーて、何を出すつもりかな？ ゆっくりと巻物を取り出す。

『口寄せの術』

うおお！？ 俺達の背丈の5倍はある猫があらわれたぞ。

「ミツさん頼んだよー」

み、ミツさん！？

「がってん」

「じゃあいくよー？」

『我流・火炎大風車！』

大猫が尻尾を振るう、そして油断していると俺も吹き飛ばされそうなくらいの風が巻き起こる。

「でりゃあー！」

ツバサが炎を吐きだした。その炎は風に乗って渦を巻きはじめた。まるで風自体が燃えているみたいだ。いや、実際にそうなのかも知

れない。それにしても中々の迫力だ。火の竜巻って感じた。

あれ？

「って・・・俺の方に向かってきたああ！！」

うわあ！ あぶねえ。

ぎりぎりでかわしたからいいものの、本当に当たったらどうしてくれるんだよ。

「ほらほらほらー危ないよー」

「何言ってるんだ、ちゃんと避け・・・」

なぬー！？ 空から火の玉がいくつも降ってきた。

「熱ちちち」

勘弁してくれよ。これは避けきれない。一気にこの範囲を抜けよう。俺はツバサの元へ走りだした。

「あははは、大丈夫？」

「あははは、大丈夫？　じゃねえ！　危ないじゃないか」

結局俺のお気に入りの服は、あちこちが焦げて数か所大きな穴が空くという何とも無残な姿になった。見るに堪えない状態になったから、一旦俺の家まで戻ってきたところだ。

「ごめんごめん。けど、凄かっただろー？」

こいつ・・・全く反省していない。

「へっ、お前は少しの火を出しただけじゃないか。風を巻き起こしたのはあの化け猫だろ？」

「酷いなー。少なくとも術の制御をしていたのは僕なんだよー」

素直に認めたくない気分だ。というより意地でも認めてやりたくねえ。

「俺だって二人がかりでやればもっとうまい事できるから」

「無理」

即答かい！

「あ、そんな事言うんだ？」

「じゃあ試してみるー？」

「ああ、やってやろうじゃないか」

あっ、勢いで言ったかも。やばい。非常にまずいぞ。

「これでどうだ!」

ツバサがバツと巻物を広げた。お前それをどこから出したんだ?

「カゲツ君も同じ状況で勝負したいんでしょー?」

広げた巻物から術式のようなものが飛び出して、俺に纏わりつく。

次の瞬間。俺の周りの景色が突然変わった。

「な、なんじゃこりゃあああ!?!?」

渦巻いたような幾何学模様が見える。ずっと視点を固定しているとすぐに酔ってしまいそうだ。

「あ、あれ? 口寄せって、一瞬で飛ぶんじゃないかったっけ?」

確かにそう聞いていたはずんだけど、今は終わる気配すらない。つて終わる気配がない!?!?

「まさか永遠にこのままって事はないよな?」

.....

「というか、そうだと困るんですけど?」

.....

もちろん返事は返ってこない。

「なーんてね。そんな訳ないか。はははは・・・は・・・は・・・は」

.....「くくり。」

おいおい。まじかよ。

「ツバサああああああ！！ ヘルプヘルプ！ お前が何とかしろよ！？」

俺は一人で絶叫した。

「冗談じゃないぞ！？ ここから出る方法を頼むから教えてくれよお」

あれ？ 何だか目から汗が・・・

カゲツの部屋にぽつんと一人取り残されたツバサ。

「あれ？ ケンカの勢いでやっちゃった」

カゲツ君の姿が消えた。きつとどこか別の場所に飛ばされたんだね。

「……………」

冷や汗がだらだらと流れ落ちる。

「ぼ、僕しーらない」

こうしてツバサはしばしの現実逃避を行うという結論に至った。

もちろん後で二人共こっぴどく叱られた事は言つまでもない。

第二十話 勢いだけで（後書き）

短いですが、きりがいいので投下しちゃいます。

見たくない。見たくない。今下を向いたら俺の全てが終わる気がする。

「おいこら！ 聞いているのか？」

心をしっかりと持っていれば大丈夫だ。よしっ。

意を決して下をのぞくと、黄色く光る大きな目玉がこっちを睨み付けていた。

「ぎゃあああああ」

「うわああああ。何だ？ 大声出すから驚いたじゃないか」

「もももも、申し訳ございませえん」

殺られる。確実に殺られる。

「おめえ、何をびくついているんだ？」

そんな事言っただって。いきなり目の前、しかも足元にクジラ大の鳥が現れたら驚くって。

「一体どこから入ってきたんだ？ ここには普通の人間は入れねえはずなんだけどな」

「いや、そんな事は俺が聞きたいです」

困ったような顔で俺を見上げていた。

「取りあえず、そこから降りろ」

「あつ、ごめんなさい」

俺はひょいっと鳥の背中から飛び降りた。それから肝心な事を聞く事にした。

「ここは、一体どこなんですか？」

「ここか？　ここはな、隼族の里『妖岳』だ」
あやかしたけ

「はやぶさの……里？」

「ああ、そうだ。もう一度聞く。どうやって入った？」

いや、だから分からないんだって。

「どうやってと、聞かれても変な巻物に触れたら気が付いたら」
「う」

「……」

え？　何？　どうして黙ってたの？

「なるほどな。どこかで見た顔かと思えば」

「多分お初だと」

「「うちの話だ」

どういう事だろう？ イマイチ状況が飲み込めない。急に態度を変えたし、それにここへ来たの初めてだよな。

「まあいい。お前、ついてこい」

敵意は感じない。多分大丈夫だ。

「はい、鳥さん」

「敬語は止める。俺はそんな喋り方されるような奴じゃないからよ。それから、俺には早嵐ひしんって名前があるんだ」

「.....」

俺はニヤリと笑った。

「おうー！」

「でっけえなあ」

早嵐の背に乗って連れてこられたのは、先が見えないくらいの大木だった。樹齢10000年くらいあるんじゃないか？

向こうの巻物がない以上、木の葉の里に戻る場所はここにしかないらしい。

「ここだ、降りろ」

言われるままに降りた。というより落とされた。

「いててて、酷い事するな」

「送つてやったんだから感謝しろよ」

見上げてみると、ますます凄い。一本の木だけじゃなく、間から何本もの木が生えてきている。

「親方！」

親方？

どんな奴が出てくるんだろう。微妙に嫌な予感がするけど。

「ほえ？ 誰か呼んだか？」

………何か今、とてつもなく間抜けた声が聞こえたような？

「俺つすよ。早嵐」

「ああ、あんさんね」

急に空が暗くなったと思えば、鳥が一羽舞い降りてきた。

「ふぎゃあ！」

着地失敗してるし……

早嵐も冷や汗かいてるぞ。

「だ、大丈夫だ」

「聞いてないです」

「……………」

微妙な空気になった。

「おや、お前は」

俺の事か？

「俺はカゲツ……だけど？」

「上の名前は」

「夜星」

その瞬間、顔を緩ませた。

「やはりな。よく似ていると思った」

?????

「お主の父親にの」

ええ？

「ここに来られるのは俺達一族を除けば、限られた血筋のものだ

けだ」

早嵐が補足説明をしてくれるみたいだ。

「お前、巻物に触れて飛ばされたって言ったな？ それは多分、口寄せ術が書かれた巻き物だ。行き先を決めずに術を発動させると、自分に最も合ったチャクラを持つ生き物がいる場所に飛ばされると。お前が夜星一族の者なら必然的にここへ来るといふ訳だな」

「という事は、父さんもここに？」

「もう何年も前の話だが」

親方と呼ばれていた鳥が答えてくれた。

「そういえば、大事な事を思い出した」

俺はここに来た目的を思い出した。

「木の葉の里に戻りたいんだけど」

「ほう、もう帰ってしまうのか？ もったいない」

いや、そんな事言っただってほら、心配させるじゃん。

「任務でもあるのか？」

「いや、元々中忍試験の予定だったから、しばらくは入ってないけど」

「なら、急ぐ必要もない。お前さん、中忍試験の予定だった、って事は落ちたのだろう?」

誰かさんのせいだね……………

「ここでしばらくの間修行をして、力をつけていったらどうだ?」

「いや、別に修行なら木の葉でも」「甘い!」

「人から教わる事のできるような術じゃあ一生かかっても突破は
できんな」

「なっ!」

「ここに残ればお前さんだからこそ使う価値のある技を教えてやらんでもないが、どうするかどうかはお前さんの自由」

何その一択問題は。

「ああ! 残る! 残ってやる!」

「よく言った」

……………あれ? 見事に口車に乗せられた? なんだか納得でき
ないぞ。

まあいいか、実際帰っても暇だし。

「じゃあ明日から。今日はひとまず寝る」

「寝るんかい!!」「」

一人と一羽のツツコミが炸裂した。

第二十二話 俺流

「そろそろ始めるかな？」

「始めるかな？ って大分待たされたよ」

明日から修行をつけてもらえと思ったなら、一週間は待たされたんだけど。早嵐いわく、いつもの事だから気にするなどの事らしい。

「で、この一週間で色々と見てきたんだが」

絶対に嘘だ。こいつずっと寝てたよ。

「お前さんの技。特に忍術には致命的な欠陥がある」

「致命的な・・・欠陥？」

「そう、術そのものは威力が強い。だが、実戦ではほとんど役に立たない」

!?

「どっいつ事かな？」

「例えば・・・だ。お前さんは大突破が使えたはずだったな」

「そうだけど」

もしかしてこいつ、寝てるだけに見えて本当に見てたのか？

「もしも相手がその技を使ってきたらどうする？」

「風にぶち当たらないように障害物の後ろに隠れるかな」

「の、簡単に避けられるだろう」

「……」

何も言えねえ。

「攻撃で使える技は他には何が使えたか」

「……千鳥」

「なかなか凄い技を使うじゃないか。下忍に使えるような技じゃないの」

「だろ！」

どせっ

「よし、見せてみ」

よっしゃー。やるぜー 「ストップ」

せっかく勢いに乗ったところで急にとまれと言われてつままずきそっ

になった。

「なんだよ。これからがいいところだったのに」

「その技、どう思う？」

なんて抽象的な質問なんだ。

「どうって、豪快な音を立てながら電流が流れて敵を倒す技……かな？」

「そう、それが問題だ」

「どういう、事？」

え？ 何？ ものすごく顔が怖いんですけど。

「音だ音」

「音？」

「そう、その技は轟音をまき散らす。実戦では敵にすぐに気付かれる。使えない」

なんだって!？

「近づくと前に逃げられたら何の意味もないだろ？」

「た、確かに」

「だがものは使いよう。何に使えばいいと思うか」

「……この際はつきり言おう。さっぱり分からない！」

「分からんようだな」

「分からんようだよ」

「仕方ない。特別に教えてよろう……かな？」

「ずいぶんともつたいぶるなあ。誰かさんみたいだ。」

「忍びは突っ込んでいくだけが能じゃない。時には隠れ、そして時には守る技も必要だ」

「守る技？」

「確かに千鳥は相手に攻撃を当てようとするれば失敗しやすい。だがな、敵のほうからこちらに向かってきているなら話は別。勢いに乗ってやってくるんだから威力の大きい技を使えば簡単に当てられるという訳だ」

「おおー」

俺は歓声の声を上げる。

「頭空っぽに見えて本当に考えてたんだ」

「なにやら、聞き捨てならない言葉が聞こえてきたようだが？」

「気のせい」

「まあいい。大突破を攻撃技にして組み合わせれば、もはや無敵」

「おおー」

「さあ、後は実践あるのみだ。早嵐を相手に頼んでおくから」

「いえっさー！」

木の葉隠れの里

225

「今日もカゲツ君いないねー」

「最近姿を見せないけどどういう事かな？」

「何かよからぬ事に巻き込まれていなければ良いのですが」

カゲツが姿を消してから一週間。班のメンバーにはもの凄く心配さ
れていた。

「最後に彼に会ったのはいつですか？」

「中忍試験の時だったかなあ」

「俺もそう思います」

みんな同じような感じですねえ。どうしたものでしょう。

「では何か情報を掴めば教えて下さいね。私は私なりのルートで聞き込みをしてきますので」

「はい」

「分かりました」

(はあ、これまた厄介なものですねえ)

再びハヤブサの里

「じゃ、そういつ訳で」

「いや、ちょっと待ってくださいよ」

早嵐は丸無視で親方は飛び去っていった。

「いくらなんでも技受けはできませんって!」

第二十三話 相棒

「よっしゃー、もうー」

「ちょ、勘弁してくれよ」

「問答無用！」

「ひいー」

見ての通り俺は今、修行の真っ最中だ。

早嵐にしごかれてる…….のではなく俺の方が無理やりつき合わせている。もちろん早嵐はとっくの昔にボロボロだ。

「いててて、少しは手加減しろっての」

「無理」

「即答かよ!?!」

「即答」

「.」

しかし修行って言うっても具体的にどうすれば効率良くなるんだろ

うな。実戦形式っていつても早嵐相手じゃあまり手応えないんだよなあ。図体は大きいけど、あんまり強くはないみたいだし。

「まあいいや。じゃあ今日はここまでにしよう」

「助かった・・・」

早嵐はそのまま沈没していった。

木の葉隠れの里

「一体これはどういつつもりですかな？」

「まったくね」

「ごめんだよー」

ツバサが現在進行形でユウとサザンカの班長コンビに責められている。理由はもちろん巻物をカゲツに使った事だ。

「困ったものですねえ」

「先生、カゲツ君は大丈夫なの？」

ヒバリが心配そうに尋ねる。

「まあ大丈夫だとは思いますが、どこにいったのか分からない限りは何とも」

「木の葉とは関係をつないでいない口寄せの場所に飛んだようね」

「もう！ あなたのせいで！」

怒りの矛先がツバサに向けられる。

「うう・・・」

「そうよ。もしかしたらもう戻ってこれないかも知れないんだから」

「そ、そんな」

ヒバリが今にも泣きそうな顔になる。

「サザンカさん！ あなたはいつもそうやって！ 無用な不安を煽るのは謹んでもらいたい」

「はいはい、分かっていますよ」

ハヤブサの里

今日は久しぶりに親方（早嵐がそう呼んでいたから俺も真似してみた）がやってきた。

「修行の成果はどうか？」

「自分では良く分かんないかも知れない」

「まあ、そんなものか」

俺は親方に呼び出されて、初めて会ったときの大木の所まで来た。

「今日はお前さんの父親と一族について話してやろうと思ってるな」

そついや、そんな事言ってたっけ？

「父さんの事？」

「そつだ、あいつはここでは知らない者はいない」

10羽くらいしかいないけどね……

「お前さんはあやつから一族について何も聞いた事はなかったか？」

「他の里から木の葉へ移住してきた事くらいしか知らないなあ」

その頃の俺、まだ小さかったし。

「そうか。まあ、お前さんの一族とわしら一族は昔ながらの付き合いつてやつだの」

「そうみたいだね」

「大戦期にはここも利用されそうになったのだが、その時はお前さんの一族が身を盾にしてそれを防いでくれた。それについては感謝しきれない」

そんな事が。むしろ何で今まで俺は知らなかったのかってとこだな。うん。

「元々の里にいた頃は毎年夜星一族から一名、優秀な少年・少女がこの里に留学しにきていた」

じゃあ今までも俺みたいに来ていた人がたくさんいたんだな。

「そうやって親交を深めていた。だが、だ」

急に雰囲気が変わった？

ごくり・・・

「ちよつとした事件があつてな」

「事件？」

「さつき利用されそうになったわしらを助けてくれたと言っただろう？ 実はその利用しようとした者こそが夜星一族の出身地、闇隠れの里だ」

いかにも隠れていそうな名前だな・・・

「聞いたことないな」

「無理もない。大戦期に滅びてしまったからな。ともかく、里を裏切った夜星一族は里と決定的に対立する事になった。そして我々も加勢したのだ」

「もしかして、その里が滅んだのって」

「ああ、我々が原因だ」

何だって!?

「もちろん、こちらもずいぶんと被害を受けた。仲間達を次々と失い、見ての通り今でもここは閑散としている」

「.....」

「夜星一族もちりぢり。あちこちの里に分かれてしまったの。元々別の里にいた者もいるのだが、星隠れに露隠れに謎隠れと決して陽の当たるものではない」

そういえば家名に入ってる星はそこから来ているのかもな。

「うん？　じゃあもしかしてその戦いで大活躍したのが！？」

まさか、そうなのか？　父さんはそんな凄い忍びだったのか？

「そう、夜星スバルだ！」

「誰だよ！！！！！」

ガクツと音が聞こえそうなくらいにずっこけた。

「話の流れ的に俺の父さんじゃないの？」

そんなドヤ顔で言われても、その人知らないって。

「ははは。まさか」

「それなら何で知らない者がいないんだよ？」

「空前のお笑いキャラとして君臨していたからだ」

ガクツ

「……………ですよー」

「まあともかく、そんな事があってからここはどここの里とも交わりを断っているから木の葉にはお前さんがいる事が伝わっていない。

だから、そろそろ帰ったほうがいいのではと思ったのだ」

そうだな。そろそろ心配をかけていそうだし。

「じゃあそうするよ」

「なら、その前にだ。これからは自由に行き来できるように正式に口寄せを結んでおくのが良いだろう」

ああ、ツバサがやってたやつか。

「相手は早嵐でいいな」

「もちろん！」

「ではここに血を一滴落とせ」

それはもの凄く太い巻物だった。こんな物で大丈夫なのか？

「試しに一度使ってみればどうだ？」

よし

『口寄せの術』

スドーーーーー！

「いててて」

早嵐が降ってきた。文字通り降ってきた。最初と逆の体勢になった。

「成功のようだの」

「いや、成功って何ですか？」

「カゲツの口寄せだ」

「いやいや、結んだ記憶無いんですけど」

先に何も言っていなかったんだ……

「まあ良い。では木の葉へ」

「いやいやいや、待ってくださいよ」

まあ決まったものは仕方ないよね。

「よろしくな、相棒！」

「いやいやいやいや、説明しろー！」

第二十三話 相棒（後書き）

星隠れ・霧隠れはアニオりにちょっとだけ出てきた里

第二十四話 帰宅

「帰ってきたぜ木の葉！」

「・・・たく、こっちの身にもなれってんだ」

本当は時空間忍術で帰ってこられるはずだったんだけど、親方が術を忘れたとかで結局、無理やり道を作って早嵐の背に乗って帰ってくる事になった。

ちなみに、来る時に通った変な空間にはならなかった。その辺りの事を親方に聞いてみたら、ハヤブサの里は普通よりも離れた場所にあるらしい。簡単に言えば、次元がずれているそうだ。

「まあいいじゃないか」

「よくはねえよ。俺はもう帰るぜ」

早嵐は毎度の使われっぷりに不機嫌そうだ。

まあ、一家に一羽欲しいくらいの存在だけだね。

「お疲れー」

「おっよ」

早嵐はまた、ハヤブサの里に向かって飛び立っていった。

さてと、一カ月近く家を開けていた訳だし、まずは掃除だな。

「カゲツじゃないか」

「うん？」

振り返ってみるとイタチさんがいた。

「お久しぶりです」

「どこに行ってたんだい？ 君が居なくなっただけで班の人は大騒ぎをしている。早く顔を出したほうがいい」

ああー、やっぱり開け過ぎはまずかったか。

「分かりました。行ってみます」

取りあえず、ユウ先生の住んでいる家に行く事にした。

「カゲツ君！」

この声は

「ヒバリ？」

「心配したんだから。酷いよ、どこ行ってた！」

うわあ、完全に怒ってる。

「おらあ！ こっちに来んかい！」

キャラ変わってるよ、まじ変わってるよ。

「問答無用」

俺はヒバリに引きずられていった。

「で？」

「いや、その……………ごめんなさい」

アカデミー時代によく使っていた会議室みたいな部屋で俺＋ツバサとユウ先生＋サザンカ上忍が向かい合っている。

さっきから威圧感が半端ないんだけど。

話題はもちろん勝手に口寄せを暴発させた事と、誰にもつげずに里

を長期間空けた事。

やっちまったい。

ちらりとそっちに目をやってみた。

すぐに目をそらした。

「あーあ、酷い目にあつた」

「まあまあ、お互い様だよー」

解放されたのは夜中だった。三日月の下、人通りの少ない道をつバサと家に向かって帰っている。

ツバサの家は俺の家の近所だ。斜め向かいの裏の家、すぐ目と鼻の先にある、庭に大きな木のある家だ。

「じゃあ僕はここでー」

「おう、またなー」

「どうすればいいんだよこれ」

あれ？　なんだか現実逃避したくなってきちゃったな。あははは・
・

試しに目をつぶってみたけど、もちろん消えてくれるはずもなく、
俺はそれを一から廃物処理するはめになった。

あれ？　なんだか涙が出てきちゃったよ。何でかな？　あははは・
・

うみのウネリin演習場

「はあ、はあ、あと一回」

中忍試験、俺はついに三次試験本戦まで進んだ。アカデミー時代の事を考えれば自分でも信じられねえ。俺は今まで班の中でもお荷物扱いされてきた。気に食わねえ。それも今日までだ。

明日の一回戦はムソウが相手だ。不足はねえ。ぜってーにぶっ飛ばして俺の力を示してやる。

「壁張り付きスクワット1000回」

俺はそこでぶっ倒れた。空はもう夕焼けが終わって、紺色の闇に
つつまれかけてた。

うちはムソウinn居室

明日は本戦、俺の中忍昇格が決まる日になる。これまでの修行に不足はない。今日はじっくりと体を休めて明日に備えよう。相手はウネリ、今まで同じ班で見てきたが着実に力をつけてきているようだ。だが俺は負けん。うちの誇りにかけてな。

絶対に・・・勝てる！

高ぶって止まらない心を抑えつつ、俺は眠りについた。

それぞれの思いがぶつかる中忍試験二次試験本戦まであと1日

第二十四話 帰宅（後書き）

放置されていた他班の二人のストーリー開始です。

第二十五話 中忍試験本戦開始

もの凄い人だ。どこを見ても人、人、人！

「すごい」

「本当に」

思わず感嘆の声を上げてしまう。

今日は中忍試験の本戦。俺達第十二班のメンバーも観戦にやってきた。もちろん注目はウネリとムソウの対決だ。

「あーあ、俺も出たかったなー」

「「お前が言っつな！」」

ナギトの一言にすかさずツツコミを入れる。うん、息ぴったり。

「な、なんだよ、二人して」

「そりゃー」

「なっちゃんのせいだもんねー」

「し、仕方ないじゃないか。そしてなっちゃんって何!?!」

なんて馬鹿なやり取りをやっている間にも人は増え続けている。

「なあ、そろそろ席を見つけないとやばいんじゃないか？」

「そうね」

辺りを見回したけど、空席がねえ。どこも満席、むしろイス取りゲームがあちこちで勃発している。

「あら、みなさんおそろいで」

？

振り向くとウネリ達の班の一人、日向ナツキさんが立っていた。

「観戦にきたのかしら」

「まあ、そんなところです」

「あの二人の応援もよろしくね」

「はい、もちろんですよ」

そのために来たんだよね。ムソウよりウネリを応援したいけど。いつつもあいつは人を下に見てくるし。アカデミー時代に、毎回あと一歩あいつに届かずに2位だったのが悔やしいな。本当に悔しい。この上なく悔しい。

「他のみんなは来ないのかなあ？」

「どこかにはいはずなんだけどな。こっぴどい人多いと分らないや」

「……………」

一人無言のナギト。

「おーい、ナギトいつまでむくれているんだ？」

「どうせ俺なんか、どうせ俺なんか」

「放っておきなよ」

「そっだな」

しばらく終わりそうにないし。

「……………放っておきなよ！」

「なんだ元気じゃないか」

何とか席も確保して、俺達は腰を据えた。そろそろ開会式が始まるらしい。火影様が一段高くなった席で立ち上がった。

「ごほん、お集まりの皆さん……」

十分経過

……忍びというものは……

「ねえ、まだ終わらないのかなあ？」

「去年はこんなに長くなかったらしいんだけど」

ヒバリがそろそろしびれを切らしたらしい。それにしても長い。火影のおじいさん、どうしてそんなにお元気なのですか。

さらに数十分経過

……のようにあたっていただきたい」

「長かった」

「長かったよね」

「長過ぎたわね」

「……………」

多分ナギトが黙っている理由はさっきとは別だろうな。

「では一回戦第一試合を始める」

試験官をやっているフミンシ先生が高らかに宣言した。

「私が負けるとでも思っているのですか？ 棄権するのも手です

よ？」

出てきた雨忍が挑発を始める。

「おだまり！ すぐに二度と口を聞けないようにしてやるから」

相手は草がくれの額当てをしている。その、何だ、中忍試験を受けるにしていはいふんと年……………

グワッ

何だか一瞬背筋が寒くなったような……………うん、気のせいだな。気のせいという事にしておこう。

気のせいだという事にしてくれ……………

「カゲツ何をぶつくさ言ってるんだ？」

「ナンデモナイヨ」

「変なやつ」

「雨隠れの雲牙キリ対草隠れの静森ボタン、試合開始！」

合図と共に二人の姿が消えた。

「は、早い？」

「なんで疑問形なんだ？ 間違いなくあの二人は下忍レベルのス
ピードじゃないぜ？」

ナギトが言わなくても分かっている。目で追うのが厳しいくらい
の戦いが繰り広げられている。

「これが……中忍試験本戦のレベルなのか」

「すごいよね」

「体術では同レベルってとこじゃない？」

「そのようですね、ではこれではどうですか？」

『雷遁・地走り』

キリの発動させた術がボタンに向かって流れていく。

「甘いね 『土遁・土流壁』」

電撃を土の壁がもりあがり防いだ。

「見た？ 今の」

「ああ、特にあの草忍の術、下忍レベルじゃないね。中忍、いや上忍レベルだ」

周りの人たちもざわざわと騒がしくなってきた。

「この試合に勝ったほうが二回戦である二人の相手になるのね」

そうだった。あいつら、本当に大丈夫か？

なんだよ、どうして今回の中忍試験はこんな化け物がいるんだ！？

「な、今回出なくて良かっただろ？」

「お前は黙っておけ！」

何をどさくさに紛れて責任回避しようとしているんだよ！

「ごめん」

「分かればよし」

「本当に三人共仲がいいのね」

ナツキさん・・・その言葉を発するタイミングが間違っています。

「でも、私達の班だって負けてないのよ。今まで鍛えてきた成果、次の試合で見せてくれるはずよ。楽しみにしておいてね」

なんかこういう班員を大切にしてくれる人いいな。いや、もちろん俺達だって思う事はあるけどさ、ヒバリやナギトみたいに同級生同士だと色々よね。

隣の芝生は青いってだけなのかも知れないけど。

おっと、試合の方にも動きがあったみたいだ。

雨忍のキリが少し距離を取ったらしい。そしたらこう言い放った。

「では、これではどうですか？ やれる所までやってみては？」

第二十六話 好敵手の二人

「ならばこれでどうです？やれるところまでやってみては？」

キリの周りに赤い光の線みたいなのが現れ、はち切れた。

「今のは!？」

「チャクラの鎖かしらね」

「チャクラの鎖？」

なんだそりゃ？

「簡単に言えばチャクラを今まで意図的に抑えてたって事よ」

「中忍試験本戦なのには？」

ヒバリの言うとおりだ。普通感覚からすれば今日が本番。今日のためにそれで修行をしてきたとしても、その本番で力が出せなきや意味が無い。

「ええ、どうやらあの子、あのままの状態で勝てると踏んでいたようね」

「すじい……」

「と、すると雨忍のほうが余裕があるって事ですね」

「もう一回！ 『雷遁・地走り』」

さっきよりも勢いよく電撃が走る。

「いいえ、そうとも限らないわ」

「え？」

「だから無駄だって言ってるでしょ？ 『土遁・土流壁』」

「ふっ」

キリがニヤリと笑みを浮かべる。

「そういう事です？」

「なぜなら」

「いただきました」

雷撃が土の壁を破り、ボタンに直撃・・・しなかった。彼女の姿は消えていた。

「なっ」

次の瞬間キリの背後からボタンの姿が現れる。

！？ あの草忍、いつの間に。

「自分の事を研究してきた相手に油断をするようじゃ足元をすくわれる。現に当初の予定に反して鎖を外させられたわ」

「甘い！」

ボタンの回し蹴りがキリに降りかかる。

キリはぎりぎりでかわした。

「凄い反応だ！」

「いいえ、きっとこれで終わりよ。予定を崩されたあの子は周りが見えなくなっているわ」

「勝ったわ」

「なんですって？」

『土遁・土流槍』

その声と共に、キリの右肩に地面から突き出た槍が突き刺さった。

「落ち着きを失くせば簡単なトラップにもひっかかる・・・って事ですか」

「そうよ」

「レベル高いな」

「ちょっとあのボタンって人憧れるかも？」

「ぐう、ま、まだだ」

「諦めなさい」

ボタンがキリの首裏に手刀をして、キリは気絶した。

【勝者、草隠れの静森ボタン】

「おおおおおおおおおお！！！」

会場が一斉に沸いた。

「なかなかハイレベルだったね」

ヒバリが目を輝かせて言った。

「本当に、来年は俺達もあそこに立っていたいと思つよ」

「もうその事は言わないでくれ」

ナギトが顔を赤らめて言う。

突然、大声が聞こえてきた。

「うおおおお！ 感動したぜ！ 俺は今、猛烈に感動している！」

もともとぎわついていた会場だけど、あまりにも大きな声に皆いつせいにそっちを振り返る。

誰だ？ あんな痛い事をするのは？

あ、ヒノデだ。

その横ではハヤシがさっきのナギトとは比べ物にならないくらい顔を真っ赤にして俯いている。アオ八に至っては他人のふりをしている。

何というか、ご愁傷様です。

以外に熱くなる一面があるって聞いたけど、あの事ね。ちょっと違う気もするけど。

あっ、ハヤシがこっちをちらっと見てきた。よし、全力で無視しよう。

本当にごめん……………

「次の試合はいよいよ……………ね」

「ですね」

ウネリとムソウ。アカデミーの時からずっとライバルだったあの二人、といってもウネリが勝手にそう言っただけだけどね。今日その白黒がはっきりするんだ。

遠くの方にウネリの姿が見える。緊張してるのかな？ 顔が若干ひきつっている。

「ねえ、ナツキさん予選ではあの二人どうだったの？」

「そうねえ、二次試験では巻物を奪い合うサバイバル演習みたいな事をやったんだけど、あの二人はどっちが先に巻物を取れるかを競争して、そのおかげですぐに合格する事ができたわ」

あの二人らしいや。

「三次試験予選でもどっちが相手を圧倒できるからで競争して、有言実行、二人とも始まって1分で相手を倒したわよ」

なっ、なんだって。あいつらそんなに強くなったのか？

「一言で言うと、お互いを高めあえるまさに好敵手といったところね」

「ふうーん」

俺も負けてられないな。

「おっ、始まるみたいだぜ」

「では、第一回戦第二試合を行う」

出てきた出てきた。俺達から見て右にムソウ、左にウネリだ。

互いに食いつきそうな目でにらみ合っている。

「木の葉隠れのうちはムソウ対木の葉隠れのうみのウネリ、試合開始！」

第二十七話 激突！ウネリvsムソウ

「ついに来たぜムソウ、俺がお前に勝つ瞬間がな」

「無理だ」

「それはこいつを受けてから言え！」

「お前に先に術を繰り出させはしない」

ムソウがもの凄い勢いで起爆札付きのクナイをウネリに向かって一直線に投げた。

「喰らうかよ！」

ウネリがそれを避ける、だがその間にムソウは印を組み終えていた。

『火遁・豪火球の術』

「でたー、うちは一族のトレードマークの技！」

「あの子の豪火球は威力もすごいのよ」

「やっぱそう来たかなら攻撃は最大の防御 、『水遁・水乱波』」

「あいついつの間にあんな術使えるようになったんだよ!？」

「私もしらなかったー」

「俺もだ」

・・・ムソウ視点・・・

俺の放った炎が水に相殺され、辺りに水蒸気が立ち込める。

「そこだ!」

その言葉と同時にクナイが飛んできた。

だが遅い。俺は悠々とそれを避けた。いちいち掛け声なんかをあげるから避けられるんだ。普段ならそう言ってやるところだが、今は試合中。相手にヒントをくれてやるつもりは無い。

『火遁・鳳仙火』

この試験のような1対1の試合では一瞬で勝敗が決まる。俺は牽制をしつつ、最後の大技へ向けて期を待つ事にした。

・・・ウネリ視点・・・

ちっ、どうしてなんだ。俺の放った渾身の水乱波。本来は水遁は火遁に強いはずなのに、あいつにはあいこがせいぜいだった。今まで同じ班で見えてきたから分かる。あいつは強い、文句無しにだ。

だから・・・今この瞬間がとてつもなく楽しい。絶対にこの試合に勝って、中忍にも昇格して、そんでもってあいつに俺の実力を認めさせてやる。

「そんな猫だましの技が効くかよ！」

様子をうかがっているのかあいつは最初の豪火球以外、小技しか出してこない。ならあいつに本気で焦らせてやるまでだ。俺はクナイを片手にあいつの繰り出す技を避けつつ、全速力で突進した。

・・・ムソウ視点・・・

何て事だ。俺の技に微動だにしない。それどころか完全に無視してこちらへ走って来る。

「ちつ、『火遁・豪火球の術』」

「ぐわあ！」

一旦追い返したか・・・

「まだまだ、喰らえ」

次の瞬間、俺の腹に激痛が走った。

・・・ウネリ視点・・・

熱ちちちち、もろに喰らつちまった。いや、それでも俺の蹴りはあいつにきつちりと決まったはずだ。

こっちも結構くるな。けど止まる訳にはいかねえ、あいつは一瞬の隙をついてくる。目を離す訳にはいかない。

砂煙の中、あいつは立ちあがった。

視点OUT

「すごい、二人とも立ちあがったぞ」

「あいつら、さすがだな」

目下で繰り広げられる熱戦に周りもざわつき始めている。

266

「やりやがったな。今のは結構効いた。だが勝つのはこの俺だ！」
ムソウがここまで聞こえるくらいの声で叫ぶ。

「そんなに荒い息しあがって、ボロボロだぜ？　いつもの余裕はどうしたよ」

そう言うウネリもジャケットがあちこち破けている。

「もうチャクラもあまり残ってないんじゃないのか？」

「へっ、お前こそ」

「俺はまだ余裕だ」

「いつまで言っただらぬか試してみるか？」

言うや否や、またウネリがムソウに向かって走り出した。それに応えてムソウも走り出す。

会場の真ん中で二人がぶつかった。

ムソウが姿勢を低くして避けると、足を回してウネリの体勢を崩そうとする。

ウネリも負けていない。とっさに上に飛び上がって避けると

『踵落とし！』

「ぐわっ」

もろに喰らったムソウがもんどりを打つ。

「お次は「させるか！」」

『木ノ葉昇風』

「避けきれない！？」

ムソウが上空へ一撃を放ち、ウネリは飛ばされた。

『影舞葉』

さらにムソウが追い打ちをかけに向かう。ウネリは体勢を立て直せない。

ちっ、まだチャクラの回復が足りない。だが俺には次の技がある。これで決める。

『百舌落し！』

ムソウがウネリを後ろから抱え込み、そのまま地面に突っ込む。

「何を考えているんだ、あのままじゃあいつもノックアウトされるぞ」

激しい轟音と共に砂煙が上がった。

「はあ、はあ、決まった」

俺の全身全霊をかけた一撃だ。体術・百舌落し、使用者にも負荷がかかる故に一撃必殺の技だ。

「ウネリ、お前も」「ま、だ、だ」「」

!?

その瞬間、会場全体が息を飲んだ。

「あいつまだ立てるのか!」

「ウネリ、大した奴だぜまったくよ」

「信じられない」

「ウネリ君・・・」

ウネリは立ち上がった。ボロボロになりながらも、確かにその場に立っていた。

「な、どうして立っていられる?」

「勝ちたいからに決まってるだろ!!!」

ウネリが吠えた。

「か、かっけえ」

ん? ムソウが笑っている?

「そうこないとな!」

俺はこの試合勝つためにどんな修行にも耐えてきた、今は輝かせてもらっぜ！

うちはの威信にかけて、そして俺のプライドにかけて、俺は負けない！

もう言葉は要らない。お互いに距離を取る。

「次で決めるぜ」

「俺ももう何もない」

緊迫した空気が立ち込める。

『水遁・水龍弾』

『火遁・豪龍火』

二頭の龍が激突した。

あまりの出来事に俺達はしばらく声も出せなかった。

目の前で起こっている事とは裏腹に、鳥のさえずりの小さな鳴き声
が聞こえる。

一瞬の間を置いて、それは歓声に変わった。

【勝者・うみのウネリ】

第二十八話 歓喜そして再始動

俺は今、医務室の前にいる。薬品のきつい匂いが鼻を刺激する。

さっきから歓声が聞こえる試験会場も気になったけど、二人が心配だからこっちに来てみた。

「よう、生きてるかー」

「うるせえ、今あちこち痛いんだ。話しかけんなって」

ウネリはさっきのムソウとの対戦には勝ったものの、重傷を負っている。こりゃ二回戦は無理だな。

「俺、勝ったんだよな。夢じゃないよな？」

「夢だと言ったら？」

「言わせない」

「じゃあ聞くなよ」

俺は笑って言った。

「何しにきたんだよ全く」

「別に？ おめでとつって言いに来ただけ」

「嘘つけ」

本当なただけだな。

「今度同期で真剣勝負するならこのおれだぜ！」

「負ける気がしねえな！」

俺も負けてられない。帰ったらもう一度特訓だな。

その後ムソウの様子も見に行っただけど、意識が戻らないらしくて面会謝絶だった。まあそこはまた今度でいいや。

「あ、カゲツ君。二人の様子はどうだった」

向こうのほうからナツキさんがやってきた。

「ウネリはまあ元気そうだったけど、ムソウのやつは面会謝絶でしたよ」

「そう・・・」

「まああいつの事だから大丈夫でしょう」

「そうよね。じゃあ、ウネリの病室に行ってくるわね」

本当いいなあ、あついう先輩がいて。

会場に戻ると、ちょうど一回戦が全試合終わったところだった。

「あつ、どうだった？」

「残念だけど、二回戦は無理みたいだ。肋骨と両足を骨折だって」

「まあ仕方ないな。互角の実力であれだけ激しくぶつかったんだ」

その後も試験は続いた。さっきの試合ほど盛り上がったのはなかったけど、例年と比べて強者が多く会場は熱気につつまれて大盛況だった。

そして決勝戦。

『土遁・心中斬首の術』

すでに動けなくなった相手は避けられずに地面につつまった。首元

にクナイが当てられる。

「実戦では終わってるわ。私の勝ちでいいですわよね？」

【勝者・草隠れの静森ボタン】

「やりましたわ」

結局二回戦でウネリと当たる予定だったボタンが優勝した。試験結果は後日通知されるらしい。

一回戦第一試合 静森ボタン（草隠れ） 雲牙キリ（雨隠れ）

一回戦第二試合 うみのウネリ（木の葉隠れ） うちはムソウ

（木の葉隠れ）

一回戦第三試合 万次郎（砂隠れ） 日向ヒカリ（

木の葉隠れ）

一回戦第四試合 国土キア（木の葉隠れ） 香風ミドリ（

草隠れ）

二回戦第一試合 静森ボタン（草隠れ） 不戦勝 うみのウネリ

（木の葉隠れ）

二回戦第二試合 万次郎（砂隠れ） 国土キア（木

の葉隠れ）

決勝戦 静森ボタン（草隠れ） 万次郎（砂隠

れ)

「来てよかったよ」

「本当ね」

「俺達m・・・ギロリ・・・何でもない」

ちくしょう！ 来年は絶対に俺が主役になってやるんだからな！
決意を胸に俺はさるのだった。うん、決まったな。

「じゃあまた明日来るわね。病院でムソウとケンカしたりするんじゃないわよ」

「お袋と同じ事言ってんじゃないわねえよ」

「はいはい」

ナツキはそれだけ言うと、病室の扉を開けて帰っていった。

ここは木の葉病院の一室。試験会場からそのまま来た。というよりも運ばれてきた。

「・・・俺が、あいつに、勝てた。ずっとトップの座を走ってきたあいつに勝ったんだ」

今でも信じられねえ。大口叩いてたが、本当は不安だった。それでも勝った、その事実は誰が何と言おうと変わらねえ。それって・・・

「いよっしやあああああああああああああああ！！！！
俺最強！！！」

叫ばずにはいられなかった。

PS・かけつけた看護婦にももの凄い勢いで叱られた。

「俺が負けたか。ふっ、情けねえ」

あいつに勝っている自信はあった。確かに実力はつけてきていた。だが所詮それもここ数か月の話。アカデミーの頃から毎日修行は欠かさず、主席の座を守り続けてきた俺にかなうはずもない。俺に勝とうなんて驕りも良い所だ。そう思っていた。

だが、あいつは強かった。それもどうしようもないくらいに。全力でぶつかって、そして負けた。生まれて初めて実力差を感じた。素直に悔しいと思った。

驕っていたのは俺の方だったのかも知れない。だがこのまま終わる気もさらさら無い。うちの名に恥じぬよう、抜かし返せばいい。そして勝利をこの手につかんでやる。

まずは治療が先だな。少しでも遅れはとりたくない

「また、明日からだ」

第二十八話 歡喜そして再始動（後書き）

砂隠れの忍びって名字あるのでしょうか？

それとも砂漠の〜赤砂の〜が名字？

第二十九話 中忍の素質

それは、突然の報告だった。

当然と思いながらも俺達一同が驚いた。

「うみのウネリを中忍に任命する」

な、なんだってー!?

「ひゃっはー、おめえ凄えな」

俺がウネリの髪をもみくちやにする。

「さっすがだねー」

ツバサもウネリを小突く。

「まったく、何でお前らまでついてくるんだよ」

ウネリの中忍祝いのパーティーに偶然出会った俺と十一班のメンバーも勝手についてきた。

「先輩ならやれると僕は最初から信じていましたよ」

「何気の上から目線だなおい・・・」

「えっと、おめでとう」

それぞれに声をかけられて、ウネリは少し照れくさそうにしている。

「まあな」

和やかなムードが流れる。和気あいあいといった感じた。

一名を除いては。

「おい、ムソウ険しい顔するのはいいかげん止めとけって」

来た時から不機嫌そうなムソウに痺れを切らしたケナミ先生が口を開いた。

「別にそんなつもりじゃないですよ」

「おうおう、どうした？俺に先を越されて悔しいかよ」

「だ、黙れ！」

・・・・・・悔しいんだね。

「次はは絶対にお前を倒してやる」

「無理」

ブチッって空耳が聞こえた。本当にそれが空耳だったのかは本人にしか分からない謎だ。

「てめえ今すぐ表出る！」

「望むところだ！」

「はあー、また始まった」

ナツキさんがあきれ返っていた。

なにはともあれ、それでもあいつは凄いよ。調子者のあいつだから自慢されそうだから言わないけどな。

「ありがとうございます」

「お安い御用ですよ」

温和な顔をしたおじいさんにつこりと笑いかける。

よし、任務終了。今日は結構頑張ったな。一日に三件、Dランクと
いっても大変だ。一度の失敗で信用が下がるなんて本当に理不尽だ。

「何やってんだカゲツ、早く帰らないと日が暮れちゃうぜ」

「そうよ、そうよ」

「おう、今行く」

火影室に報告にいくとなぜかみんなが集まっていた。同期全員集合だ。

「あれ？ みんなどうしたんだ？」

「おお、ちょうど良いところに来たの」

「どういふ事です？」

え？ 何？ 状況が飲み込めないんだけど。

「お主たちを集まってもらったのは他でもない」

？

「実は我が火の国の大名様が視察にいくとの事で護衛依頼が来ておつてな」

おお？ 周りもざわつき始める。

「それほど危険な場所を通る予定は無いのだが、万全を期すために大勢で護衛を行ってほしいとの事なのじゃ」

「まさか、それって」

思わずヒバリが声を上げる。

「うむ、新人の育成も兼ねてお前達四班に行ってもらおうと考えておる」

きたきたきたー！ 重要任務きたぜー！

「おお、ついに」

「やったねー」

「みんな、気合入れていくわよ？」

それぞれが歓声を上げる。

「まあ元々の護衛の方々もおるし、そう気張らぬともよい」

いやいや、ぜひ気張らせていただきます！

「では任務の内容を詳しく説明しよう。行程は大名から出発し、波の国、茶の国と会談と視察を行い、火の国へ帰ってくるというものだ。日時は一週間後から二週間になる。途中山賊などが出没する場所もあるので注意するのじゃ。詳しい場所については地図に記しておく。各自気を引き締めて参るのじゃ」

「」「はい！」「」

「つてあれ？ 火影のおじいさん、さっきと言っている事が違っているような？ まあいいか。」

「では解散。健闘を祈っておるぞ」

「いやー、こんな任務を任せてもらえるなんて光栄だなおい」

「今度は逃げ出すんじゃないぜ、ナギト」

「うっ、お前結構根に持つタイプだな」

「それはそうとさっきウネリが呼び止められてたけど何だったんだろうな？」

解散を告げられた後、「ウネリは残るのじゃ」の一言があった。

「俺に何の用ですか？ 火影様」

「うむ、お主はこの度の試験でめでたく中忍として認められた訳じゃが」

「ごくり・・・」

「中忍とあるう者なら小隊長として周りに指示する能力も必要じゃ」

「つまり・・・？」

「今回の任務は大人数な故、いくつかの部隊に分ける事もあるじやろう。その暁にはお主に先導する事もあるじやろう」

「え、ええ！？」

「良いか？ 今回の任務はお主の中忍としての技量を磨く意味もあるのじゃ。しっかり期待に応えるのじゃぞ」

笑顔で火影様はそういった。

この・・・俺が・・・ふふふふ

「燃えてきた！ ああ、やってやるうじやないか！」

ウネリ様の活躍の瞬間が来たんだ！ 今から任務が楽しみだぜ。

第三十話 役人の思惑

それは豪華の一言では片付けられない代物だった。全体が金でできていて、装飾物には目が眩しくなるような宝石が使われている。それを目の当たりにした一同の反応はまさに唾然茫然。かくいう俺もその一人だ。

「すげえ」

「すげえとしか言えねえ」

それが大名の乗り物の第一印象だった。

「こちらが今回の依頼者で、大名様の側近をしておられる雨宮力スムさんです」

一番年上のユウ先生に紹介されたのはもういい歳をしたおじいさんだった。

「ども。よろしゅう頼みます」

よく見るとこの人も結構豪華そうな服を着ている。高いんだろうな・

・

「どうか致しましたか」

「えっ？ いや、何でも」

じろじろ見てたら気付かれてしまった。気を付けよう。

「行程はこの間説明した通りです。今日は一気に国境付近まで進む事になります。くれぐれも粗相のないよう」

「はい」

「では行きますか」

カスムさんが合図をすると、数百人単位の集団が一気に動き出した。どうやって合図を伝えているのかは分からないけど、かなりの迫力だ。

「なあ、カゲツ」

しばらく歩いているとウネリが話かけてきた。

「うん？ どうした？」

「何かあの人、慇懃無礼って感じだよな」

「そうか？」

「なーんか嫌な予感がするぜ」

どうしてそんな嬉しそうな顔で言うんだよ・・・

「じゃあその予感が外れる事を祈るよ」

「そうだな」

感情が全くこもってないって。縁起でもない奴。

結局そ今日は特に変な事は起こらなかった。まあウネリの言う事なんてあてにはしてないけど。

それぞれが分かれて泊まる事になった。

「じゃあみんな、今日はこの辺で集まって野営するか」

ウネリ達の担当のケナミ先生の主導で今日はここにキャンプを張る事になった。

「ちくしょう、なんだよあいつら」

「本当に協力する気あるのかしらねえ」

「私、無いと思うんだけどー」

あちこちから不満の声が上がる。事は数十分前にさかのぼる。

「ではあなた方は外で泊まるようにお願い致しますな」

その一言であっさりとさしらわれる事になった。

「部外者は大名様のお近くには置かない規則ですので」

まったく、近づけない人をどうやって護衛しろと。

「ですが、護衛対象から遠ざかれば遠ざかる程注視が必要な範囲
円の半径は広がります。得策とは思えません」

ユウ先生が一言入れたものの、これまた

「規則ですから！」

の一点張り。依頼者の希望を無視する事もできないし、仕方なく引き下がる事になった。

「どうにもかたくなだねえあの人は」

普段温厚なハヤシも不快感全開といった雰囲気だ。

「ふんっ、役人とはそういうものだ」

「ムソウ、あんまり大声で言ったら聞こえるって」

- 3 カゲツ・ヨモギ・アカネ
- 4 ハヤシ・ツバサ・ヒバリ

1 チーム2時間で4交代だ。

「じゃあ、お願いするわよ。班はそれぞれの特徴見て決めたから」

「えーっ、サザンカ先生本当ですか？」

ヒバリが不満を表情に満面に表している。

「さあ？ どうかしら？ ユウさんが勝手に決めた事だから。ちよつと4番目のチームが弱いかなあ？」

「なっ、なんだとー！」

ヒバリ！ 口調がおかしくなってるから！

サザンカ先生も言わなきゃいいのに余計な事言うつから。何気に凄く失礼だなこの人。

「まあそんな訳で私に何言われても困るからね。じゃあ後は頼んだわよ」

それだけ言い残すとどこかに行ってしまった。

「ずいぶんと無責任だなあ」

「いつもあんな感じなんですよ。あの人は」

「ヨモギ君も苦労してるね」

「分かってくれます?」

「ご苦労様です。」

国側の部隊の中、担当上忍達が集まって、今後についての計画を練っていた。

「どうもおかしいですねえ」

「何がですか?」

「今回の任務が始まってからというもの、まだ一度も大名様は顔を出さない」

ユウが眉間にしわを寄せる。

「それは警護のためでは?」

「我々がその警護を任せられているのですよ? 側近達は素人です。何かあった時にお守りできるとは到底思えません」

「まあ・・・確かにそうですね」

愛犬をブラッシングしながら、ケナミも首をかしげる。

「それにです」

ユウはさらに続ける。

「まだ大名様の護衛の経験が少ないあなたは知らないでしょうが、いつもならこんな事はなかったのですよ？」

「それはどういう事ですか？」

「私は今まで何度もお供をさせていただいていますが、少なくとも前回まではお顔を見せて下さっていましたし、警備もすぐ近くで行う事ができていました」

沈黙が流れる。

「それが今回はどうです？ 護衛対象であるはずの大名様の姿さえまだ見ていないのですよ？」

「うーん、確かにそれは妙ですねえ」

「フミシさん、依頼を最初に受けたのはあなたでしょう？ 何か心当たりはないのですか？」

それまで黙っていたフミシが口を開く。

「さあな。ワシから言える情報は何も無いが」

ユウが一瞬懐疑の目を向けたが、それ以上話が発展する事は無かつ

た。

「そうですか。ならいいです」

（フミシさんは木の葉の中でも国とのパイプ役になっている方ですからねえ。いざという時はあちら側の味方でしょう。まあ我々は同じ火の国の者。任務中に滅多な事はないと信じたいですが）

「たっだいまー。どうしてそんな怖い顔していんですー？」

空気を読まずにサザンカが帰ってきた。

「いえいえ何も。では明日の行程についてなのですが・・・」

（仕方ないですね。もし何かあれば私が何とかするしかありませんね）

ユウの長い苦悩が始まるうとしていた。

それと同じ頃

「亥の刻になったね。夜間警備開始だ」

「俺達は時間が来るまで仮眠を取っておくよ」

ルーキー下忍軍団＋新中忍1名の長い夜も始まるうとしていた。

第三十一話 長い夜

第一グループ ウネリ・ムソウ・ナギト

「俺達からだな」

「俺の足だけは引っ張るな」

ウネリがにやりと笑ってつぶやく。

「それは俺の台詞だ！」

そう、これはムソウがいつもウネリに言っていた台詞。

（へへ、前から一度言ってみたかったんだ）

中忍に真っ先に昇格できた事もあり、すっかりいい気になっていた。

「ちっ、今に見てる」

（それも俺が何度も言ってた台詞だな）

ウネリは心の中でうすら笑いを浮かべた。

「ふああ〜」

ナギトが空気を読まずに大きなあくびを一つした。

「おいおい、まだ始まって5分も経ってないぞ」

すっかり白けたムードが流れた。

「まあ気を取り直して。今日はまだ火の国の中だし、のんびり行こうよ」

「それもそうだな」

まだまだ夜は長い。

「暇だなあ」

「それについては同意する」

ムソウが珍しくウネリの意見に賛同する。さすがに同じ場所ですっ
としていただけでは飽きてくる。

「こんな時のために持って来たんだけど、どうだ？」

ナギトが非常食用に持ってきた乾菓子のよつなものを取り出した。

「おっ、気がきくな」

「遠慮なく貰うぞ？」

「ちよーと待ったー」

ナギトがビシツときれいに手で停止した。

「な、何だよ？」

「それはお湯で温めたほうが美味いんだよ」

「どっちでもいいじゃねえか」

「ダメだ。俺は食べ物には完ぺきを求める主義なんだ」

ナギトはこうなるとかたくなだ。

「水はここにあるから、あとはムソウ頼んだ」

「おいおい、気がきくと思っただら詰めが甘いなお前」

「持ってきてやっただけいいと思えよ」

「ちつ『火遁・鳳仙火』」

「いよっ、かつこいいー」

どう考えても馬鹿にしているようにしか聞こえない一言になぜか照れるムソウだった。

第2グループ ナツキ・ヒノデ・アオハ

「あーあ、血の雨降らねえかな」

「縁起でもない事言うんじゃないわよ」

いきなり危ない発言のヒノデをナツキが咎める。

「つまんねーじゃねえか」

「そうよそうよ」

「おうアオハ、おめえも分かってんじゃないじゃねえか」

ナツキははあと大きなため息をついた。

「滅多な事は起こらないに越した事はないのよ」

「そうよそうよ」

「.....」

「あなた、どうなってほしい訳？」

微妙な空気が流れる。

「まあいいわ。二人とも、頼んだわよ」

「けっ」

「えー」

「あれえ？ 何か文句でもあるのかしら？」

目が笑っていませんよ、ナツキさん。

(こいつ、やべえ。笑いながら殺気飛ばしてきやがる)

「ちっ、仕方ねえな。やってやってもいいぜ」

「あ、あたしも」

二人ともあたふたしながら答える。ケンカの絶えないウネリとムソウを基本的に止めようとしなないケナミの下で、どうやって班を纏めているのかが分かる一幕だった。

第3グループ カゲツ・ヨモギ・アカネ

「はうん・・・大丈夫かなあ？」

「少なくとも今のうちはそんなに心配しなくてもいいと思いますか？」

「そうだぞ、アカネ。そんなんじゃあ俺達まで不安になるよ」

「でもさ、でもさあ」

（はあ、そんなので大丈夫なのか？）

怯えてばかりのアカネに頭を抱えるカゲツだった。

「もし何かあれば僕がいつもみたいに先輩を守りますよ」

（何この子かっこいい、じゃなくていつもってどついつ事だ!？）

「うん、ありがとう。頑張れる気がしてきたよ」

（だめだ、この空気ついていけないぞ……………）

数十分後

ざわり……………

「ひっ、何の音？」

「風じゃねえのか？」

ざわり……………

第4グループ ハヤシ・ツバサ・ヒバリ

「むきー、絶対にあのおばさんを見返してやるんだからー！」

ヒバリはサザンカに言われたことをまだ根に持っているようだ。

「酷かったよね」

「ねー」

「見返すといっても何するの？」

「さあねー」

「ハヤシ、考えてよ」

(ええ？ 僕に無茶ぶりしないでよ)

「ZZZ・・・いびき」

「寝るなー！」

結局誰も思いつかなかったようだ。ツバサに至っては爆睡中。

忍びが夜間警備中に居眠りって本当に大丈夫なのだろうか？

「退屈だなー」

どの人も言う事は同じらしい。

「仕方ないじゃない。これだって任務なんだから」

「けどそろそろ夜も明けてきたみたいだよ」

東の空がゆっくりと紺、瑠璃、青色に変わってきている。

「おーきれいだー」

「もうそろそろ担当時間も終わりだね」

「おおーい」

向こうから人影が駆けてくる。

「そろそろ終わりだ、みんな集まってるぞー」

カゲツが集合を伝えるに来た。ヒバリは一つ伸びをした。

「よーし、終わったー」

担当上忍達 ユウ・フミシ・サザンカ・ケナミ

「……と以上です。明日は国境を超える事になりますので」

ユウが次の日の行程について話している。

「はい」

「ああ」

「分かりました」

「それからもう一つなんですが」

ユウが少し声を落として言う。

「どうも向こうの連中はあまり厳重な警備はしていないようで」

「まだ国内だからじゃないんですか？」

「ええ、確かに。私の勘違いなら良いのですが……」

「つまり……どういふ事ですか？」

「いいえ、忘れて下さい」

「フミシさん、現在似たような任務を受けている者達がずいぶんと居るようですが？」

「さあな」

何か含んだ様子のユウ、必要以上に無言のフミシに疑問を抱かずに
はいられないケナミ。

一方サザンカは

「ZZZ」

弟子が弟子なら師匠も師匠であった。

第三十二話 山賊がどうした！（前書き）

今回はちょっと不完全燃焼気味

第三十二話 山賊がどうした！

「いやー、いい朝ですなあ。みなさん、おはようございます」
例のおじさん、名前は何だったっけ？ が自分の禿げ頭を撫でながらやってきた。

「ああ、カスムさんですか。どうもおはようございます」

そっぴやそんな名前だったか。

「では、今日もよろしゅうこと」

「もちろんですとも」

ユウ先生の眉が微妙に吊りあがっている。こっぴう時は不機嫌な証拠だ。昨日の事もあるし、多分本心から言っていないんだろうな。

「みなさん、各自準備はできていますね？」

「はい」

「おす」

「では、各自配置について出発といきましょー」

俺達十二班のメンバーは進行方向の右後ろ側にいて、もしもの時は遊撃隊になる。

今日は文字通り雲ひとつない絵に描いたような快晴だ。

「なあなあ」

俺は近くにいたお供の人っぱい同じ年くらいの少年に声をかけた。

「僕かい？」

「大名様ってどういう人なんだ？」

「大名様かい？ そりゃあ凄く偉い人なんじゃあないかなあ？」

いや、そういう意味じゃなくて・・・

「そういう意味じゃなくて人柄とか、あるだろ？」

「そういわれてもねえ。僕もあんまり会った事ないんだよ」

困ったような顔をして答えた。

「前に見た印象ではどこか抜けたような印象だったね。あんまり一国の統治者って感じはしなかったよ」

「なるほどなるほど」

つまり馬鹿d・・・うん。

「火影のほうは世襲制じゃないよね？ 三代目ってどんな感じの人なんだい？」

「え？ 火影のおじいさん？」

いきなりどんな感じと言われると意外と困る。なんだかんだで親しみやすい人だけど、今は火影室で執務をしている姿しか見たことがない。火影になるくらいだから、かなりの実力はあるはずだけど、昔はどうだったのかな？

「そうだな。一言でいえば、普通の優しいおじいさんってところだな。こつちもあんまり里のトップらしい雰囲気ではないな」

「へえー」

「みなさん、止まって下さい」

その時、先導していたユウ先生が一団を止めた。

？

「ここより先は谷の国に入ります。さらに、しばらく進んだ場所にある峡谷には山賊が出るとの情報が入っているので十分に注意して進んで下さい」

山賊か・・・ぶっそうだな。

俺はげんなりした顔になった。出会わない事を祈ろう。

結果

現れやがった

しかも右から左からざっと50人

崖の上に

ひえええ・・・・・・・・

「金目のものは全て置いていけ。さすれば命までは奪わん」

「はあ。あなた達はもう少しばかり相手を見極める技術が必要そうですね」

「何を!？」

ユウ先生が山賊の頭らしい大男に冷たい視線を向ける。その後ろでカスムが必死にユウ先生の背中を押しているのは中々にシユールだ。

「あなた達こそ退いて下さいませんか。私達はわざわざ敵対する気はないので」

「ふざけるな! おめえら! 殺^やつちまえ!」

「はあ、面倒なものですね」

そっぴいっつ右手を挙げた。

合図だ!

次の瞬間、俺達は一斉に走り出す。大人数相手の時用の動きだ。俺は一旦崖を駆け上がり、山賊の前に立つ。

「この糞が!」

目の前のひげもじゃが鉄の棍棒を振り回してくるが、所詮素人の動き。俺からすれば止まって見える。とりあえず、2、3人を殴り飛ばしておいた。

「どうしたよ? 俺に近づく事もできないのか?」

俺は相手を挑発した。上から狙われると分が悪い。谷底へ引き込むためだ。

「こしゃくな！」

びっくりするほどあっけなく安挑発に乗ってきた。馬鹿だな。

思わず笑みがこぼれそうになるのをぐっと我慢して、俺は相手をいなしながらそのままゆっくりと後ろへ退がる。

「ここだ！」

俺は手裏剣を投げ上げた。相手に逃げる隙は与えない。

『風遁・烈風掌』

風の流れに乗った手裏剣が次々と山賊を襲う。

「ざまあ」

特に大きな抵抗もなく、全員を倒せた。弱い、弱すぎるな。これなら一般人でもそれなりの力があれば勝てるくらいだ。

「さてと、次の奴らをとっちめてやろうか」

俺はもう一度崖を駆けのぼる。が、

「引け！ 引けー！」

今度は一目散に逃げ出した。

「逃がさねえぞ」

足元に全力でチャクラを送り込み、スピードを上げる。が、

「カゲツそんな奴らに深追いは無用だ。戻ってこい」

ケナミ先生に水を差されて、仕方なく諦める事にした。

「分かりましたよ」

その時、すぐ近くからドカーンと大きな音が響き渡った。

！！！！

「な、なんだ!?!」

見るとムソウが倒れていた。

「おい、どうしたんだ?」

ケナミ先生と二人で急いで側に駆け寄る。

「くっ、あいつら起爆札持ってやがるぞ」

「何? まさか!」

「ケナミ先生?」

急に顔を青くしたケナミ先生は無線を片手に取った。

ナツキ、白眼で南西10時の方向を見てくれ

はい！ 『白眼』

何を見つけたんだ？

相手のチャクラ、どうなっている？

そうですね、数名チャクラを操れる人物はいるようですが、大した事はありませんよ

そうか、分かった。ありがとう

「どうやら取り越し苦労だったようだな」

「何かあったんですか？」

どうも話の流れが読めない。

「これを見るんだ」

それは起爆札の残骸だった。

「これがどうしたんですか？」

「ここをよく見てみるよ」

「見せる。なっ、これは！」

ムソウが驚愕の声を上げる。

「どうしたんだよ？ 俺にも見せてくれ」

ムソウから起爆札をひつたくると、そこには見覚えのある印がついていた。

「これって・・・木の葉の」

「ああ、そうだ。木の葉隠れ特製の起爆札だ」

「確かこれは他里には持ち出し禁止じゃ？」

「本来ならな。誰かが密かに持ち出したんだろう」

「それはまずいんじゃないのか？」

ケナミ先生がゆっくりとムソウにうなづく。

「ああ、そうだ。木の葉の内部犯の可能性も多いにありえる。帰ったら報告しなきゃな。幸い、今敵の中に忍びはいないようだ。起爆札の使い方だけ教えてもらったらいいな」

良かった。けど、何かまた厄介な事がありそうだな。

「ひとまずは残った奴らを片付ける事だな。他の援軍に行つてやれ」

「はい」

「分かった」

援軍といつてもほとんどがとつくに仕末されていた。ただの山賊、それほど手ごわい相手じゃないからな。

「みなさん、無事ですか」

「いやはや、おかげで助かりましたとも」

「それは良い事です」

ユウ先生はちらりと目をやっただけだった。

「では、行きましょう」

俺達はまた、谷底の道を進む事になった。

第三十三話 懲りない奴ら

「やっと着いたー！ー！」

色々であったものの、無事に俺達は最初の目的地である谷の国国交場についた。

俺達は会場には入れないから外での護衛になる。大体は班ごとに入出口前での護衛だけど、ユウ先生とケナミ先生だけは中までついていって、ナツキさんは白眼で遠方の監視、ムソウはその護衛にしている。

そして何とユウ先生の代わりにウネリが俺達の隊長をする事になった。

「って、なっなんだってー！？」

「その反応はないだろう」

「ウネリがねー。本当に大丈夫なの？」

「頼りないって奴だな」

「カゲツお前・・・相変わらずの毒舌っぷりだな。っーかどうし

てお前達までそうなんだよ・・・」

「俺の辞書にオブラートの文字は無い！」

「うぜーよ！ この上なくうぜーよ！」

「というか俺そんな毒舌キャラだったっけ？」

「とっ、とにかく、隊長ったら隊長だから。これでも実力で中忍になったから」

「はいはい」

「ヒバリ、そんなに軽くあしらわないでくれよ・・・」

いつも通りの意味不明なじゃれ合いのやり取りだった。

会談場

「どうもご協力、感謝感激です」

「なあに、お安い御用ですよ」

楽しげに話す人々の頭上で一つの影がつごめいていた。

(やはりな。ワシの睨んだ通りだ。後でダンゾウ様に報告せねば。表に出れば、里・国が荒れるのは必至だからな)

見覚えのあるジャケット。それは第四班担当上忍の油女フミシの姿だった。

いや、正確にはそうではない。ふと姿が崩れると、そのまま数えきれない程の黒い塊になった。それはフミシの蟲分身だった。何が目的であり、何を知ったのかは彼以外は知る由も無かったが、蟲分身からの情報を聞いた彼の目は暗い光をたたえていた。

「せんせーどうしたの？」

アオハが不思議そうな顔で聞く。

「何でもない。集中しろ」

「はい」

警備といっても結構暇だ。夜間警備もそうだったけど、ここじゃあさらにたくさんの目があるんだからそうそう問題が起こりそうに

もない。まあ人を隠すには人の中ともいうけどな。

「あーあ、何か問題でも起こればやる気出るんだからな」

「なんて護衛にあるまじき発言だよ……」

「いー バキンッ！

！？」

「なんだ？」

突然、音がしたかと思うと足元に手裏剣が刺さっていた。

「敵か？」

どこだ……地面に刺さった角度から発信源を割り出す。

「あの木の上だ！」

そして一瞬人影が見えた。

「よし、追っぞ！」

「待てよ、カゲツ」

勢いをつけたところを急に止められて、俺は天等しそうになった。

「なっ、何だよ？」

「俺達の任務はこの会場の警備だ。あんまり深追いはできない。ひとまずこれを他に伝えよう」

「ああ、分かったよ」

「私はどうすればいい？」

ヒバリが聞く。

「ヒバリはカゲツについて行ってくれ。俺はナギトとここに残る」

「分かったわ」

「おう、任せろ」

俺とヒバリは全速力で駆けだした。

「一体お前たちは何をしていたんだ？」

ケナミ先生が不機嫌そうに言う。

「それが白眼でも見えなかったんです。おかしいですね」

敵を発見して合図を送る役だったナツキとムソウはどういう訳か発見できなかったらしい。

「白眼の死角ねえ」

「……………すみません」

「まあいいさ、床に傷が入った事以外、何も被害は出てないしな。それより、これだけで終わりだとは思えない」

「その通りです」

ユウ先生が話をつなぐ。

「手裏剣のような武器を使ってきたのですから、単なるいたずらという事もないでしょう。何か目的があると考えられます」

「それにこの会場は公表されてる、つまり狙いやすい……………ですね」

「その通り」

辺りに重い沈黙が流れた。

「さらには……………あつ、少し待って下さい」

ユウ先生が無線を取る。

「ええ、はい……………なっ、なんですって!?! 分かりました。すぐに追って下さい」

突然慌てたようになった。一体どうしたんだ？

「ユウ先生、どうしたんですか？」

「カスムさんが何者かによって連れ去られたようです」

ぬあーにーにー！！？

「あのおっちゃんか？」

「まずい事になったわね」

「だからいわんこっちゃんいのになー」

「まったくです、始めから・・・ぶつぶつ」

ユウ先生の本音だな。

「とにかく、こっついていても始まりません。第四班と第十二班で追いましょう」

(フミシさんを残していくのは不安が残りますからね)

「さあ、事態は一刻を争います」

「はい」

「大した事ないな。あいつら足跡を残していつてら」

「油断は禁物ですよナギト君？ 罾かも知れないんですからね」

まあ、さっきの山賊がそこまでできる奴らだとは思わないけどな。

「そんな事ないって」

「アオハ、その自信はどこから来るんだよ・・・」

「実力かなあ？」

それはねーよ！

「くくく、やっと面白くなってきやがった。これも 「それはね

ーよ!」「」

「まっ、まだ何にも言っただけじゃねえか!？」

思わず突っ込まずにはいらなかった。

「むむ？ 止まれ!」

突然フミシ先生が制止をした。

「見ろ、あれを」

うん？ 指さす方角を見上げてみると、もくもくと煙が上がっていた。

「あれは？」

「山賊達が使う狼煙ですね。どうやらあちらにいる可能性が高そうですね。」

「どうします？ このまま近づきますか」

「いいえ、私が様子を見てきましょう。何か情報が掴めればここへ帰ってきます。もしカスムさんの安全が確保されており、そのまま攻撃できるようなら光球を打ち上げますので、各自の判断で動いて下さい。フミシさん、頼みましたよ」

「ああ、任せろ」

「くれぐれも・・・ね」

なんだ？ 突然雰囲気が変わったぞ。

ユウ先生が試すように言うと、急に辺りの空気がこわばった。

「・・・分かっている」

「では、行ってまいります」

ユウ先生は狼煙が上がった方向へ向かって行った。

「ユウ先生とフミシ先生、仲悪いのかな？」

ヒバリが小声で話し掛けてきた。

「さあどうだろう。何かあったのかな」

やけに風が生暖かく感じる。それでも今は目の前の事に集中だ。

カッ

突然強烈な光があたりを照らした。

合図だ！

「よし、行くぞ」

俺達は光の元に向う。

それからすぐに廃屋のような建物が俺達の目の前に現れた。

「見えたぞ、あそこだ」

さっきの光球のせいか、騒がしくなっている。

「来ましたね」

木の上にユウ先生がいた。

「相手は混乱しています。半数が陽動に出て、その隙に裏の納屋に入れられているカスムさんを救出しましょう」

「よし、分かった。じゃああなたの班は陽動に向かえ」

「いいでしょう」

「では・・・散！」

俺は山賊がひしめく山小屋に突入した。

第三十四話 敵も味方も秘密だらけ

「うわ！ なんだお前達は」

俺達が突入して、山賊達はまさに戦々恐々だ。

「なっ、木の葉の忍びか！？」

「てめーら！ 引け、引けー！」

「逃がす訳ないだろってんだ」

山小屋に潜んでいた山賊達を片っ端から倒していく。

建物の中では風遁を使う訳にはいかない。下手すれば俺達まで吹き飛ばされるからな。それでもチャクラを使えない相手なら体術だけで充分だ。

「なんでお前らが？」

「印残し過ぎなんだよ！」

15人くらいを叩きのめしたところで辺りを見たら、もう残っているのはいなかった。

「やったね」

「ちよろいな」

ユウ先生がお手製の縄で倒した山賊達を縛って完了だ。後で谷の国に引き渡すらしい。

外に出ると、ちょうど救出作業のほうも終わったみたいだ。目を回したカスムのおっさんをフミンシ先生が背負っている。

その姿を見ると、ユウ先生に引っ張られている突然山賊の一人が声を荒げた。

「カスム！ てめえ裏切ったな！」

！！？

次の瞬間、気を失っていたはずのカスムが目を覚まし、すぐ隣に居たその山賊に足蹴りを喰らわした。

啞然としていた俺達は止める暇は無く、山賊は白目をむいて倒れた。

「カスムさん？」

一体どういう事だろう？

「説明してもらえますかね？ 場合によっては今後の態度を改めさせていただけますが」

「何の事だか分かりかねますなあ」

「カスムさん！」

ユウ先生が語気を荒げる。

「いいですか？ 任務には信用が不可欠です。我々は必死の覚悟でやっているのですから、あなたがたにも協力していただきたい。少なくとも必要以上に情報を隠すような事があってはならないのですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カスムはふてくされたようになった。バツの悪そうに下を向いている。

「はあ、だんまりですか。まあいいでしょう、我々にはやる事がありますからね」

一拍間を置いて、ユウ先生は続ける。

「ですが、任務が終わればあらいざらい話して頂きますよ。必ずね」

結局そのまま微妙な空気の中、会場まで帰ってきた。

というか、勘弁してほしい。

なんとこつちに帰ってきてからまた一悶着だ。

「ですから、何かしらの手がかりを持っているこの者をそのままお渡しする事はできません」

「そのような事情は知らん。我らは与えられた職務を果たすのみだ」

ユウ先生がカスムについて話していた山賊を国の警備隊に受け渡す事を拒否した事から話がこじれてきた。

「杓子定規で物事を語るな」

「なにを、一介の忍びのくせに」

「何と言われようとかまわん。そいつを受け渡す訳にはいかない」
フミシ先生も一步も引かない。

「その通りです」

「黙るのだ。貴様らに拒否権は無い」

「はあ、困った人達ですねえ」

「さあ、連れて行け」

警備隊の部下らしい人達に命令する。

「おい、待て！ くそ！」

さるうとする警備長にユウ先生が声を掛ける。

「厄介事を残して最終的に困るのはあなた達だという事をお忘れなく」

「もうひとつ」

フミシ先生が警備長を一睨みしてから言う。

「あまり、上を信用するなよ？ お互いの、ためにな」

フミシ先生は何か知っているのかな？ 疑問に答えてくれるはずもなく、俺の嫌な予感には心に留めておく事にした。

「よいしょっと、なんだかくたびれちゃった」

よじやく今日の警護が終わった俺達は宿に来ている。

「やっぱり宿に来るとぱっと解放されるよな」

「後で温泉のほうにも行くつぜ」

「そうだな」

少しの間だけ平和を味わえる。何だかサイコーだ。

「やつほーいー番乗りだ！」

真っ先に飛び込む。やばい、超気持ちい。

「お前調子に乗り過ぎだろ・・・」

「いいじゃねえか。今日くらい」

「ガキかよ!？」

「ガキだろ?」

「うう、確かに」

そんなコントなやり取りをしていたら、ガラガラと入口の扉が開いてそして爆音が聞こえてきた。

ド
ド
ド
ド
ド

「ひゃっはーいー!」

ガツンッ

「グオッ」

ひざ蹴りが後頭部に直撃した。

「うおおおおお!? 行ってええええ!!」

目の前を星が泳ぐような衝撃に、全俺が悲鳴を上げた。絶叫を上げた。

「おっ、すまんすまん」

振り返るとウネリがいた。衝突してきた奴の正体はこいつらしい。

「おっ、すまんすまん、じゃねえよ!」

さらにまた後ろの扉が開いて爆音が・・・

『風遁・風導流』

「つて、ひえええ!?!」

誰かが飛ばされていった。

「よし、回避」

「い、いきなりなにするんだよう」

ハヤシだった。

「はははっ何やってんだよ」

「あ、ウネリ君酷いよ」

ハヤシの間の悪さは相変わらず健在だな。

その後も人口密度がみるみる内に増え、俺達はずいぶんと賑やかな時間を過ごした。任務中にこういう時間は貴重だ。

「あれ？ ムソウはどこに行ったんだ？」

同期の他の男子勢はみんな居るのにあいつだけ姿が見当たらない。

「ウネリ、知ってるか？」

ムソウと同じ班のウネリに聞いてみる。

「ああ、それなら」

「おい、遅せーぞ！」

栗色の美しい毛並みをした大型犬が見た目とは裏腹の荒々しい言葉で吠える。言葉を操れるあたり、忍犬だろう。

全員大爆笑。

「あの、ムソウが？ プライドの高さに定評のあるムソウが!？」

「信じられねえ!」

「涙が出てきたぞ」

俺も、ハヤシも、ツバサも、ナギトも、ヨモギも、普段笑わないヒノデですら手を叩きつけて笑っている。

「なんでそんな事になってんだよ？」

「まっ、あいつは色々あるんだ」

?????

夜空の下でずっと笑い声が響いていた。

「男湯のほうつるさいわねえ」

「まったく、落ちつかないっいたらありやしないわ」

旅行か何かに来ていたらしいおばさん達がボヤク。

(・・・なにやってるのよあいつら。私が恥かくじゃない)

半分湯に沈めたヒバリの顔が赤くなったのはのぼせただけではなかった。

（私もナツキさん達と一緒に散歩に行けば良かったなあ）

男性陣のテンションに反比例してヒバリのテンションは下がる一方だった。

第三十四話 敵も味方も秘密だらけ（後書き）

この章、ものすごく長くなる気がしてきたんだぜ。

第三十五話 楽しまなきゃ祭りじゃない！

「見てみて！ あのぬいぐるみカワイイ！」

「ほんとだー」

「あつちも良くない？」

「うんうん！」

私達、木の葉隠れのルーキー下忍のナツキ、アカネ、アオハの3人は宿の近くで開かれているって聞いたお祭りに来てた。

「いいわねーこの賑やかな雰囲気！」

「祭り大好き」

「あたしもー」

和やかなムードが流れてるなー。みんな楽しそう！

「あつ、あつちに行こうよ」

アオハちゃんが走っていく。私とアカネちゃんも。

「きゃっ」

「わっ」

突然アオ八ちゃんが誰かとぶつかったみたい。私も一緒に転んじやったり。

「あっ、ごめん」

「もう！ 何てことするのよ」

「じらじら」

失礼すぎる発言に、私は無理やりアオ八ちゃんの頭に手をやって下げさせる。ぶつかった相手は、私達と同じくらいの年齢の女の子だった。

「あれ？ さっきの」

「アカネちゃんの知り合い？」

「うん、さっき宿で会ったの」

あっ、さっき宿に入った時に外を見てた子か。

「ユキちゃん大丈夫？」

「ああ、ありがとう」

綺麗な茶色がかった髪をふるって立ちあがった。

「アカネの仲間かい？」

「うん、ナツキさんとアオハちゃんだよ」

「そうか。あたいは宿番やってる凍土ユキだよ。うちの宿使ってくれてありがとね。よろしく」

へえー、宿の人だったのね。

「こちらこそよろしくね」

一歩前に出て握手した。

「あんた達も祭りを見に来たのかい？」

「いいえ、任務の途中なの。ほら」

木の葉の額当てを鞆から取り出して見せてあげた。

「ふーん、くの一なんだ」

「なによー、その残念そうな顔は？」

アオハちゃんの言うとおり、なぜかちょっとおかしな反応だった。

「ん？ いや、別に。あっ、そうそう。そろそろ宿に帰らなきゃな。また」

「えっ？ あっ、頑張つてね？」

急ぐように去って行った。まるで嵐のような人ね。

【宿】

一人の上忍と一匹の忍犬の部屋。

「ユウさんは話が長くて閉口するな、全く」

相変わらずの重すぎる雰囲気の打ち合わせだった。

「そう言うもんじゃないぜ？ ケナミ。あいつ、ああ見えて結構無駄話は少ないから」

「俺は真面目すぎな人は苦手なんだよな」

狼牙に適当に答えると、俺はだらっと寝転がる。

「ハハハッ相変わらずだな」

「だつてよー、K 「ああー！ー！！！」」

突然の叫び声に振り返ると、宿の少女もとい、ユキが立っていた。

「お客さん！ ペットは連れ込んだんじゃないかって表に書いてあったでしょう！」

ブチッ

「だ、だれがペットだゴルあ！」

投げかけられた禁句に狼牙が吠える。

……いけねえ、面倒事起こしたらまた叱られちまうな。

「黙りなワンコロ！ さああんた、もたもたしないでさっさと連れ出しな」

「ぬあんだと！？ そっちがその気なら俺様の」

何か危ない事をやらかしそうだ。

俺は慌てて止めに入った。

「その辺にしとこうぜ狼牙」

「ちっ」

「分かったら、とっとと頼んだよ」

ありがてえ。気の強い少女がさっさと帰ってくれた。

「気分悪い。ムソウに八つ当たりしてくる」

「おっっ……っておい、ちょっと待て！」

時すでに遅し、狼牙の姿は見えなくなっていた。

「やっちまったよ」

相変わらず生徒を守れなかった俺はすでに諦めの境地にいた。

「あれえ？ あれはムソウ！」

「本当だ。何やってるのかしら？ おーい！」

「あっ」

「そんな所で何やってんの？」

「いや、別に」

「良かったら、ムソウ君も一緒に回らない？」

「今は・・・いい」

あれ？ 顔色悪いよ？

「えー回ろうよー」

「そろそろ沢山いたほうが楽しいって」

「・・・断る」

あれ？ なんだか焦ってるの？ さっきからものすごい量の冷や汗を流しているんだけど。

「なんでなのよー」

「おい！」

突然後ろから凄みのある声が聞こえてきた。

「俺達の命令さぼってこんなところで仲良くお喋りとはいい度胸じゃねえか」

あっ、ケナミ先生の・・・

「ほらよ、俺がついて行ってやるから・・・さっさとしろー！」

「わっ、分かったから」

そのままどこかに連れていかれた。私達の間にとっても微妙な空気が流れる。

「はあ、またね」

「いつもあなの!?!」

まあいつものムソウ君のイメージからはほど遠いよね。

「うーん、そういう事になるかしらね」

「……………」

「……………」

「さ、さあ今度は向こうに行きましょっつね」

ごめんね。フォローできないや。

「っつね」

「あああ……………」

数名が大浴場の岩場で倒れていた。

「全く、何やってんだか」

事の始まりは、ウネリが長湯耐久勝負をしようと言いだした事だ。そしてどいつもこいつもみんな粘る粘る。

「体力の限界くらい見極めろつての」

ウネリ・ハヤシ・ナギトの3名がノックアウトされた。

本当、あきれるしかない。

「ふんっ、馬鹿馬鹿しい」

と一蹴したヒノデに今回ばかりは同意だ。

「……俺達が運ぶしかねえか」

「勝手にしろ」

「ええー、ヒノデ兄も手伝ってよー」

「そつだと思つんだー」

「なっ」

俺達が口ぐちに文句を言う。

「断る」

『風遁・風導流』

「おいっ、何をする!」

「逃がさねえぜ?」

「くっ」

お前だけに楽はさせないぜ!

「ああー楽しかった」

「そろそろ帰らないとね」

辺りはもう店も閉まって暗くなってきちゃった。

「これから、どうする?」

「えっと、そうだユキちゃんも誘って部屋で集まるっよ」

「そうね。仕事があるかも知れないけど、一度声かけてみようか」

けどさっきの態度が気になるんだよねえ……………

(お、重い・・・)

やっと馬鹿どもを運び終わったと思ったら、すごい大荷物を持ったあからさまにこつちを見ているおばあさんと目があった。

当然、無視できない。というか無視したら確実に罪悪感に襲われる。なのに、何が入っているのかは知らないが荷物が予想以上に重い。

(そもそもなぜにこんな荷物持って宿に来てんだよ・・・)

心の中でばやきが止まらなかった。

「うん、あれは？」

目の前の階段をちょうど玄関から入ってきたアオハが横切ろうとしている。

「おい、ちょっと手伝ってくれねえか？」

「うん？・・・あつ、急いだからダメ。じゃーねー」

「そうかそうか、ってうおおおいー！」

あつさりスルー。その間、わずから秒の早業。

「てめえ遊びに行ってたじゃねえかああああー！！！」

結局、俺が最後まで運んであげる事になった。

「はい、これでいいですね」

「助かりました、おかげさまで、ありがとうございます」

かすれ声でお礼を言ってくれた。

「それにしても、ずいぶんと荷物が多いんですねえ」

本当に、だよ。

「ユキっていう孫がこの宿で働いてましてね、差し入れを何にしようか迷ってねえ、結局全部持ってきました」

なんとまあ・・・

「いつもおばあさんが持ってきてあげているんですか？」
(こんな大量の差し入れを)

「いえいえ、前までは娘婿さんやもう一人の孫がね」

「そうですね・・・じゃあ、俺はこの辺で」

「ああ、ちょっと待って下さいな」

「どうしたんです？」

まさか、「これも運んで」とか言われないうな？

「……………役人のカスムには、気をつけておくんせえ」

！！？

第三十六話 裏の顔

「カスムって……」

当然今回の任務の依頼主の名前に決まってる。役人といえば、一人を指す事は明らかだ。

「どうして……そんな事を言うのです?」

確かに胡散臭い奴だったけど。

このおばあさんが任務の事を知っているのは問題ない。谷の国との会談がある事は周知の事実だし、額当てをしているんだから俺達が木の葉の忍びだつてのは見れば分かる。

そこから護衛任務だと推理するのは難しくない。

けど今回の任務での疑惑といい、カスムについて何か知っているならそれなりに裏を知っているはずだ。俺は警戒心を強める。

「そんなに難しい顔なさんな」

おばあさんは、ゆっくりと続ける。他のメンバーに伝えるべきかな? いや、ここは一度聞いてみる価値はある。

「詳しく、話してもらえますか?」

「ええ、いいでしょう」

なにやら高級そうな手元のお茶をすすった。

「あれは、ちょうど一年くらい前だったかねえ」

「ごくり……」

「この辺りとは違って、わたしの住んでいた場所は不毛な土地で、いわゆる貧困街だったよ。だから生きるためにそれた道へ走る者も多かった」

「……うん」

「国の中心へ資源が流れていつちまうのです。そんな中であやつが現れたです」

「あいつって、あのカスムって人か？」

「そう、火の国から来た役人カスム」

おばあさんは渋い顔をした。

「あやつは我々の生活を守ってくれと言いおったのです」

「いい事じゃないですか」

「だがな、引き換えに条件をつきつけてきた」

「条件？」

「谷の国・・・祖国を荒せと」

はい？

「一体どういつ事です？」

「火の国と谷の国は同盟国。しかし、それと同時に土地をめぐる敵でもある」

.....

「つまり、火の国側につけ。そうすれば生活を保障してやる。そう言ったのですね」

「ええー、そうです。背に腹は替えられん。娘婿と孫息子は、山賊の名を借りた火の国の手先として働いておるのです」

やだなあ、こつこついの。って待てよ？

「あの、一つ質問していいですか？」

そう、おばあさんの話を信じると一つ大きな疑問が残る。

「今回、俺達はその人達と戦ったかも知れませんが」

「なんですと？」

「理由は火の国の大名一行を襲撃してきたから。これっておかしくないですか？ 火の国からの要請で山賊達は動いているのですよね？」

「ええ、そこが問題です」

？

「あやつは・・・カスムは、自分の保身のために我々を裏切った」
保身だって？

「あやつは国からの頼みだと言っておったが、実際にはあやつの独断だった」

「どうしてそんな事が分かるのですか」

「孫息子が・・・かわいいウミが伝えてくれたのです」

「・・・その人も山賊の一人なんですね」

「ええ」

なんてこった。面倒な事聞いたな。

「当然、そのような事が認められるはずがありません。足がつく前にあやつは自ら討伐役を買ってであった。そしてあやつは自らを襲わせるように命を出した。我々はおどらされただけ・・・」

「すべてあいつの自作自演という訳、ですね」

「うむ」

うなづく声に悲痛な感情がこもっている。

「それを、どうして俺に？」

「あんた方は木の葉隠れ、火の国の忍び。カスムの実情を知って
もらいたかったのです」

「俺はただの下忍ですけど？」

「別になあんにもしてくれなくてもいいですよ。ただ、話を聞いてほしかった」

「本当にそれだけですか？」

俺は試すように聞いてみる。

「できるなら……孫と……娘婿さんを助けておくん
せえ」

無理と言っしかなかった。だけど、俺はそんな勇気始めから持ちあ
わせて無い。ちらりと目をやった先に、ついさっき捕まえたあいつ
の写真が見えたから。

「そうですね、考えておきます」

その後が大変だった。おばあさんは泣き崩れ、結局俺が解放されたのはずいぶんと経ってからだった。

「どうして俺に言ってくれたんだろうな？」

もしかしたら、今まで誰にも言えなかった事を、他人の俺だからこそ言えたのかも知れない。

「……カスムの事だけは伝えておいた方がいいな。あの陰険なおっさんめ、今に見てる。」

考えてみたらおかしい事ばかりだったじゃないか。きっと大名様と顔を合わせられないのは、木の葉側、例えばユウ先生達が話をし、矛盾点を突かれなかったため。カスムが裏切ったと言っていたのは、今聞いた通りなんだろうな。

役人御用達の宿

「少しばかり邪魔が入ったが、意外と簡単に成功しそうだ」

「いやあ、めでたいめでたい」

二人の男女が何かを喜びあっていた。一人は背が高く、妖艶な印象を受ける若い女性、もう一人はカスムだ。

「これで我々も安泰ですな」

「大名様もさぞ喜ぶことだ。はははは」

高笑いだけが響いていた。

「五光だよ」

バシツと決める。

「ひゃええ」

「すい」

「ユキちゃん、花札すごく強いね」

「まあ、こんなものだよ」

あたいに勝とうざい100年早いっての。まっ、呼んだあなた達のミスだっけね。

「よし、まだ行くよ」

けど邪魔が入った。

「あれ？ 何でお前らがいるんだ？」

「カゲツ君」

「まあいいや。ええと」

同じ木の葉の忍びか？ なぜかあたいに近づいてきた。

「ああ、ユキって人……だよな？ これ、おばあさんが渡して
って」

「ばあさんが？ 分かった、受け取っておくよ」

またいつもの差し入れかな。ありがたい事だよ。

「ねえねえ、その中身何？ 何！？」

「内緒だよ」

「けちー」

アオハは頬をふくらまして拗ねた。実際大したものが入ってないんだらうけどね。

「そうだ、カゲツ君も一緒に花札やらない？」

「俺はいいよ。第一、花札知らねえし」

「教えてあげるからさ」

「さっきまであんたもちゃんと分かってなかったじゃないか」

あたいは思い出して笑った。

「ちょ、それは言わない約束よ？」

「そういえば、ユキちゃんは誰から花札教えてもらったの？」

「それは……」

え？

何？

何なの？

なぜか空気が急に変わった。すぐくまらずい場所にタイミング悪くきてしまった感満載だ。

「兄貴からだよ」

ああー、完全にトラウマ掘り返しちゃったんだな。取りつくろったように言っただけ、目が笑っていないよ。

「どんなお兄ちゃんだったの〜？」

アオハ！ お願いだから空気読んで！ それ明らかに聞いてちゃいけないじゃん！

「あ、ああ。まあ普通だよ。今はちょっと会えてないんだけどね」

「ふーん」

「さあ、続き始めるよ？ で、あんたはどうするんだい？」

いきなり声を掛けられてちょっと狼狽した。

「えっ？ ああ、俺はこれから行くところあるから」

「そうかい。荷物はありがとう」

「どうも。じゃあ」

そう、俺にはおばあさんから聞いた話を先生達に伝えるという重要な役割がある。

第三十六話 裏の顔（後書き）

作者は花札を知りません（笑）

第三十七話 なんてこった

「もう行くのかい？」

「ええ」

ちよつとの間の休息終了。俺達は次の目的地の波の国へ向けて出発する。ユキちゃんが仕事のあいまをぬって見送りにきてくれた。今は、ナツキさん達と別れをおしんでいる。

俺は伝える事は統括役のユウ先生に伝えておいた。だから別にどうって訳にはならないだろうけど。カスムについても、ユウ先生は元々信用していなかったみたいだからな。反応は意外にあっさりで、やはりですかの一言だけだった。

「そろそろ合流しにいけますよ」

「じゃっ」

「またいつか」

俺達は、国の隊が待つ場所へ歩き出した。

「いやあ、どうもどうも、ご足労様です」

「仕事だからな」

カスムはフミシ先生が適当に対応する。

「多分今日の道程はあまり心配はないでありましょうから、周りを囲って下されば結構です」

俺達11班はこの間話をしてきた子のいる、若いお供の隊に並ぶ事にした。

余談だけど、ケレなんて変わった名前をしている。

「やあ御機嫌よう」

きさくに声を掛けてきた。きつとこいつらは上司がどうしようもない屑だなんて知らないんだろうな。

「今日も頑張っつていこうな！」

「あつ、うん」

「……………え？ 何だ？」

突然ナギトがケレの手を掴んだ。

「お前、傷がつんでいるじゃないか」

「ああ、3日前の騒ぎの時にちょっとな」

「俺に任せろ」

ナギトが医療チャクラを送り込むと、みるみるうちに治っていく。

すげえ！

今更だけど、ナギトの奴も結構やるな。

「おおっ！？ 傷口が跡形も無くなってるぞ！？」

「ざつとこんなもんだ」

「まじサンキュ」

1時間後

傷がまた開きかねない事態が起こる

というよりも起こってしまった。

結論から言おう。またカスムが連れ去られた。

「私とした事が」

ユウ先生が悔しそうにつぶやく。

「あいつら、俺達上忍に集中させやがって。しかもよりによって人数の少ない時にきあがった」

そう、今は隊の人数が減っている。近くを流れる川に怪しい音が聞こえたって事でフミシ先生とサザンカ先生がいない時を狙われた。今度は完全に人海戦術だった。前よりも格段に人数が多い。目の前の敵だけで必死になるくらいに。つたみみたいな独特な絵柄の服装からして、この間と同じおばあさんから聞いたメンバーに違いない。もうカスムからの支援が期待できなくなつて、自暴自棄になつたの

か？ どちらにしても、カスムはまずい状況に置かれているはずだな。これは死んじゃったかもね。

「初めからその時を狙っていたのかも知れませんか？」

ユウ先生が指摘する。確かに計画性がありそうだった。

けどその割には仲間を切り捨てて真正面から突っ込ませるなんて無茶な事をしている。

「早く、見つけたほうがいいわよね？」

「もちろんです」

実際カスムの自業自得だけど、木の葉の一員として放っておくわけにもいかないからな。

俺達はまた救助に向かう事になった。

「そこ、足跡がありますよ」

「おっ？ こっちに何か落ちてるぜ？」

ちよつとずつ痕跡を探しながら進む。気が遠くなるような作業だ。

日程的に止められないって事で、カスムを探しにきたのは俺達第

十二班とウネリ達の第六班だけ。より分けられてたから人数が足りないんだ。

ペキッ

うん？ 今なにか踏みつけたような？

足元に落ちていた紙を拾ってみると、大きめの写真だった。

「これって」

見覚えのある人が写っていた。それは宿のおばあさんと、ユキちゃん、もう一人はさっき俺が一発殴って追いついた奴だった。

「こつちに行つたみたいですよ」

特に何も考えずに伝える。俺ができるのは、ただ任務として山賊達を見つけ事だけだ。

「地図で見る限り、この先に廃鉱山があります。そこを拠点としている可能性が高そうですね。この際一気に潰しましょう」

「「はい」」

「もう時間がありません。このままではカスムさんが無事でいる保障は無いです。見失ってしまう可能性もありますが、いちかばち

か急いで向かいますよ」

俺達は木を飛び移っていった。

「どうだい？ ナツキ」

「間違いありません。ここにいるようです」

ナツキさんが白眼で廃鉱山全体を調べてくれている。白眼すげえ。

「人数は？」

「70・・・80・・・100人弱ってところですよ」

「思ったより多いな」

ケナミ先生が舌打ちする。

「それに、先ほどの事を考えてもただの山賊といったレベルではないですね。ここからはあえて慎重に行くべきでしょう」

「ごくり・・・」

誰かが生唾を飲み込む音が聞こえた。

「すぐその入口には誰もいないみたいですよ」

「じゃあ、そこからだな」

「カスムさんは見つけられますか？」

「今やっていますが……入り組みすぎて完全には把握できないうです」

白眼もチャクラを使う。ナツキさんも結構辛そうだ。

「入ってみて中に集中すれば、見えやすくなるかも知れないよ？」

ヒバリが提案する。

「どうかな？ やってみるだけの価値はあるかも？」

「そうですね。どちらにしろ、我々は進まなくてはなりませんから」

ナツキさんとユウ先生も賛同する。

「決まりだな」

早速ケナミ先生が入口の大扉から入っていく。

中は元鉱山なだけあって、あちこちが崩れ落ちていた。

「こんなところに人なんているのかな？」

「ええ、間違いないわ・・・けど」

ナツキさんはなぜか歯切れが悪い。

「どうかしたか？」

「先生、見えなくなりました」

「何が」

「さつきまで白眼で見えていたのに・・・今は霧に覆われたみたいになんにも見えません」

「何だって!？」

「どういう事だろう?」

「ユウ先生、これどう思います?」

「分かりませんが、何か白眼を阻害するものがある事は確かですね」

「いや、それは見れば分かります。なんてしようもない事言ってる場合じゃないけど、それってかなり危ないんじゃないのかな。」

そしてこういう予感は大抵的中する。

「誰だ!!!」

突然ケナミ先生が大声を上げた。

それに俺達は驚く暇もなく。

落ちた。

歩いていた床が何の前触れもなく抜けた。一体どうなってやがんだ。

「うわあ! 下! 下!」

「横抗に逃げ込むんです!」

下には岩が針のようになっていた。声が聞こえるまでもなく俺は横穴に飛びこんだ。

「つて」

たった今入ってきた穴がふさがった。

「今度は何だよ!?!」

壁の両側からチャクラが吸い取られていくのが分かる。完全に罨にかかった。

「ちきしょう。これは早く抜け出さないとやばいな」

こんな狭い場所じゃ風遁系の技は使えない。なら残るのは

『千鳥！』

全身全霊をかけて、雷遁チャクラを纏わせる。この状況じゃチャンスは多くて二回だ。

「どわあああああああああああ！！！」

ドンッ

鈍い音とともに、壁がぶっ壊れた。

「た、助かったあ」

電気に弱い質の壁だったのか、予想以上に簡単に空いた。まあ結果がよけりや問題ないってな。

ふと周りを見てみたら、完全に土がむき出しになっている鉱山らしい場所だった。

「誰か聞こえる!？」

.....

俺の声は不気味に吸い込まれていくだけだった。

「.....」

みんなは無事かな。急に不安になってきた。

「とりあえず、奥に進んでみるか」

俺は暗い坑道を歩いていった。

第三十八話 任務失敗

「誰か聞こえてる!？」

大声を出して黙った。よくよく考えればどこに敵が潜んでいるか分からないのに、俺がかつすぎるだろ。

「それにしても」

辺りはほぼ暗闇に近い。途中から壁の発光機に火がついていなくなつた。

「こんな時にユウ先生がいてくれたらなあ」

ため息をついた。俺は火遁が使えない。

「まあ、ここにいたって安全じゃないしな。行くっきゃねえか」

もう一回気合を入れ直して進みだす……はずだった。

足元に手裏剣が投げつけられるまでは。

!?

とっさに飛び退く。

「お前は誰だ？」

振り返ると、無茶苦茶こわもてなおじさまが立っていましたとさ。

何この人？ 顔見ただけで泣きそうだ。

今更だが、さつき大声を出したことを後悔するしかなかった。

『風遁・大突破』

先手必勝。廃鉱山でしかもこんな場所に一般人なんているはずがない。敵に決まっている。なら全力で戦ってもかまわないよな。

「ぐわっ」

よし、後は

「逃げるおおおおおおおおおお！！」

「待ちあがれ！」

足の速さには自信がある。追いつかれてたまるかってんだ。

ビュッ

すぐ頬の脇をクナイがかすめていった。

「おいおい、まじかよ」

「待てと言っているのが聞こえないのか!」

聞こえてるよ。聞こえてるけどさ、待つわけないじゃんそれ。
にしてもあいつとんだだけ脚早いんだよ!? 俺本気で走ってるぜ?
それなら

俺は腰から出した手裏剣を放り投げた。

『風遁・烈風掌』

風に押された手裏剣が強面野郎を襲う

「ぐわああああああああああああ」

振り向かない、振り向かない、振り向いてやるもんか。

「な、なんだ?」

「おい、どうした!?!」

今まで静まり返っていた坑内が一気にざわつきはじめ。

「やべっ、完全に蜂の巣つついた」

俺は逃げる。必死に逃げる。一目散に逃げる。

「あいつは誰だ？」

「捕まえる！」

！

声が聞こえた上を見上げると、いつの間にか天井が開けてた。そして上にある通路が・・・あっ、人で埋まってる。

何だか状況がどんどん悪くなっているのは気のせいですか？

ああ、上から色々飛んできたよ。あははは・・・ってぶお！

急に視界が閉じられたと思ったたら水の中だった。捕まったのか？浮力で体の自由が利かなくなる。水をかいても体が半回転するだけだ。

「うっ、息がで・・・き・・・な・・・」

俺の意識はそこで途切れた。

ずいぶんと太った・・・いや、ふくよかな中年女性が何かを感じたように後ろを振り返った。

「おいサザンカ、さっきから集中できていないようだがどうしたんだ？」

「いいえ、なんでもありませんよ」

「先生、さっきからキョロキョロしてばっかだよー？」
ツバサが怪訝そうな顔をする。

「いや、大丈夫だから」

といつつ、サザンカは不安気な表情を崩さなかった。

私の第六感はよく当たるのよね・・・

目の前が真っ暗だ。気持ちの悪いものがうねうねと動いている気がする。

「けほっ」

「おい、カゲツ。大丈夫か？」

段々と意識がはっきりしてくる。それと同時に、気を失う前の記憶がよみがえってくる。

俺は飛び起きた。

「！ ウネリ、どうしてここに」

俺の目の前には見慣れた幼馴染の姿があった。

「良かった。大丈夫みたいだな。なかなか起きないから心配したじゃねーかよ」

「えっと、俺どうしたんだっけ？」

「というかここはどこだ？ まだ地下にいるみたいだけど。そもそもどうやってあそこから助かったんだ？」

「どうしたもこうしたもねえよ。お前が絶好の狙いやすい位置で攻撃されかけてたから俺が助けてやったんだろ」

「どっやって」

「自慢の水遁でな、あいつら全員文字通り水に流してやったんだ」

ぜ？ 感謝しろよ」

まじでか。さっきの水はウネリが元凶だったのか。

「よくそんな大量の水を出せたな」

「俺を甘くみるなつての。どうだ、見直したか」

こいつ、相変わらずだな。無駄に反抗したくなる。

「ほんの少しだけな。具体的にはアカデミーの床のタイル1枚分くらい」

「意味分かんねーよ」

「それよりも、ここは安全なんだろうな？」

それが一番問題だ。

「ああ、ひとまずはな」

俺はほっとする。

「危険には変わりないぜ？」

「なんでだよ？」

「お前も気付いているだろ？ 二二二では気配とかそついつのが全く感じられない」

確かにそうだった。初めの落とし穴の時も直前まで敵の気配は感じなかったしな。いや、ちょっと待てよ？ 白眼でも見えないレベルじゃ俺達にはどうしようもないって事じゃねえか！

「ただでさえ相手の本拠地だ。みんなと合流できるまで気をつけていくぞ」

「だな。そうしよう」

そしてふと不安になる。

「なあ、あいつら・・・無事だよな？」

「当たり前ーだろ？ 俺達が無事なんだから。無駄な事気にしないで行くぜ」

「あっああ、それもそうだな」

当面は自分の周りに集中だ。・・・それでも嫌な予感が頭をよぎる。

「お前って意外と心配性だな。たまには信用してやれっつての」

「分かってるから！」

「そういえば、人数が減ってるのに近づいて護衛しなくていいのかなあ？」

「あつちが断っているのだから、必要ないだろう。そこまで世話してやる必要があるか？」

ハヤシの言葉をフミシが一蹴する。

「いいえ、ないです」

一睨みされたハヤシは縮こまった。

おかしいなあ、フミシ先生は必要以上に任務に忠実な人。断られても横についていくような人のはずなんだけど。

その違和感の理由はハヤシには分かりそうになかった。

ワン！ ワン！

「あの声は！」

「ああ、間違いねえ」

すぐに向こうから忍犬に乗ったみんなが見えてきた。

ユウ先生にヒバリ、ナギト、それからケナミ先生にムソウ、ナツキ

さん。全員無事だ。

「おーい、こっちだぜ」

俺達は思わず笑顔になる。

「二人とも、怪我はありませんね」

「はい」「おつす」

「それは良かった」

うん？ なぜかみんなの顔が暗いな。

「何だよ何だよ？ 感動の再会なんだから、もつちよつと喜ばつ
ぜ」

ウネリが不平を言う。それにしてもどうしたんだろつ。

「そうも言っていてられないですよ」

「どうしたんですか？」

「俺達は間に合わなかったんだ」

ケナミ先生が言い捨てる。

「」「何に？」「」

見事にはもった。

「私達の目的が何だったか、忘れてはいませんか？」

目的……？

・

・

・

！？

「ま、まさか」

「おいおい、それって」

冗談じゃないぞ。

「お察しの通りです。カスムさんは……お亡くなりになりました。救助ならずです」

ユウ先生の声がいつになく冷酷に響いた。

第三十九話 力の枯渇

「そ・・・そんな」

思わず、声が震えた。

「私達がついたとき、カスムさんは瀕死の重傷を負って倒れていました。なんとか蘇生させようとはしたんですが」

「俺の力が・・・足りなかったせいなんだ！」

ナギトが叫んだ。

「そんな事はありません。君は全力を尽くしてくれました」

「けど・・・医療忍者は、命を救えなきゃ意味が無いんだ」

こんなに自分を責めるナギトを見るのは久しぶりだ。いつもは深く考えないお気楽者なのに。

「これから、どうします?」

ナツキさんがおずおずと聞いた。

「ここまできたんです。この際、山賊達を壊滅させましょう」

「護衛はいいんですか？」

「今後も彼らが我々の行く手を阻む事は間違いありません。一人殺されてるんです。もう遠慮する必要もありません。捕獲できなければ、最悪討伐にしてもかまいません」

場に緊迫した空気が流れる。

「討伐・・・ですか」

「ええ」

ごめんねおばあさん。ウミって人、もう無理かも。

薄暗い地下なのに、どんどんと風を切っていく。ユウ先生達が調べたものを情報源に、俺達は正面からぶつかる事を決意した。すでに何人か敵が現れたけど、ある者はムソウが焼き払い、別の奴はナツキさんが柔拳を喰らわせて、何人かまとめて出てきたらユウ先生が一気に始末した。

その度に悲鳴や怒声上がるけど、俺達がかまわずに進んでいく。しばらく行くと、開けた場所に出た。

「ナツキ、何か見えるようになったか」

「あそこ」

ナツキさんは右上の高い天井の辺りを指差した。

「なぜだかは分からないけど・・・木の根つこのチャクラの流れが捻じ曲げられています」

「なるほど。あれは」

「ユウさん、何か知っているのですか？」

「あそこにはまっついている黒い大岩、あれはチャクラの結晶です」

「」「チャクラの結晶だって!？」」「」

「って・・・何だそりゃ。」

「チャクラは言ってみれば、力を物質化したような存在である事は知っていると思いますが」

俺達は黙ってうなづく。

「あれは、それを寄り固めたものです」

「そんなものがあるなんて」

「いいえ、あんなものは自然には絶対にできません」

え？

「誰かが意図的に創ったもの。それもあれだけ大きいものとなると、素人技ではありませんね」

つまり、今まで気配を感じなくなったり、白眼が乱されてたり、壁にチャクラを吸い取られてたりしたのは、あれが原因だったって訳か！

「あんなものを持っているなんて」

「やはり忍びが背後についているのでしょうか？」

ケナミ先生が不安そうに言う。

「そうでない事を祈るしかありませんね。援軍は期待できませんし。ただでさえ今の木の葉は上忍陣が出払いきっているのですからなんてタイミング悪いんだよ。まっ、いるって決まった訳でもないしな。」

黒岩に近づいてみると、パイプみたいなものがつけられていた。

「どつやら、思った通りのようだな」

ムソウに言われなくても分かる。これは人の手で加工されたものだ。

「あいつら、よくこんなものを」

「なんだかちょっと気味が悪いね」

俺にはチャクラは見えないけど、少し敏感だ。一応何かは感じられる。この辺りだけ空気が重いんだ。

「カゲツ君、雷遁でここを切ってください」

見るからに重要ですよといった雰囲気の大い導線だ。

「分かりました」

俺はクナイを取りだすと、雷遁のチャクラを這わせる。

「でりゃー!」

導線は見事に真っ二つに……ならなかった。むしろ弾かれた。

「いてて。なんで切れねえんだ?」

「チャクラに切れ目がありましたよ」

あれ? おかしいな。確かに全体に纏わせれた感覚があっただけどな。

「なーにやってんだよ」

「所詮その程度か」

「う、うるせえ。もっかいやってやる」

俺は地面に落ちたクナイを持ち上げ、もう一度雷遁チャクラを流す。

「ちょっと待って下さい！」

ユウ先生が突然俺の手首を掴んだ。

「わわっ、一体何ですか？」

急に驚いた俺は一瞬チャクラを暴発しそうになる。

「ナツキさん、カゲツ君のチャクラを見てあげて下さい」

「えっと……？ 手先までチャクラが行っていないように見えます」

チャクラが行ってない？ そんな事があるのかな？

「やはりそうですか。思った通りです」

「どうなっているんですか？」

「感覚で気付きませんか？」

そりゃあもちろん。

「全く」「きっぱり」

「カゲツ君、今日どれくらいチャクラを使いましたか？」

「どれくらいって」

千鳥に大突破に烈風掌に……

「相当使いました」

どの技も全力だったからな。それにいくらか変な壁に吸い取られたし。

「完全にチャクラ切れです」

「ん？」

「自覚はないようですがもう満足な行動はできませんよ」

「そうですか……ってえっ、ええ!!?」

俺全然ダメじゃないか。これからって時に。

「残念ですが、カゲツ君は戦わないでください」

「全然そんな風には感じませんか？ 大丈夫ですって」

「カゲツ君！」

やべっ、怒られるか。

と思つたら違つた。怒声の替わりに浴びせられたのは、予想外の優しすぎる言葉だつた。

「あんまり無茶は得策ではありませんよ。君はまだ9歳、チャクラの容量も少ないです。今体を傷つけてどうするんですか？」

「……………」

何も言えなかつた。

「なーに気張ってんだよ。いつもみたいに何とかなるだろ」

ナギトが言う。

「ふつ、俺に任せれば大丈夫に決まってる？」

「それは無い」

「なぜだ!？」

「俺の方が強いからな」

ウネリ…………ムソウ…………

「そういう訳だから」

「この間のお返しって事で」

この間、雲忍の時の事か。

「おう、そうだな。頼んだぜ」

「任せとけっつの」

ウネリがピースサインをする。

俺はその指を後ろにピンと弾いてやった。

「いでででで！ 何しやがんだよ！？」

「みんなならまだしも、お前なんか頼れるかっての。俺が全力バックアップしてやらあ」

「決まりですね。ではケナミさん、頼みましたよ」

「はい 『通牙！』」

導線どころか、黒岩ごと粉碎された。啞然茫然ってこういう事だな。

「あれ？ 最初からケナミ先生がやったほうが良かったんじゃない？」

そう思ったのは秘密だ。

「では……行きましょー！」

第四十話 認識・セパレート

「ぐはあ！」

ムソウが最後の一人を倒す。これでこの隊も全滅だ。

「ナツキ、次はどうだ？」

「もうこの道にはいません。一番奥の部屋、そこで最後です」

チャクラを乱す岩はケナミ先生がぶつ壊した後で残った欠片を全部ユウ先生の巻物の中に入れてある。そのおかげでナツキさんの白眼も使えるようになったみたいだ。

「そうか、きっとそこに首謀者がいるはずだ。俺達をなめきつた奴に天罰を与えてやれ！」

「ケナミ先生、怖いって」

ウネリが冷や汗を流す。目とか血走っているし。もちろん気持ちには分かるけどな。ケナミ先生ってこんな人だったっけ？……………？

そんな事を考えていると、突然目の前が真っ暗になった。

「うっ」

耐えられずに俺はその場につずくまる。

「おい、大丈夫か！」

「カゲツ君！」

みんなの声が聞こえる。俺はなんとか自力で持ち直した。

「ああ、何とかな」

強がってはみたけど、これはきついな。チャクラを消費しているとはいつてもさっきまでは全く感じなかった。けど、今は立っているだけでも精一杯だ。

「大事ではなかったようですね。行きましょう」

俺が足手まといになっているのを感じる。せつかくついてきた結果がこれじゃどうしようもない。ちくしょう。

何とかしたい、何ともできない。悔しい、この上なく悔しい。その感情だけが俺の中で渦巻く。

「あそこだ」

ケナミ先生の声に俺が目線を前に向けると、最後の部屋はもう目の前にあった。見た目には普通の扉だ。だけど、とげとげしい気配

を感じる。この中にいる奴らで最後だ。今回の任務で散々邪魔されてきた元凶が消える。

ユウ先生が目線で合図を送る。

突撃の合図！

鉄の扉が蹴破られた。それぞれが忍具を持って中へ入っていく。俺も行きたかったけど、チャクラを使いきった俺に、それはできない相談だった。ユウ先生とここで待っておくしかない。

中からは意外にも声は聞こえない。ただ、キンツ・バシツと刃物が触れ合う音や何かが壁や床に叩きつけられる音が聞こえてくる。その雰囲気は俺の頬を冷や汗が伝う。

突然、中から誰かが飛びだしてきた。

「ひいつー！」

思わず悲鳴を上げた俺は後ろにのけぞる。その影を追う者が居ない事を確認すると、ユウ先生が追い掛けていった。俺の目視では捉えきれないほどのスピードだ。

「すぐに戻ります！ 自己判断で動いて下さいー！」

それだけ言い残して去って行った。

「……………」

この状況で一人ぼつんとしている俺、シユールだな。まあ面倒に巻き込まれるのもなんだし、このまま待つておくか。

「静かだな？」

それにしても静かすぎるぞ？ 何だか違和感を感じる。どんどんと不安が増していく。

俺は中をちらつとだけ覗こうとした……が覗けなかった。

ダンッ

飛びだしてきた影に俺は眼を見開く。

「くるな！」

前髪が伸びきった暗い風体の男だったが、問題はそこじゃない。そいつの腕にはヒバリが抱えられていた。

「は、離せよ」

もちろんだが、大人しく離す馬鹿はいない。獣のように歯をむき出しにして凄んできた。

これはダメだな。

「誰か！ ヘルプヘル・・・？」

一体どういう事だ？ 誰もいないぞ。俺の後ろでは気絶をしたヒバリが捉えられている。これって絶対・・・絶命？ 俺がまともに動けない事を知られたらまずい。ユウ先生が帰ってくるまでなんとか時間を稼がないと。どうすればいい？

周りに目をやるが、有用な物は何も落ちていない。この狭さじゃ口寄せも使えない。今持っているクナイ数本と手裏剣数個、起爆札一枚だけが最後の命綱だ。

「話をしようじゃないか」

俺は相手から目を離さずに、少しでも時間を引き延ばす作戦に出た。

「なんだ、こいつらは？」

「ムソウ！ 左！」

寸前で俺は飛んできた矢を避ける。

「ちっ、次から次へと」

予想以上の抵抗に、俺達は苦戦を強いられていた。俺もウネリも血の跡がついている。それが返り血なのか自分のものなのかは分からない。

そしてそれ以上に困っている事がある。

「ちきしょう。みんな何処に行った？」

目の前に夢中になって気が付くと他のメンバーの姿がウネリを除いて無くなっていた事だ。幻術ではない。何度も確かめた。

！？

後ろに立っている大男の存在に気が付き、振り向きざまに蹴りを入れた。ウネリがそれに追撃する。

「今のは危なかったんじゃねえか？」

「余裕だ」

だが今の俺たちに気を緩めている暇は無い。

『八卦空掌』

再び数人を跳ね飛ばす。さすがに息が切れてきたわね。それでも敵は次から次へとわいてくる。いつのまにか人数が逆転している現状で、これは大変な作業。とにかく、全員を倒すしかないね。

「しつこいわね・・・」

一言つぶやいて、柔拳の構えを取る。私が・・・仕留める。

「ひいひいひい」

「ナギト！」

た、助かった。ケナミ先生がいてくれて良かった。受け止めてくれたのは狼牙だけだ。

「これじゃきりがないな。ナギト、耳貸せ」

うん？ 何だ？ 取りあえず、俺じゃこの状況を打開できる気がしない。聞いてみるか。

「な、なんです」

「さっきから、奥にあるあの出口が怪しいように思っただが、どうだ？」

「何がですか？」

どういつもあそこから出てくる事か？

「他のメンバーが消えたのと、向こうの扉が開いたのはほぼ同時だった。しかも、ナツキはここが最後の部屋だと言っていたにも関わらずだ」

「は、はあ……」

？

？

？

ナギトノリカイメーターハフリキレタ

「どうも向こう側からは匂いがしない。こちらから開けられないのも変だし、あれは実体がないように思う」

「実体が無い？」

「まあ、つまりだ。あれを目がけて攻撃をぶつけてみようじゃないか」

「いいから早くしろ！」

扉の所で敵を抑えている狼牙先導の忍犬達が吠えたてる。

「よし、ナギト。狙いは誰かが入ってきた瞬間だ。思いつき扉に傷をつけて飛び退いてくれ。そしたら俺が何とかする」

「了解」

俺は身構える。基本的に体術は苦手なんだ。精度も低いし速さも無い。それでも、今やらなきゃ意味が無い。扉の先が動いた瞬間だ。俺はその時をじっと待とう。

俺はヒバリを抱えている奴の目を真っ直ぐに見た。きれいな茶色の瞳は開ききっていた。刺激しちやいけない。あくまで毅然とするんだ。頑張れ俺。

「その子は俺の仲間なんだ。離してくれないか？」

第四十話 認識・セパレート（後書き）

話進んでねー！

2話前辺りでくるはずだったシーンがようやく次回に書けそうです。

第四十一話 容赦のない知人

「その子を離してくれないか？」

俺は単刀直入にそう言った。

「離して……オイラに何の利があるってんだ」

そいつは興奮したように言った。

「逃がしてやってもいい」

「そんなの……嘘に決まってる！」

「それならどうするんだ？ 俺たちになにを望む？」

ここはあくまで冷静に対応だ。でなきゃヒバリも俺も危ない。

「それは……」

「俺は事情を聞いた。生活のために、仕方なくこんな事をしていくんだろ？」

「……」

「もう元凶はいないんだ。話によれば谷の国も豊かになりつつあるって聞いた。無理する必要もないんじゃないか？」

ゆっくりとした口調で俺は続ける。

「もしもあなたに良心が残っているなら、俺を信じてほしい」

もつとも、ほとんどは嘘八百だ。俺の権限で決められる事でもないし、1人だけ特別扱いする訳にもいかない。敵同士なんだ。相手もそれは分かっているはず。

「どうして……知っているんだ？」

「ある人から聞いた」

「ある人だ？」

「凍土ウメとユキだ……といっても知らないか」

ちらつと横に目をやる。ユウ先生はまだ帰ってこない。ヒバリも目覚めない。早く……俺の中に焦りが出てきた。

「!?!」

うん？　一瞬だけ動揺が目に見えただのを俺は見逃さなかった。

「知っているようだな」

「今、どうしている？」

「はい？」

「ウメばあさんとユキはどうしているんだ？」

知り合いなのか。

「まあ元気でやっている」

「そうか」

って何普通に喋ってんだよ俺。ここで会話が終わっちゃったじゃないか。もつと何か、長く話せるものはないか。焦りながらもクナイを持ちかえて、攻撃に備える。
すると、予想外にも向こうから口を開いた。

「おまえは二人とどういう関係なんだ？」

「宿で少し世話になった。少し知っている程度だ」

「そうか……なら問題ないな！」

それだけ言うと、目にも止まらない早さで見慣れないクナイに棘をつけたようなものを俺に向かって飛ばしてきた。

「えっ？」

速攻で避ける。それでも、近くから投げつけられたこともあって頬に少し血の筋ができた。言うまでもなく、これは忍びの動きだ。素人にできるものじゃない。

攻撃はまだ終わらない。何と今度はゆっくりながらも印を組み出した。

おいおいまじかよ。

初動だけで分かる。これは俺の良く知っている印だ。風遁・大突破に間違いない。こんな狭い場所で発動するなんてどうかしている。自爆する気か？

なんて考えている場合じゃねえ！ 同じ風力で打ち消せ！

『風遁・大・・・』

そこまで言っただけで気が付いた。大技の大突破を扱えるだけのチャクラが俺には残されていない。あいつはあと一回で組み終わる。こうなったら一か八かだ。俺は考えるよりも先に跳び出した。

ところが次の瞬間、予想外の動きがあった。

ドドン！

大きな音と共に扉が勢いよく開いて、そいつは押し倒された。

「な、なんだ？」

啞然となった俺は思わず動きを止める。

「やった！ 成功だ」

「ナギト、お前もよくやってくれたな」

なんとケナミ先生とナギトがついさつきまで無人だったはずの部屋から飛び出してきた。

「うん？ カゲツか」

つてびつくりしている場合じゃねえ！ 今しかチャンスはない。俺は急いで扉の後ろへ回り込んだ。そして倒れているヒバリを抱え込む。それに気が付くと、むこうはそれを邪魔だてようとしてきた。

「ぐわあ！」

突然うめき声を上げると、力を抜いてきた。俺は反動でヒバリと一緒に後ろへ倒れ込む。

「いてて、一体どうなってるんだ？」

そう言いながら視線を前に向けるとヒバリが立ち上がった。

良かった。目が覚めたのか。

安心したのもつかの間、また倒れてしまった。

「おおい！？」

「ヒバリ！」

「どうした!？」

俺達3人が駆け寄る。

「うん、大丈夫だから。それよりも」

ヒバリが目線で合図する。後ろではちょうど敵も起き上がったところだ。ヒバリがやったのだろうか？左肩から血を流している。

4人全員で忍具を構え、15メートルくらいの距離を置いて相手に対峙する。見た目ではこちら側が圧倒的に有利だ。それでも、ここでは何が起こるか分からない。

俺も緊張で押しつぶされそうだ。

「お前達は何か連携での技を持っているか？」

ケナミ先生が小声で聞いてくる。

同じ班員として持っている事はもっている。だけど全く持つてお粗末なものだ。練習ですらよく失敗するし、成功したとしてもそれほど威力のある技じゃない。しかも俺は今体術のうちチャクラを消費しないものしか使えないし、ヒバリもどこまでやれるか分からない。

それでも

「あります。今すぐできます」

「そうね」

「もちろんだ」

今やらなきゃ意味が無い。

俺達は一瞬で三角形状に並んだ。ケナミ先生と狼牙が前で、後ろは真ん中が俺、右がナギト、左がヒバリだ。敵は慎重になっているのかさつきからピクリとも動かない。

「行くぞ」

俺達は黙ってうなづく。

『牙通牙』

一人と一匹が正面から突っ切る。相手は無駄のない動きでそれを避けた。それをケナミ先生達が追う。熟練者だからこそ牙通牙を使いながら細かい動きができる。

『土遁・土流槍』

ヒバリが補強されていない地面から槍を出して退路を塞ぐ。

『水遁・水天彷彿』

さらにその槍からナギトが水の塊を出して、敵を狙う。

「くっ」

そしてケナミ先生が回り込む。これで仕上げだ！俺が死角から毒を塗ったクナイを持って近づく。そして腕を振り上げた。

スカッ

思いつきからぶった。俺は前のめりになる。やっちゃまった。そう思った。次の瞬間、俺は宙に浮いていた。

「ひっ」

情けなく悲鳴を上げてしまう。体勢が立て直せねえ！そのまま俺は壁に叩きつけられる。

「カゲツ！ 左に避ける！」

その声のままに俺は避ける。目の前を俺が落したクナイが通り過ぎていった。このままだと危ない。俺はすぐに立ち上がるうとした。

できなかった。脚に激痛がはしったからだ。

「カゲツ！」

恐る恐る目をやると、両脚に千本が刺さっていた。そしてまた蹴り飛ばされる。ちくしょう・・・痛くてまともに動けねえ。俺はもう敵のなすがままだ。このままじゃいけない。俺はほとんど感で手裏剣を投げた。

一瞬だけ敵の攻撃が止む。その隙をついて、何とかケナミ先生に助け出してもらえた。

「げほっ」

俺は口から血を吐きだした。

「これはまずいな。ナギト！ カゲツを頼む」

「分かった」

ナギトが近寄ってきた。入れ替わりにケナミ先生が向かう。

『土遁・土流槍』

ヒバリと一緒に対峙してくれているみたいだ。

「じつとしてるよ。カゲツ」

言われなくてもそうするしかない。いや、できない。

『掌仙術』

一瞬しみて、それから傷が治っていくのが分かる。それでもチャクラは回復しない。この廃鉱山の独特の空気が邪魔しているみたいだ。ただただ苦しい。それだけを感じる。視界がだんだんと狭くなっていく。

ちくしょう・・・また迷惑をかけるのか？

俺は深い闇に飲みこまれていった。

第四十二話 虚しさの戦い

俺は暗くなる視界の中で、沈んだ思いになっていた。

結局この程度かよ。俺は何をしにきたんだ？ いきなりチャクラ切れなんかを起こして迷惑をかけた。時間稼ぎつてのも半分は嘘だ。失敗を何とか取り返そうと、チャンスにさえ思っていた。なのに・
・結局状況を悪くしたただけじゃないか。情けねえ。

俺の中でどンドン負の感情が渦巻く。

「みんなならまだしも、お前なんか頼れるかっての。俺が全力バックアップしてやらあ」

俺、馬鹿じゃねえの？

俺は口だけの奴は大っ嫌いだ。そんなのにだけはなりたくない。意地でも……だ。力がないからこうなる。

力って何だ？ 俺は今までなんのために修行してきたんだ？ 父さんやヤシロ先生やユウ先生や親方達から何を教わってきたんだ？ 俺の実力はこんなものじゃない。このままで終わるなんて絶対に認めない。

俺は歯を噛みしめる。

「なんだ？　これは？」

思わず声に出た。カゲツのチャクラの動きが変わった。それだけじゃない。質もだ。

「一体どうなっ！？」

カゲツが突然飛び起きた。

「おい、大丈夫なのか？」

「……………」

「おいカゲツ！」

「ああ、大丈夫だ」

外傷は治療してある。その証拠に傷口はほとんど塞がっている。中部にもそれほど大きな傷は無かった。といっても、2か所骨折をしていたはずだ。なのにどうして立ちあがれる？　それに確かチャクラ切れだったはずじゃないのか？

俺はもう一度カゲツに目をやる。

全身からチャクラがあふれ出している。さっきまでと明らかに違う。どうやったらこうなるんだ？　俺には理解できそうにない。それにしてもこのチャクラは普通じゃない。無理やり引き出せない場所のチャクラを引き出したみたいだ。

少し怖いとまで思える。

「本当に・・・大丈夫なんだろうな？」

カゲツは俺の質問には答えずに走りだした。

「おい！」

その方向に目をやると、敵がバランスを崩してよろけたところだった。カゲツはそこへ向かって一直線に駆けて行く。右手からはチヤクラをそのまま荒っぽく放出している。それもどこか棘棘しいチヤクラだ。

それを遠慮なく敵にぶつけた。それだけで吹っ飛ぶ。さらに追い打ちをかけるように回し蹴りを喰らわした。ヒバリとケナミ先生も啞然としている。最後に崩れ落ちた敵へ向かってクナイを振り下ろし

突き刺した

俺の前で鮮血が飛び散る。それを俺は無言で見つめていた。何の感情も浮かばない。自分が自分でなくなっただけだ。

（そいつ）が口を開く。

「ちくしょう・・・ユキ・・・ウメばあさん・・・」

俺の知っている名前をあげた。やっぱりそうだったのか、思った通りだ。

「お前、凍土ウミだろ？」

「……………ああ」

「ちよ、ウミって確か」

ヒバリが驚いた声を上げる。

おばあさんに助けてやってくれと泣きつかれた娘婿。ユキちゃんがひたすら話題を避けていた兄。そいつが目の前にいる。

「なんで……………こうなっちゃう。俺はただ……………」

ウミはつぶやく。俺の心がざわつく。

「幸せな生活に戻りたかったんだよな」

俺の言葉にウミが目を見開く。

「何を」

「二人から聞いたっていつてただろ？ もちろんお前の事もな」

といつても、ユキちゃんは何も言いたがらなかったけどな。

「もつと前に会ってさえいれば何か変わったかも知れないな」

ケナミ先生がぼつりとつぶやく。

ウミの体が痙攣し、苦痛に悲鳴を上げる。

「火の国の一員として、俺がお前の代わりに将来必ず谷の国が誰も泣かない国にしてやる。ここで約束する」

ウミの涙が何を意味したのかは分からない。

「だから、もう苦しむなよ」

俺は落ちていたクナイで僅かに燃えるウミの命を刈り取った。

「……………」

「カゲツ君……………」

「なんで…………元々悪いのは火の国じゃないか」

結局、自分で原因を作って自分で終わらせたただけだ。大きな被害を残して。

「俺達じゃどうしようもない事だっただけだ」

「けれど…！」

ケナミ先生はゆっくりと首を横に振った。

「……………」

「気にするなよ。俺達のせいじゃないって」

ナギトが言う。確かにそうだ。だけど俺達の国が五大大国と呼ばれているのは、こういう犠牲を払っているからじゃないのか？ それでその恩恵を受けているのは俺達だ。

俺の中で、疑問が渦巻き始めていた。

「良かった！ みんないたよ！」

「これで会えなかったらどうしようかと」

「同感だ」

「ナツキさん！ ムソウ！ ウネリ！」

さっきまで誰もいなかったはずの部屋からぞろぞろと飛び出してきた。

「おいおい、なんで俺が一番最後なんだ？」

「えっ？ いや、何となく」

「ったく、この俺を後回しだなんてどうかしてるぜ」

「はははは………また始まったよ。」

俺は少しげんなりした。

「お前達、一体どうしてたんだ？」

「それが、急に部屋に結界のようなものが張られて出られなくなつてたんです。それが突然消えたので、やっと出られたところです」

「そうか。三人共怪我はないみたいだな。良かった」

「みなさーん！」

今度は奥からユウ先生が走ってきた。

「無事でしたか！」

「遅いですよ」

俺は文句を言う。

「申し訳ありません。さっきの者についていったところ、この鉱山全体の制御をおこなっていたらしい部屋を見つけたものですから」

「制御、ですか？」

「はい。それを確認したところ、ある人物のチャクラに反応して動いていたようですが・・・どうやら止まったようですね」

チャクラに反応・・・止まった？ もしかして！

俺は思わずもう動かなくなったウミを見る。

「タイミングからしてこいつだろうな。元々こんな奥にいたんだ。こここの責任者だったのかも知れない」

ウミは何も文句は言わなかった。

「いでいでいで」

「無理するからこうなるんだぜ？」

俺は2つ目の目的地の波の国の宿でナギトに治療してもらってるところだ。

「そうですね。あなただけの体じゃないんですからね」

俺はおじんかよ・・・

「分かりましたよ」

はぁ・・・治るまではまだしばらくかかりそうだな。

それにしても、ケナミさんから聞いたカゲツ君の話は気になりますね。いきなりチャクラがわいて出るなんてにわかには信じられません。それに何か違和感を感じるものだという事ですが・・・・・・
要注意といったところですね。

第四十二話 虚しさの戦い（後書き）

ひとまずひと段落。次回くらいでこの章終われるように頑張ります。

第四十三話 密談ユウ×フミシ

目を覚ますと、もう夕方だった。ナギトは出かけているみたいで部屋には俺以外誰もいない。立ちあがって窓を開けると夕日が目に入って眩しかった。街の往来は多くてにぎわっている。

「うっ、いてえ」

治療してもらったとはいってもあくまで応急処置。体の深い傷までは治っていない。俺はやせがまんて伸びを試してみた。

「ああああああああああ」

すぐに後悔した。叫び声に近所の鳥達が飛び立つ羽音が聞こえた。

「では、このまま続行させていただけませんか」

「もちろん。これは何よりも最優先させている事だ。たった一人犠牲になった程度で何だと言うのだ」

「.....」

たった一人……ですか。この方たちはどういう神経をしているのやら。我々忍びの方が甘く感じられるほどですね。

「用がそれだけならばもう行け」

「では一つだけお聞かせ願います」

「なんだ？」

私は語尾を強めています。

「なぜ、我々に嘘をつくのですか？」

「なに!？」

「大名様はここにはいない。今頃雷の国から火の国へ帰国中。違いますか？」

今知らなくてはならない事。それを余す事なく聞きました。

「貴様!」

「我々も甘く見られたものです。このままでは国は内側から崩壊しますよ」

私がそれを知ったのはつい数時間前の事でした。

「ユウ、大事な話がある」

宿へつくやいなや、フミンさんが私を呼びとめました。

「どうなさったのですか？」

「その前に防音結界を張るぞ」

どうやら本当に重要な事のようにですね。気持ちを入れ替えましょう。

「これでいいな」

「では話をしていただきましょうか」

「ああ、結論から言つ。今回の任務そのものが国の自作自演だ」

自作自演？ 一体何の話なのでしょう？

「理解できませんね。もう少し詳しくお願いします」

「大名視察団そのものが嘘っぱちだという事だ。そもそも大名は今ここにはいない」

冷たくつきはなすような言い方。嘘には思えませんし、嘘をつく理由もありませんね。

「なるほど。大名様が居ない事を隠しているのは薄々勘づいていましたが、何を根拠に？」

「ある人からの命によつて、この一週間ワシは国の上層部を密かに見張っていた。油女一族であるワシらだからこそできる事だ」

ある人・・・ダンゾウですか。

「谷の国での会見中、何が話されていたのか。教えてやろう」

空気が変わるのを感じます。次の瞬間、カスムさんや他の役人の方の姿が現れました。恐らくフミシさんの蟲でしょう。

「これで本当に大丈夫なのでしょうが？」

弱気そうな若者が声を出します。谷の国の方でしょうか？

「なあに、お互いのため。損はさせませんよ」

私は押し黙って聞きます。

「どちらにせよ、忍びが力を持ち過ぎるのは望ましくない」

「全く同感だ。最近では影響力が減り、里は別の国のようになってる」

「そもそも国を守るための一組織だというのに、なげかわしい事

だ

これは・・・!

「他の国との協力もいくらか得られた。思う事はどこも同じ。戦力は欲しいがそれはあくまで自分の手に収まる範囲での話」

「忍びを持たない我々にとっては裏で動きやすくなるという事です
すね」

「そういう事だ」

「ユウ、どう思う」

「国にとって忍びの力が強大になりすぎるのは好ましくない。なるほど、確かにそうです。しかし、それが何を表しているというのです?」

「最近、上忍が次々と護衛任務にかりだされているのは知っているな」

「ええ、もちろん。しかも方角も時期も作為を感じるほどに固まっています」

!!

「なるほど。大体つかめてきました」

「次はこれを聞いてくれ」

「これは・・・野外キャンプを張ったときのものですか」

間違いありません。服装とその汚れから判断できます。

「その通りだ」

「たった今連絡が入りました。無事に大名様は風の国へ到着されたようです」

「そうか。順調だな」

「次はこれだ」

谷の国でのものでしょうか？ 説明はありませんが、そうだと推測できますね。

「交渉は上手くいったようですね」

「もちろんだ。持ちかけた側に拒否されてはお話にならないからな」

「雷の国ではどうでしょうか？」

「心配ない。あそこの大名様は忍びが嫌いだ」

「しかし、忍び達は賛同してくれないでしょうね」

「心配ない。口実を作って上手い事出会わないように考えてある」

「さすが」

「おだてても何も出ないぞ？」

「「ははははははははっ」」

笑い声が不気味に辺りに響き渡っていますね。

「・・・なるほど。各国揃ったの軍縮ですか。良い事ではないですか。無論我々にとっては生活に困るところがありますが」

今は平和の時代へ向かいつつあります。第四次忍界大戦を阻止するには今のうちに信頼関係を築き、侵略用の戦力としての忍びではなく、必要最低限の自警団としての役割にすべきでしょうから。

「それがどうも今回ののは純粋な考えの下でのものではないらしい」

「先程の話に出ていた【裏の動き】が関係しているようですね」

「ああ、そうだ。奴らは忍びの動きを鈍化させる事によって、不正を行いやすくして私腹を肥やそうと考えているらしい」

必要最低限、ですがその必要最低限は必ず必要となります。それが忍びの存在意義ですから。

「カスムさんの死についてあわてなかったのも、谷の国と協力しようとする上で邪魔になったから・・・ですね。あれだけ大きな動きをすれば隠し通せなかった事でしようし」

「恐らくな」

自国の闇の深さ。痛感します。

「結局、あいつも捨て駒でしか無かったという事だ」

感情のこもっていない声でフミシさんは言い捨てました。

「そして、捨てた彼らもまた然り・・・ですね」

「だな」

秋風が今は無性に寒く感じます。

「それはそうと、山賊達が使っていた忍具を垂れ流したのはカスムだろつが、あの大がかりな仕掛けや術は素人には無理だろう。先に捕まえた奴らから何か情報は得られたのか？」

「どうも上手くいっていませんねえ。得られた事は得られたのですが、どれも抽象的なものばかりです」

「例えば？」

「分かったのは全てたった一名の忍びが指導したという事だけです」

そう、100人は下らない山賊達を。

「たった一人だと！」

「私にもわかには信じられませんでした、それが事実のようです」

「一体誰なんだ？ 所属は？」

「分かりません。いつも無地の額当てをしている灰色の瞳をした青年だったそうです」

「そうか・・・まあいい。また何か分かれば連絡しあおう」

立ち去ろうとするフミシさん。もう一つ聞いておきましょうか。

「フミシさん」

「なんだ？」

「今までの事、私に言ってしまったてもよいのですか？」

「少し勘違いをしているようだな」

やや不機嫌そうに言う。

「形は違えど常に木の葉の味方だ。ワシも、あの方もな」

「まったく、驚かせるんじゃないぞ」

「本当よー」

「悪い悪い」

俺の叫び声を聞いて、近くで休んでいたナギトとヒバリが駆けつけてきた。はははは・・・

ちょっと嬉しかったりする。

「まあなんでもないんだったらいいな」

「そういえばヒバリは大丈夫なのか？」

確かウミに人質にされてた時は気絶させられていたはずだけど。

「うん、おかげ様だね。助けに来てくれてありがとう」

「えっ？ いや、あれはただの成り行きだったんだけど」

予想もしてなかったしな。

「それでも、ね」

にっこりと笑って部屋を出て行った。

「……………」

ナギトはそのまま座っている。

「あれ？ どうした？」

「俺は!？」

「へっ？」

「なんでカゲツには言ってる俺はノータッチなんだよ!?!？」

「知るか」

ガクッ

ナギトが凹んだ。まっ今日もまた平和だな。

第四十三話 密談ユウ×フミシ（後書き）

あれ？ 一話に入りきらなかった。

もう一話この章続きます。

第四十四話 それぞれの思い

夜になつても、街はにぎやかだな。波の国は田舎だつてきいたけど、全然そんな事ないみたいだな。

「ちよつとだけ木の葉に雰囲気似てるよね」

そういえばそんな気がしないでもない。建物の形とか。

「そうだな。なんだか暖かい感じがするよ」

「俺ホームシックになつたかも」

「お前が？ ははは・・・つて痛つてえー！」

あう・・・あばら折れてたのまた忘れてた。笑つと無茶苦茶痛い。それも我慢できる限界を超えるくらいにだ。

「だ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

嘘だ。全然大丈夫じゃない。冗談じゃないぞこれは。

「笑うつて酷いんじゃないの？ 罰が当たつたんだよ」

「うるせえや」

またまた馬鹿なやり取りをやる俺達。その目の前に見覚えのある人影が見えた。

「ずいぶんと楽しそうじゃないか」

「いや、どこがって・・・あ、あれ!？」

なんでここに居るんだ？　かなり予想外な人を発見。

「ユキちゃん！　どうしてここに？」

そう、俺達が出会ったのは谷の国の宿で働いていたユキちゃん。ついでに言えば、向こうにおばあさんも見える。

「ああ、ちょっと宿からお使いを頼まれてね。ここ波の国まで買い出しにきたんだ」

「ずいぶんと遠くまで来るのね」

「谷の国からは結構あるぞ？」

谷の国と波の国は隣同士の国だけど、それでも歩いて船に乗ってとじていれば3〜4日はかかる。もし俺達が全力で寝ずに走ったとしても1日でつくかどうか分からない。何かこの国でいいものあるのかな？

「それにしても、あんた達のほうが後に到着ってどういう事だい？」

「ああ、それがさあ・・・」

そこで俺は思わず口ごもった。だってそうだろう。ただでさえ兄のウミの話をする可不機嫌になっていたんだ。敵とはいえウミに直接手を下したのは紛れもなく、この俺だ。そんな事言える訳がない。おばあさんに至ってはシヨック死してしまいそうだ。

「ん？ どうしたんだい？」

「まっ、色々あったんだよ。なっ」

ナギトが機転を利かせて話を取り次いでくれた。

「うん、まあそんな感じだ」

俺は適当に話を合わせる。

「気になるじゃないか。まあいいんだけどさ」

上手く誤魔化せて・・・はいないな。

「やれやれ、追いついた。おやまあこれはまた出会いますたな」

「あ、こんにちはー」

「おばあさんお久しぶり、でもないね」

「そうだな。1週間も経ってないか」

しばらく雑談の花が咲いた。

「答えてはくれないようですね」

「いや」

「違いますか？」

といても、答えてくれないでしょうね。正直私もこの場ではそこまで話を広げたくありません。

「……………」

これ以上話の進展は望めなさそうですね。

「今回は私から特別に言う事はありません。もちろん、火影様には報告いたしますが」

私は立ちあがります。

「それから……国の繁栄には信用が不可欠なんですよ？」

伝えたい事だけ伝えておきました。

「いけない！ 早く行かないと店閉まっちゃうんだっ」

そついやユキちゃん買い出しにきたって言ってたな。

「そうかー残念。またね」

「ああ、また後で」

「あたしゃ、走るのがつらいよ。ユキ、先にいっておいておくれ」

「分かったよ。おばあちゃん」

ユキさんは先に走って行った。ところで、何を買いにいったんだろ
う？ ちょっと気になるな。

「行きました」

うん？ おばあさん、どうしたんだ？

「噂にききに、山賊の一団は壊滅したそう」

！？ まだ外に伝えてはいない情報なのにどうして知っているんだ

？ 時々この人怖いぞ。

「なぜ知っている？ まだ発表されていないはずだ」

ナギトが恐る恐る聞く。

「さつき、あんたらと同じくらいの年頃の緑色の髪をした女の子が話していたです」

「……………」

「……………」

「……………」

理解した。

「あいつまた勝手に言いふらして」

「呆れたな」

「アオ八ちゃん……………」

お喋りも度がすぎると困ったもんだな。後はウネリとかウネリとか……………」

つーかこれはダメだろ。後でフミシ先生にチクつとこ。

「話を戻しませ」

えっと……………何だっけ？

「その、リクとウミはどうなったのですか？」

「リク？ ああ、娘婿さんですか」

「そうですか」

「ウミさんは確かお孫さんでしたね」

おばあさんはこくりとうなづく。ああ……気まずい！

俺がヒバリとナギトのほうを向くと、二人とも目をそらした。俺が言えと？ そうですか、そうですか。なんて無茶な。いや、今だけでも黙っておこうよ。そりゃあ、いずれは知る事になるだろうけどな。

「そうですね。理想の形にはできませんでしたよ」

「……でさね」

リクは捕まえて国へ引き渡した。そしてウミは……

事情を知っているだけに二人も落ち込んだ顔をしている。

俺はこの後に事実を知らされる事になるだろうおばあさんの事を考えた。まあ悲しむのは当然だろう。最初にウミの名前を覚えてくれた時にも「かわいい」って言ってたくらいだし。

それに、生活はどうだろうか？ 元々貧しかった事が山賊の誕生につながった事から考えても、それほど良い状況じゃないだろうな。今はユキちゃんが宿での仕事で頑張っているみたいだけど、それは

俺達と同年の子供が一番の働き手になっている事の裏返しだ。

二人を失う事は、ますます追い込むことになるだろうな。それなら、今黙っていてもどうしようもない。むしろ今伝えないと確実に状況は悪くなる。だけど……

「言ってくだせえ」

おばあさんの目は覚悟に満ちていた。責任として言わないとダメだよな。

「分かりました。余す事なく伝えましょう」

悲しみは早く過ぎ去ってしまうほうがいい。

「どうだったか？」

帰ってきたユウに聞く。内容は役人側の態度。

「相変わらずですね」

分かっていた事だがな。

「そうか、まあいい。後はワシら木の葉で話し合うべき事だ。態

度が決まれば三代目や大名様も動くだろう」

「ええ」

このような事が続けば国は内側から崩壊する。せつかく外は静かになりつつあるのに、だ。あの方が言った最悪の状況が脳裏をよぎる。

里と国との抗争

危ない芽は早い内に摘んでおく事につきる。

「あう・・・そんな殺生な」

俺は少しも欠かすことなく淡々と事実だけを伝えた。二人が敵として俺達の前に現れた事、俺達がそれを討伐した事。もちろん、ウミの死についてもだ。

おばあさんは泣き崩れた。きっと覚悟はしていたんだろう。それでも、俺が二人とも元気でやっていると言っ一握りの可能性を感じていたのかも知れない。

「気を落とさないで」

ヒバリが声をかけて、ナギトが横から抱える。

言わないほうが良かっただろうか。けど、例えそうしたとしてもその時はくる。罪悪感俺が引き受けた。それがウミへのせめてもの弔いだ。

「ユキちゃんには言っんですか？」

「今はまだ早えです。あの子はなっついていました」

「……………」

なっついていた……ね。俺は記憶の片隅にある両親を思い出した。もう遠い話だけだな。

「いつか、他の大切な人ができたときに、あたしから伝えますです」

「そうですね」

「おおーい！」

「あつ、ユキちゃん」

かなりの荷物を持って帰ってきた。本当に凄い量だ。ってあ、転んでごっちに。

「うわー!」

ナギトが荷物で埋まった。

「あつ、ごめん」

「重い」

体重が？ って言うとキレられそうだから止めておこう。

「早かったねえ」

「そうかな？ 秋刀魚は最後の一尾だったよ」

「それは良かった」

ユキちゃんがしばらく悲しみを知る事はない。

これで・・・良かったんだよな。残暑の風に無駄な寒さを感じた。

明日、俺達は火の国へ向けて出発する。

暗い部屋に人の姿が見える。長身で比較的美形な灰瞳の若い男と、対照的に背の低い中年の男だった。

「成程。まさか全滅とは驚いたな。並の忍びなら軽くないなせる実力はあつたはずだ」

「左様で」

「木の葉隠れか。上忍が2人に中忍が1人それから下忍が5人ね」

手元の紙に書かれた文字に目線を落とす。

「鳥鳴ヒバリ・・・日向ナツキ・・・おお？ こいつは？」

「どうされました？」

中年男は首をかしげる。

「ちよつと興味がわいてきたよ」

懐疑的に自分も文字を見る。そこにはこの名前が書かれてあつた。

夜星カゲツ

第四十四話 それぞれの思い（後書き）

この章もこれにて終了！

次からはしばらく息抜きな話だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1953r/>

SHINOBI怒涛伝

2012年1月13日23時50分発行